

魔女想う、剣士の旅々

蛇廻

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人は魔女に、一人は剣士に。

二人のまだ幼い子供が歩き出した物語――

それは、彼らの想像をはるかに超えた運命だった。

目次

番外編

イレイナ誕生日記念回

1

第一章

第一話

7

第二話

11

第三話

17

第四話

22

第五話

31

第六話

36

第七話

47

第八話

55

第九話

61

第十話

70

第十一話

79

第十二話

86

第十三話

95

第十四話

102

第十五話

108

第十六話

112

第十七話

122

第十八話

130

第十九話

140

第二十話

148

第二十一話

160

第三十五話	246
第三十四話	239
第三十三話	234
第三十二話	229
第三十一話	222
第三十話	216
第二十九話	213
第二十八話	206
第二十七話	200
第二十六話	194
第二十五話	187
第二十四話	180
第二十三話	175
第二十二話	171

番外編

イレイナ誕生日記念回

今日、俺はたった一人で街へと出てきていた。目的はただ一つ……一週間後に控えているイレイナの誕生日プレゼントを買うためだ。ここ数年は会えていなかったから祝えなかったが、今年は一緒にいるわけだから、やはり何かしら祝わなくては。

「しかし、どうするか……金の心配はひとまずないし、久しぶりだからちよつと豪華にしてみてもいいんだが……」

しかし、久しぶりということもあつてかやはり難しい。豪華に、とは言っても、旅をする手前あまり荷物になりそうなものは避けたい。そうなつてくるとやはり限られてくる。

「旅をする上で荷物にならなくて、なおかつイレイナが喜びそうなもの……うくん……」

とりあえずイレイナが好きなるものを考えてみよう。まず一つ目……パン！……誕生日プレゼントにパンって……どちらにせよ今日買うものでもないな。二つ目……本！いや、物によるが場合によつては荷物になるよな……。それじゃあ三つ目……旅！……誕生日プレゼントだって言ってるんだろ。

「誕生日プレゼント考えるのってこんなに難しいことだったかな……昔はどんなの渡してたっけ？」

ちよつと昔を振り返ってみよう。……あれ、何してたっけ？当然プレゼント買えるほどの金なんて持ってなかったから、確か……家族で誕生日会をやってたんだっけか。クツソ昔の俺役に立たねえ……。

「マジでどうしよう……」

「あれ？ユウマさんじゃないですか」

「ん？……ああ、サヤか」

声をかけられ振り返ってみれば、そこにはサヤがいた。

「なんでここにいるんだ？」

「仕事ですよし・ぐ」と!!ほんの少し前に到着したところですよ……で、ユウマさんは何をそんな右往左往しているんですか?正直怪しいですよ」

「え、マジで?」

「マジで。もう怪しくて怪しくて一回捕まえようかと思っただけですよ」

「おいちよつと危ねえな」

「それで、何してたんですか?」

「いや、一週間後にイレイナが誕生日でな……こうして誕生日に一緒にいられるのって何年ぶりとかのレベルだから、ちよつと豪華なプレゼントを用意しようと思っただけ……何をプレゼントすればいいか一向に決まらなくてな……」

「は?イレイナさんが誕生日?え、いつ?」

「え、だから一週間後」

「そんな大事なこともなんでもっと早く言ってくれないんですか!?僕知りませんでしたよ!!」

「いやそんなこと言われても……」

「こうしちやいられない!僕も急いでプレゼントを用意しなければ!!」

「え、あ、おい!!お前仕事は!!……行っちゃった……」

あいつの中の優先順位ってどうなってるんだ?絶対イレイナ<<<越えられない壁>>>仕事とかだろ。うん、絶対そう。

「……そういえば、イレイナがつけてるネックレスって、サヤがプレゼントしたものって言ってたよな……。なるほどアクセサリーか……」

ちよつと見てみるか……。いや、それでサヤと被ったりしたらアレだよなあ……。試しに他の人たちに聞いてみるか?すぐに聞けそうなのは……。サヤとユリーぐらいだが……。ユリーは論外だな、うん。となると残りはサヤか……。よし、追いかけよう。

……

「つーわけで、力を貸してくれ」

「プライドとかそういうの全くないんですね、ユウマさんは」
「必要ないからな」

今の俺にとつて重要なのはプライドとかじゃなくてどうイレイナのプレゼントを選ぶかだ。そのためにはプライドなんてかなぐり捨ててやるさ。

「とりあえず、サヤはプレゼント何にする予定なんだ？」

「まだ決めてませんよ？さつき知ったばかりですから」

「ネックレスとかじゃないのか？」

「ネックレスは前回プレゼントしましたから、今回は別のです。ああ何にしようかなあ、イレイナさんに似合うもの・・・イレイナさんに似合うもの・・・」

随分とまあ熱心だな・・・。仕事は大丈夫なのだろうか、俺の知る由ではないが。てかサヤといってもあまり参考になるものはなさそうだ。やっぱりなんとか自分で考え・・・ん？

「これは・・・」

俺の目の前にあるのはどこにでもあるような服屋。そこで売られているあの物に、俺の目は止まった。・・・うん、これからの季節的にも良いんじゃないか？あまり荷物になることもないだろうし・・・。

そう思い立ったが吉日、俺は店に入ると、早速それを購入することにした。

.....

1週間が経過、今日はイレイナの誕生日当日だ。今俺の手元には二つのプレゼントがある。一つは俺が用意したもの、もう一つはサヤが用意したものだ。あの後同じく仕事でやって来たシーラさんに捕まり、サヤは連行されることとなった。幸いにもプレゼントは買った後

だったので問題はないが、残念ながら1週間の仕事言いつけられ、本日にイレイナの元駆けつけられなくなってしまった。そのためあいつが用意したプレゼントは俺が渡すことになったのだが……あいつことだから抜け出すなりしそうだけどな。

「イレイナ、今ちよつといいか?」

「ユウマ、どうしました?」

隣部屋に泊まっているイレイナの部屋へと入る。どうやら読書をしていたらしい、イレイナの膝上には一冊の本が置かれている。

「今日が何の日か覚えてるか?」

「今日ですか?」

本人だというのに忘れてしまっているのだろう、パツと答えが出て来ず、悩み始めてしまう。しかし、あまり時間をかけるのもな。

「今日はイレイナ、お前の誕生日だぞ」

「……ああ! すっかり忘れてました」

「そういうわけで、ほらこれ、誕生日プレゼントだ」

「わあ! ありがとうございます!! ……って、二つ?」

「ああ、こつちのが俺からで、こつちがサヤからだ」

「サヤさんから?」

「この間街で会ってな、イレイナの誕生日が近いつて話したら仕事そつちのけでプレゼント選びしてた」

「何やってるんですか……」

「まあその後シーラさんに連行されてたけど。それで当日に会えないから、俺が渡すことになった。〃誕生日おめでどうございます!〃だつてよ」

「ふふ、彼女らしいですね」

「素晴らしいながら、イレイナは早速プレゼントを開け始める。」

「こちらはユウマのでしたね。これは……手袋、ですか?」

「街を歩いてる時に見つけてな。季節的にもそろそろ使いどきだし、”これだ!”って思ってたな」

俺が用意したのはごく普通の手袋だ。結局豪華とかそういうのは無くなってしまったが、大丈夫だろう。

「ふふ、ありがとうございます。手袋は持っていないですし、ありがたく使わせてもらいます」

「ああ、そうしてくれ」

「それで、こちらがサヤさんからでしたね」

俺のは無事に喜んでもらえたらしい、笑顔を浮かべたまま、もう一つのプレゼントを開ける。

「これは……」

「マフラー、だな」

結局、似たり寄ったりなプレゼントになってしまったようだ。まあ、ガン被りじゃないだけまだマシか……。

「……二人揃って、私そんなに防寒してないと思ってます?」

「いやそういうわけじゃない!ただの偶然だ、偶然!」

「……別に怒ってなどいませんよ。せつかく買ってもらったものですし、今年はしっかりと使わせてもらいます」

「そりや良かった……ん?今年は?」

「え、ええ……つい一人だと、防寒とか疎かになりがちで……多少の寒さは魔法でどうにか出来ますし……」

「……」

これは手袋にして正解だったようだ。サヤのマフラーも、話を聞く感じ持っていないようだし。

「防寒具にして良かったよ」

「あははは……」

「あれ?よく考えたら闇の世界使えば荷物になるとか考えなくて良かったじゃん!!」

「ユウマ、急にどうしたんですか?」

「いや、こっちの話だ・・・」

第一章 第一話

『私、魔女になる！』

いつの日だったか、会うなりそう宣言した幼馴染の彼女。あまりにも突拍子もなくて、一瞬呆けてしまった気がする。

『・・・魔女？』

『うん！魔女になって、ニケのように旅をするの！』

“ニケ”。彼女が愛読している本、『ニケの冒険譚』の主人公。今思えば、彼女がそう思ったのは必然だったのかもしれない。

『そっか・・・。だったら、僕は剣士になるよ！』

当時の自分は何を思っただけその言葉を言ったのだろうか。・・・いや、大したことは考えてなかった気がする。ただただ彼女の横にいたい、なんて理由でそんなことを言った気がする。

その言葉を後悔するつもりはない。だけど・・・まさかこんな運命が待ち受けていたなんて、あの時は俺たちは知る由もなかった。

・・・

「っ・・・！ー！ー！夢、か」

ずいぶんと懐かしい夢を見た。俺が剣士になる道を歩き出した、その始まりの物語。

体を起こし、辺りを見渡す。まだ日は登っていない時間帯、寝る前にはついていたはずの焚き火はすでに消え去り、少し肌寒さを感じる。

「・・・目、覚めちゃった」

再び眠りにつく気にもなれず、空を眺める。辺りに光が一切無いおかげか、星がよく見える。

「・・・あいつ、今は何処にいるんだろう・・・」

魔女になって以降、一度も会っていない彼女のことを思い浮かべる。おそらく今もこの世界のどこかを旅しているのだろう。いや、旅を続けていて欲しい。真実など知らないまま、平和な旅を。

「はぁ・・・ん？」

そんなことを考えていると、そこまで遠くない位置から何かの唸り声が聞こえてきた。もしも戦いとは無縁の一般人が聞いていたら、その身を震え上がらせていただろう。

「例の奴か・・・」

二日ほど前に立ち寄った近隣の町で、魔物の噂は耳にした。自分とは何ら関係無いと思っていたから大して聞きもしなかったが・・・。なんて思っていると、また唸り声が聞こえてきた。先ほどよりも明らかに近くなっている。おそらく、俺がここにいることはすでにバレている。

「・・・あまり証拠を残すようなことはしたくなかったんだが・・・仕方ない」

姿は見えないが、大体の位置は捕捉した。俺は立ち上がると、一本の剣を携えて歩き出す。

「ちっ・・・くせえな」

近づくにつれ強くなる獣臭に不快感を隠せずにいると、魔物が姿を現す。思っていたよりもだいぶ大柄な魔物だったが、まあ、大した問題でもない。

魔物からしたら餌がノコノコやって来たとても思ったんだろう。でかい雄叫びを上げるや否や襲いかかってくる。

「あいにく、お前程度に食われるほど俺は安くないんだよ」

少し横にズレるだけで簡単に避けられる。所詮はただの魔物、図体がでかいだけの獣に過ぎない。今更この程度で遅れを取るつもりなど、毛頭無い。

「さっさと終わらせるか」

『ジャアクドラゴン』

取り出したのは一冊の本。俺のような剣士が本領を發揮するため

の、大切なアイテムの一つ。

『かつて、世界を包み込んだ暗闇を生んだのはたった一体の神獣だった……』

それを組織から奪った闇の聖剣”闇黒剣月闇”あんこくけんぐらやみに読み込ませ、腰に装着済みのドライバーへとセットする。

『ジャアクリード!』

「……変身」

『闇黒剣月闇! Get go under conquer than get keen. ジャアクドラゴン!』

聖剣より放たれし闇の斬撃が俺の体を包み込み、俺は闇の剣士へと姿を変えた。

『月闇翻訳! 光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する!』
相手への慈悲など無い。ただ一撃の元に、斬り伏せるのみ。

『月闇居合! 読後一閃!』

瞬間、魔物はその体を真つ二つに分け、俺の後ろに倒れ込む。辺りは魔物の体から吹き出した血によって赤く染まり出している。
「……」

ドライバーからブックを抜き取り、体を包んでいた装甲が解除される。原理とかは知らん。

しかし、予想外に剣の力を振るってしまった。ここが森で、人目に触れられるような場所ではなかったのは幸いだろう。短期決戦で終わらせたし、組織がここに来たとしても証拠は大して残っていない。すぐにここをたてば、奴らの捕まることは無いはず。……よし、そうと決まれば早速だ。

大した荷物は普段から持っていないが、一応元いた場所に戻って辺りを確認しておく。……うん、特に忘れ物はないな。金はしっかりと持ってるし、これも忘れずに持っている。

「うん、忘れ物は無し！そんなじゃ、日が昇るまではまだ時間掛かるけど、出発しますか」

.....

少し肌寒さを感じる風を一身に受けながら、広大な草原の上を飛ばぶ、灰色の髪を靡かせている少女は誰でしょう？そう、私です。

魔法使いの国を出てから早六ヶ月。時間が経つのは早いものです。先日立ち寄った街で売られていた新聞によると、あの国で出会った彼女が無事に魔女見習いに昇格できたことも分かりました。彼女のことは、気長に待ちましよう。

それにしても・・・あの街でもなんの情報を得られませんでしたね。これほどまでに何の情報も得られないとは・・・相当隠れているのでしょうか。もしかしたら、組織の人が言ってた通り・・・いえ、あの人はおそらく下っ端中の下っ端、正しい情報を持っているとは限りません。とはいえ、いくら魔女といえど組織の上の者に会うにはそこそこ面倒な手続きをしなければいけません。そんなことをしてる暇はありませんし、こうやって自分で探そうと思って旅を続けてるわけですが・・・。

「まさかここまで何も得られないとは・・・あなたは今、どこにいるのですか？・・・」

「……………ユウマ」

第二話

「ふああ〜・・・よく寝た。もう朝か」

俺は今、花の国と呼ばれる場所を訪れていた。まあ特に目的があるとかそういうわけじゃなくて、ただ単に宿目的で訪れてるだけなんだけど。

閉めていたカーテンを開けると、眩しい朝日が舞い込んできて、思わず目を瞑る。天気が良いのはありがたい、旅をするにも天気が悪いと気が滅入る。

にしても、この街はずいぶん静かだな。人がいないわけじゃないが・・・やっぱ例の花の影響はでかいつてことだな。この国のすぐ近くに広がっている綺麗な花畑。一時期はこの国もその花の影響で賑わっていたらしいが、今現在じゃ花の毒が判明し、観光客は全く来なくなっちゃってわけだ。

まあその毒も魔法が使える人間には効かないらしいし、せつかくだからこの国を出たら見に行ってみるか。

そう思い、早速荷物を畳み始める。・・・まあそんな荷物ないけど。

「さてと・・・国出る前に朝飯でも食べてくか。何にしよ」

昨日は着いて速攻で宿に向かったからな、大して国の中を見てまわれていないんだ。こうやって見てみると、色々と店がある。喫茶店やパスタ屋、シチューなんかもあるな。・・・あれ、さつきから食べ物しか見てなくね？俺。まいつか。

「・・・お、パン屋あるじゃん」

パンってなると、あいつのーイレイナのことが頭に浮かぶ。パンが大好物だったからな。

「おっちゃん、クロワツサン一個くれ！」

早速たくさん並べられているパンの中からクロワツサンをチョイス。サクサクしていてなかなか美味そうだ。

それじゃあ一口・・・うん、やっぱ美味しい！

「久しぶりにパン食ったけど、やっぱ美味しいな。イレイナがハマる気

持ちも分かるわ」

こりやもう一個買ってこようかな？なんて考えていると、どうも門付近が騒がしいことに気づいた。さっさとクロワツサンを口の中に突っ込み、ここそと門兵の話を盗み聞きする。それによると、どうも怪しい人影がこの国に向かつて来ているとのことだ。

ずいぶんアバウトな情報しか得られなかったが・・・怪しい人影ねえ。人型の魔物だったら詳細もわかってるだろうからそれはない。だとしたら可能性としてはあとは・・・まあいいや。せつかくだし、ちよつと見に行ってみるか。

とはいえ、普通に出て行こうとしたら止められるだろう。ここは・・・これをを使うか。

俺は周りに人が居ないことを確認し、闇黒剣月闇を取り出した。この聖剣には空間を切り裂き、闇の世界に入れる力がある。この力を応用すれば、世界のどこにでも自由に行くことができる。・・・まあ下手に多用して組織に見つかるわけにもいかないから、普段は大して使つてないけど。

「ほつと」

え？ノリが軽いつて？細かいことは気にすんな。

とにかくこれで外に出た俺は、すぐに門から離れる。門兵に見つかったらそれはそれで面倒だ。んで、例の怪しい人影つてのは・・・ここからじゃ見えねえな。もうちよつと行つた先か？確かこの先は花畑があるぐらいのはずだが・・・。

そう思つて歩いてみると、視界の端の人らしく影が映つた。んだが、すぐにそつちを確認した時にはそこには誰も居なかった。

「気のせい・・・か？・・・いや、誰かいる！」

そこで俺は気づいた。今俺がいるこの森の中を、体をまるで保護色のようにしている人型の魔物が闊歩していることに。それも一体や二体じゃない、数えるのも面倒なぐらいいる。そもそもこいつらを魔物と呼称して良いのかも分からない。見た感じ魔物っていうよりかは・・・そう、植物、そつちの方が近い。どうやら知性とかがあるわけでもないみたいだし。

「つってもこいつらを放置するわけにはいかないしな……しようがねえ、駆除しておくか」

『ジャアクドラゴン！』

『ジャアクリード！』

「変身」

『闇黒剣月闇！Get go under conquer that
n get keen. ジャアクドラゴン〜！』

「ふっ！」

奴らの詳細は不明だが、やることは変わらない。まずは剣士らしく斬る！

手始めに近くにいた奴の頭と思われる部分を斬り飛ばす。これが普通の魔物ならば大半が死に至るのだが………。

「……やっぱ普通じゃねえか」

半ば予想通りではあったが、たった今首を斬り飛ばした個体は何もなかったかのように動き出した。だとしたら次の手は………。そうだ、相手が植物だとしたら、火なんてどうだ。

『必殺リード！ジャアクブレイブドラゴン！』

刀身に宿る赤と紫の炎。とにかく炎が燃え広がらないように気をつけて………。

『月闇必殺撃！習得一閃！』

目の前の個体に刀身を突き立てることで、体全体に炎が燃え広がる。やがて植物人間は全身が黒ずみになり、倒れ込んだ。しばらくそのまま様子を見たが、それ以降起き上がる気配はない。

「やっぱ炎が有効か………とはいえ、残りの奴も一気に焼き払うとなると最大火力を出さなきゃだが、それじゃあこの森ごと焼き払われるな。そんなことしたら花の国の奴らはもちろん、組織にもすぐに気づかれる。だったら………。」

多少大袈裟でも一瞬で終わらせる手段を選ぶのみ。俺は腰のホルダーからさつきとは違う赤い本を取り出し、闇黒剣月闇に読み込ませる。

『必殺リード！ジャアク西遊ジャー！』

最初に青黒い筋斗雲を召喚し、それを使って空中へと飛び上がる。森の全体を見渡せる所まで行つてから、俺はもう一冊、ライドブックを読み込ませた。

『必殺リード！必殺リード！必殺リード！ジャアクイーグル！』

俺が持つライドブックの一つ、『ストームイーグル』の力を最大限まで発揮し、俺を中心に巨大な竜巻を作り出す。これにより森の中を徘徊していた植物人間どもを残せず全て空中に放り出す。やがて竜巻は止み、全ての植物人間が重力を従って落下し始める。ま、地面に叩きつけるつもりはないけどな。

『必殺リード！必殺リード！必殺リード！ジャアクブレイブドラゴン！』

さつきは森の中だったから威力を最小限に抑えたが・・・周りに燃え移るものがない空中なら遠慮は無用だ。

『月闇必殺撃！習得三閃！』

先ほどとは明らかに違う、炎の大剣が完成する。あとはこれを振るうだけ。

「はあ！」

振われた大剣により全ての植物人間が燃やし尽くされる。本当であれば『かえんけんれつか火炎剣烈火』を使つたらもつと楽に済んだんだろうけど・・・それじゃああの本が起動する可能性があるからな。

俺は地上に降り立ち、変身を解かずに歩き出す。あの植物人間達が発生した原因、もしくはその根源となるもの、それを見つけるためだ。最悪、さつき以上の戦闘を覚悟する必要がある。

奴らが徘徊していたのはこの森の中。その中心地には

.....

誰にも縛られず、街中を自由に散策し、人々の視線を釘付けにしてしまうほどの、花のように美しい美少女は誰でしょう？

そう、私です。

私は今、街中が多くの花で溢れている花の国に訪れていました。とは言っても、観光客の姿など全く見えず、少し寂しさを覚えるほどです。まあ、この程度の寂しさはどうってことないですけど。

街の人の話によると、どうやらこの街の来る途中にあった花畑にある花の毒が原因のようです。魔女である私には効かない毒でしたが、あの花畑にいた少女はもしやその毒に……。

「それに、最近はあるなこともあったしね」

「あんなこと？」

「……」

意味ありげに呟いていたのを思わず聞き返すと、無言で差し出される手の平。こ、この人は……。

「はっはっは！冗談だよ、冗談」

「全く……それで何があつたんですか？」

「ほんの二、三週間前のことさ。その花畑から、人の形をした変な怪物が現れたんだよ」

「変な怪物、ですか……。私は通った時には、そんなものは見ませんでしたけど」

「そりやそうだろうさ、なんせ剣士様が全部倒してくれたからねえ」

「……剣士。それはつまり、ソードオブゴスの人間が動いたということ。それほどの事態が、ほんの少し前にあつただなんて。」

「私が直接見たわけじゃないけど、見た兵士の話だと紫色の剣士様だったらしいよ。ソードオブゴスにはいろんな剣士がいるってのは聞いてたけど、紫色の剣士様もいたんだねえ」

「……紫の剣士？」

「ん？どうかしたのかい、お嬢ちゃん？」

紫……闇の剣士・カリバー。まさかあの人が、この街に……？

「その話、もう少し詳しく教えていただけませんか？」

「もう少し詳しくかい？なら……」

「あくもう分かりましたよ、払います！」

結局私は、余計な出費をすることになってしまった。……そ
ろそろお金を稼がないと……。

第三話

「ふう……さすがに疲れてきたな」

そろそろ日が落ち始め、暗くなり始める時間帯……だというのに、俺はいまだに草原を彷徨っていた。周りに国は愚か村も全く見当たらず、宿に泊まることもできない。

「……しようがない、今日はここで野宿だな」

そうと決まればやることはたくさんある。まずは火起こしだ。まあ火起こしして言っても、ライドブックの力使うからすぐに終わるんだけど。

「えーと、場所はどこがいいか……」

「あー」

「はい?……!」

まさかこんな草原で声をかけられるとは、そう思った俺は、声をかけてきた彼女の顔を酷く驚いた。彼女はあまりにも、イレイナに似ていた。けど分かる。彼女はイレイナとは違う。

「……」

「あの、どうかしましたか?」

「っ!……いや、失礼。長年会っていない幼馴染に似ていたもので……」

「そ、そうでしたか……」

「それで、あなたは?」

「あ、自己紹介がまだでしたね。私はニーナと言います」

「ユウマだ、よろしく。……それで、ニーナさんはどうしてこんな所に?」

「……国を探しているんです」

「国?」

「はい……私はその国に行つて、どんな病気も治る万病薬を手に入れなくちゃいけないんです。早くしないと……」

彼女の顔はとても寂しげで、それでいてとても焦ってるのがよく分かる。詳しい事情は分からないが、おそらく時間が無いのだろう。……だが、この付近には国なんて全く見当たらないし、そも

そもどんな病気も治る万病薬、なんて話も聞いたことがない。そんなのがあるなら、もつと有名でもおかしくない。

「……その探している国ってのは、どういう所なんだ？」

「……大きい国、ということ。私の故郷の集落から、北に丸二日歩いた所にある、と」

「……それだけ？」

「はい……」

聞いておいてなんだが、あまりにも情報が少なすぎる。大きい国なんて世界中に大量にあるし、彼女の集落がどこにあるのか分からないから、国の場所も検討がつかない。

「ちなみに、君がその集落を出てからどの位経ったんだ？」

「だいたい、二週間ほど……」

二週間、集落から北に丸二日歩けば着くという国に、二週間かけて歩いても見つからない。だとしたら考えられることとしては……：彼女が方角を間違えたか、あるいはその国の話が嘘か。

もしその国の話が嘘なのだとしたら、万病薬の話を聞いたことがないことにも納得がいく。おそらく薬の方も嘘なのだろう。

だとしたら俺の出来ることなんて無い。無いんだが……：……

「……」

俺は目を手で覆い隠しながら、わずかな隙間から目の前の彼女の顔を見る。……やっぱ、放って置けないんだよね。

とはいえ、存在しない国の場所を教えるなんてことはできないし、万病薬の代わりになるようなものを用意することもできない。今俺の手元にあるのは二本の聖剣と、八冊のライドブック、あとは多少の金ぐらい……。それらにそんな力を持っているものなんて無い。だとしたら俺の出来ることは……。

「……その万病薬がある北の国ってのは、誰の聞いたんだ？」

「……私の、彼氏です」

彼氏……だと？……いかにいかに、いくらイレイナに似ているとはいえ、彼女はニーナさん。イレイナとはただ似ているだけの別人だ。そんな彼女の人間関係なんて俺には関係無いんだ。そ

れに、イレイナに似ているからこそ彼氏の一人や二人、いてもおかしくないさ！……いや、二人もいたら駄目か。落ち着け、俺。

「えくと……その彼氏さんは、どうして君にその薬のことを？」

「……彼なんです、薬が必要なのは……」

「……」

彼女は次第に泣き崩れるが、それで口を開き続ける。

話を要約するところだ。ニーナさんとその恋人、アベルさんは二人とも捨て子だったとのこと。同じ境遇を持つもの同士、惹かれあつたのだろう。そのあたりのことは話を聞いただけじゃ詳しいことは分からないが、多分そういうことだ。だが、そんなある日にアベルさんが重い病気にかかってしまったらしい。それは彼女達の村では治すことができない難病らしく、村の薬は全く効果がなかったらしい。次第にアベルさんは歩くことは愚か立つこともできなくなったとのことだ。それでもニーナさんはずっと看病を続けていたらしいが、そんなある日、急にアベルさんが万病薬の話をしだしたのだと言う。そのまま金を持たされ、ニーナさんは村を飛び出した。恋人の病気を治すための、万病薬を見つけるために。

その話を聞いて、確信した。万病薬の話はアベルさんが吐いた嘘だと。暗闇で見えていなかったが、よく見ると彼女は少しやつれている。目の下にも隈が見える。おそらく、ほとんど寝ていないんだろう。多分、村でアベルさんの看病をしている時から。

アベルさんは、自分のためにやつれていくニーナさんを見たくなかったのだろう。だから無茶な嘘を吐いてまで、彼女を村から追い出した。

もちろん、これは俺の憶測だ。真実がどうなのかはアベルさんしか分からない。だが……ほぼ正解のはずだ。だとしたら本当に勝手なことではない。この物語を紡いだのは、他ならぬ二人なのだから。

「……俺に出来るのは、これくらいか」

「えっ？」

「ニーナさん、目を瞑ってくれないか？俺が良いと言うまでも、絶対に

開けてはならない」

「え？・・・は、はい・・・」

突然の申し出に、戸惑いながらもニーナさんは目を瞑ってくれる。・・・いや、確かに目を瞑るように言っただけど、そこまでギョウつてしなくても良いのに・・・、まあ良いか。

俺は暗黒剣月闇を取り出し、闇の世界への扉を開ける。前にも言ったが、闇の世界を会することで現実世界の長距離も一瞬で移動できる。今回は彼女を連れ、ここから遠く離れたある街へと向かった。

「・・・もう目を開けていいぞ」

「・・・こ、こころは・・・？」

目を開けた彼女は驚愕する。それもそうだろう、さつきまで周りには何も無い草原の真ん中にいたはずなのに、ちよつと目を閉じている間に街中のそこそこ大きな噴水の前に移動しているのだから。

「ちよつとした魔法さ・・・ここはこの街では有名な『幸運の噴水』ってやつだね。硬貨を投げれば、願いが叶うだとかなんだとか」
実を言うと、本当に願いが叶うかどうかは分からない。ここが幸運の噴水と呼ばれているのは事実だし、願いが叶った物語も存在している。だけど、それもフィクションらしいってのは、ずいぶん前にここを訪れて際に父さんが教えてくれた。

「俺には万病薬を用意することも、アベルさんの病気を治す力を無い。だからせめて、このぐらいのことはやらせてくれ。ただの神頼みだが、何もしないよりは良いと思う」

神頼み・・・実際に叶うかどうかは分からないが、これが俺にできる唯一の手助け。噴水に向けて硬貨を投げ入れ、ただ願う。アベルさんの無事を。

それからすぐ、ニーナさんだけを出会った場所に戻した。これからどうするかは、彼女が紡ぐ物語なのだ。

結局、ニーナさんとアベルさんがそのあとどうなったのかは、ただ

の旅人であり、二人の物語に登場するモブキャラの俺には、知る由もない。

.....

木々が並ぶ原生的な森林、空気が湿気つている気持ちの悪い場所を抜けた、少し悲しそうな顔をしている少女は誰でしょう？

そう、私です。

私は先ほど、この森林の中にある小さな集落である人と出会いました。彼は難病に犯されていて、残された時間も長くないと。私は彼の恋人のフリをして近づくことになりましたが、彼にはすぐに見破られてしまいましたね。

.....彼は、恋人のニーナさんのことを本当に心の底から想っていた。だからこそ、彼女を自分から遠ざけた。ニーナさんは、渡された手紙を読んでどう想ったのでしょうか。

「.....」

こんな時、頭に浮かぶのはユウマの顔。もしも彼が、アベルさんのように難病にかかったりしたら、私はどうするのでしょうか。幼き頃からの夢であった旅を続けるのか、ニーナさんのように看病をする毎日を選ぶのか.....。

いくら考えても、答えは出ませんでした。

第四話

「うーわ……こりや酷い光景だな」

相変わらず旅を続けている俺は、ある国を訪れていた。国とは言っても、どうやらすでに滅び去っているらしい。辺りは瓦礫やら廃墟やらで人っ子一人いない。

「一体何があつたんだこりや……この辺りで戦争があつたなんて話は聞いてないし」

これほどの損壊ならば考えられるのパターンはいくつかある。戦争、魔物の襲来、その他諸々……。だが、そのどれであっても組織が何かしらの関与はするだろうし、それはデータとしてノーザンベースとサウザンベースに残る。組織にあつた過去の資料とかは粗方読み耽ったけど、この辺りの話は何も残っていなかった。

「とは言つても、調べることなんてもうできないけど……ん？」
物珍しげに辺りを見渡していると、視界の端で何かが動いた気がした。最初は野生動物でも迷い込んだのかと思つたが、その割には鳴き声とかは一切聞こえない。何より、さっきから感じる誰かの視線……明らかに誰かがいる。

「旅人……つてわけじゃなさそうだよな、この視線の感じは」
まさか組織の誰かか？……念のため、準備はしておいた方がいいな。

俺は闇黒剣月闇を携え、ゆつくりと歩を進める。場所はいくつも連なっている廃墟、その一つ。そこに足を踏み入れた瞬間、おかしな感覚に囚われる。

「なんだ、この感覚は……？」

廃墟だからとか、人がいないからだとか、そういうわけではない。ただ、何かに引き込まれるような、そんな感覚。

「……ま、誘いこまれてるんだとしても、行くしかないけど」

とにかく歩みを進める。今にも崩れそうな階段を登り、ヒビが入っている廊下の歩き、上へ上へと向かつていく。そうしてたどり着いた屋上、そこに足を踏み入れた瞬間、俺はどこかに飛ばされた。辺りは

さつきまで歩いてきた廃墟の街ではなく、自然に溢れた広大な土地。組織にいた頃は、任務で度々足を踏み入れたことがある、ワンダーワールドだ。

にしても、どうして急にワンダーワールドに？「ブックゲート」を使ったわけでもないし、そもそも俺のブックゲートはすでに使用不能になっている。今の俺にはワンダーワールドに入る手段なんて無いはずなのに。

「世界にはこのようにワンダーワールドと繋がっている場所がいくつも存在している。そもそも、お前達組織の人間が使っているブックゲートはこういう場所を研究して造られたものだぞ」

「っ!？」

突然の自分以外の声に、俺は驚き振り返る。そこにはフードを目深に被った一人の男が佇んでいた。

「あんた……どつかで……」

「ユウマ、君をここに呼んだのはこの俺だ」

「まあそうでしょうね」

むしろあんたじゃないなら誰の仕業だよ、そんな言葉は飲み込み、改めて目の前の男を見る。目深に被ったフードのせいで顔はよく見えないが、確かに俺はこいつと会ったことがある。どこだったかなあ……あれは確か火炎剣烈火が封印されて、それを解くためにアヴァロンに向かった時に……。

「ああーあんた確か、〃キングオブアーサー〃のライドブックがあった場所にいた……」

「俺はことは今はどうでもいい」

「ええ……いや、どうでもよくはないだろ……」

「お前は一体何をしているんだ」

「え？何をしているって……?」

「お前はいずれ、大いなる力を手にする運命にある」

「はあ……唐突だな、ほんと。……その大いなる力ってのはなんなんだ?」

「お前が組織を離れたのは問題無い。だが、それ以降お前は積極的に

戦いに赴いていない。せいぜいが魔物を相手するぐらいだ」

「ああ人の話は聞かない系ね」

「今のお前は何を目的に動いているのかまるで分からん。一体なんのために旅をしている」

「いや、なんのためって言われても……」

「……そうか、お前はまだ闇黒剣月闇の真価を引き出せていないのか。それならばまだ納得がいく」

「は？真価？」

「ならば話は早い」

『光剛剣最光！』

「へ？」

『金の武器 銀の武器』

『Gold or Silver』

「いやちよつとま……」

『最光発光！』

「変身！」

『Who is the shining sword?』

男が腰に取り付けたバックルから縦長のライドブックを装填した聖剣を引き抜くと、男の体はその聖剣へと収束される。なんだ、あの聖剣は？

『最光一章！金銀の力を得た輝く剣！最光！』

「聖剣になるとか……一体なんなんだよ、あんた」

「俺こそが剣で、剣こそが俺だ！」

「そういうことを聞きたいんじゃないよ！」

まあ多分期待するだけ無駄だろうしな、しょうがねえ……相手するしかないか。

「変身！」

『ジャアクドラゴン〜！』

「ふっ！」

「うお!?いきなりかよ!!」

変身していきなりの攻撃、自立している聖剣の剣戟を闇黒剣月闇で

受け止める。結構ギリギリだったけど。

「よつとー！」

「無駄だ」

なんとか押し返そうとしたが、流石に空中を好き勝手動かれると上手く行かない。最も簡単に避けられてしまった。いや、避けられるだけなら問題無いんだが……。

「背中がガラ空きだ」

「くお!?」

一瞬の内に背後に回り込まれてしまう。めんどくせえ聖剣だなこいつは……!

「だったら、こいつはどうだ!」

俺はあいつから距離を取り、ドライバーに装填しているジャアクドラゴンを取る。

『必殺リード! ジャアクドラゴン!』

「ふっ、はっ!」

闇黒剣月闇から放たれる二つの黒い斬撃、それらは途中で重なり合い、X字となって相手へと向かっていく。今までの相手だったら問題無く喰らわせられるんだけど……。

「遅いな、その程度だったら避けやすいぞ」

「ですよ〜……」

だめだ! 攻撃対象が小さすぎるし俊敏すぎる! 今までの方法じゃ簡単に避けられるし、なんとか動きを止められれば……。

「おつとー!」

あまり考え事に集中するわけにも行かないんだよな〜……よし、物は試しだ。

『必殺リード! ジャアクイーグル!』

「これでも喰らつとけ!」

ストームイーグルの力で竜巻を作り、その中にあいつを閉じ込める。まあ、今回の竜巻は前の花の国で使ったものよりは小規模のものだけだ。

「この程度で俺を拘束できると思っているのか? 無駄なことだ……」

「そいつはどうかかな？」

『必殺リード！ジャアク西遊ジャー！』

「おらっ！」

「む？」

西遊ジャーニーの力で伸びた闇黒剣月闇が奴を捕縛する。普通だったら逃げられただろうけど、竜巻で動きを制限しておいたからまだ楽に捕縛できた。

「これでお前は自由に動くことはできないぞ。さあ、どうする？大人しく降参するか？」

「この程度しか策を労せないとは、浅はかだな」

「何？」

「光あれー！！！！」

うお、眩し！！急に発光しやがって、どんだけ強い光出せんだよあの聖剣は！

『Who is this?』

光で前が見えない中、そんな音が聞こえた。その瞬間、後ろに何かの気配を感じる。

「！！」

急いで闇黒剣月闇を巻き取り、背後へと剣を振るう。目に入ったのは黒、闇黒剣月闇はなんの抵抗もなく、真横まで振われた。

「は？」

『最光二章！光より生まれし影！シャドー！』

「ふん！」

「ぐあー！」

予想外の結果に一瞬の間呆けていると、その間に拘束から逃れたあいつの攻撃を受けてしまう。それによって俺は転がり、その間にあいつはあの黒い人型の何かの手の中に収まった。

「シャドー……なるほど、影ってわけね。どうりで剣が通り抜けたわけだよ……」

「ただの当てずっぽうの攻撃は俺には通用しない」

「どうやらそのようで……だからと言って、ここで諦めるつもりな

んて毛頭無いけどな」

一つ、あることを思い出した。俺がまだ組織に滞在していた頃、音の剣士から『はるか昔に失われた光の聖剣』があると教えてもらったことがある。それは最初に生まれた聖剣の一本……。おそらくあいつは、その失われたはずの光の聖剣なのだろう。まさか変身者が聖剣そのものになるとは思ってもみなかったが……。

とにかく、相手が光の聖剣ならば一つの可能性がある。光と対をなす力……。闇の力、それを秘めている闇の聖剣を、俺は今使っている。こいつの力を最大限に引き出して、奴の光を塗りつぶす！

「はあああああ……。」

「む？……。闇の力を引き出し始めたか。ならばこちらも……。」
俺が力を込めると、少しだけだが闇が剣から漏れ出す。だが、あくまでも漏れ出す程度……。対抗するように力を込め出した光の聖剣からは、こちらが出した闇を消し去るほどの威力を感じる。

まだまだ……。この程度じゃ話にならない。もつと……。もつと……

!!

「はああああああ……。!?」

瞬間、何かが俺の頭の中に流れ込んでくる。

強大な光を発する光の聖剣……。それと相対する闇の聖剣とその剣士……。闇の聖剣からは光の聖剣と同等、下手したらそれ以上の闇が溢れている。

光の聖剣が闇の剣士の周囲を飛び交い始める。上、右、後ろ……。しかし、闇の剣士はそれらの攻撃を完全に受け止めきる。

再び二人の間に距離ができる。が、次の瞬間にはお互いが動いていた。

同時に振られる二つの聖剣、それらはある一点でぶつかり合い、そして――

「はっ!？」

「なんだ、今のは？記憶？……いや、闇の剣士の方とはともかく、光の聖剣は長い間失われたはず。二人が衝突することなんて過去にはなかった……いや、一回だけ、現在進行形で行われている。けど、さっきの光景なんて今までの戦いではなかった。じゃあ一体なんだ？あの光景は……」

「っ！」

瞬間、後ろに気配を感じる。瞬時に闇黒剣月闇を上を構えると、光の聖剣を受け止めた感覚が伝わってきた。すぐに離れる光の聖剣、次は……

「……全て受け止めたか」

「今の……さっき見た……」

「なるほど、どうやら闇黒剣月闇の真価を引き出し始めたようだな」

「真価……？」

「ならば、そろそろ頃合いだろう」

『最光発光!』

「……」

『必殺リード!必殺リード!必殺リード!ジャアクドラゴン!』

お互いの刀身に光・闇の力が宿る。聖剣から溢れ出る対象的な二つのエネルギー、それらはお互いに相殺しあう。

「……」

「……」

果たして、動き出したのはどちらが先だったか。二本の聖剣はある

何千、何万、何億もの滅びの光景。一つの例外も無く、世界は滅びていく。

「……イレ……イナ……」

世界が滅ぶ瞬間、全ての光景で十一本の聖剣と全てのライドブック、そして大切な幼馴染が一つの本に収束されていた。

「そうか……組織が、イレイナを狙っているのは……」
ふと、自身に巨大な影がかかる。闇夜に溶け込むような漆黒の体、巨大な龍。昼間の時には一切その姿を見なかったが、どこに居たのか。そんなことはどうでもいい。

「あいつは……あいつ等は……そのためにイレイナを……」
組織は、マスターログスはある目的のために今の世界を、そしてイレイナを犠牲にしようとしている。その目的を完遂するためには、十一本の聖剣と全てのライドブック、そして二つの世界を繋げる存在であるイレイナは必要不可欠の存在。

「だったら……そのどれか一つがなくなれば、その目的は達成できない……」

やることは決まった。この旅の目的……組織から逃げる必要なんて、なかったんだ。

「……お前、邪魔だ」

世界を、何よりもイレイナを救うために。

『ジャオウドラゴン！』

俺の手で、全ての聖剣を封印する。

第五話

『それが、魔女としての格好?』

『おや、ユウマ』

『ついこの間、魔女見習いになったばつかだと思っただけど……もう魔女か、ずいぶんと早いな』

『それはひとえに私が優秀だからですよ♪……そういうユウマこそ、もう剣士の仲間入りしているじゃないですか』

『それもそうだな』

『それがあなたの剣ですね……確か、火炎剣烈火、でしたっけ?』

『ああ、炎の剣士“セイバー”になるための剣だ。俺はこいつと、最高の剣士になってみせる!いつかお前にも、その姿を見せてやる』

『旅をしながら、気長にお待ちしますよ』

『ああ……それじゃあイレイナ、行ってらっしゃい』

『はい、行ってきます』

……

「はっ!……いけません、私としたことがついつい居眠りを……」

最近はどうも気疲れすることが続いていますからね……次の街に着いたら、思いつき羽を休めるとしましょう。

さて、つつい居眠りをしながらもその寝姿はとても美しい、見る人全ての視線を射止めてしまう美少女は誰でしょう?

そう、私です!

私が今向かっているのは、王立セレステリアと呼ばれる街です。ここ最近では気疲れするような出来事の連続で、あまりゆつくりと休めたいと思いませんでしたので、この街ではゆつくり休みたいと考えていると

ころです。

つと、見えてきましたね。あれが、王立セレステリアですか。私は心をワクワクさせながら受付に向かい、街へと足を踏み入れます。

「おお・・・」

思わず感嘆な声を漏らしてしまいました・・・。これまで立ち寄ってきたどの街とも違う雰囲気、つい時間を忘れて見入ってしまうような素敵な街並みをしています。辺りには魔法を使って大道芸をしている男性や、空を飛んで配達をしている方も・・・。おや？あそこに大きな建物が・・・。時計塔でしょうか？ひとまずはあそこを指すとしましよう。

というわけで歩くこと数分、特に何かが起こるといってもなく普通に時計塔へと辿り着きました。ただ、その時計塔はある建物の敷地内にあり、入り口にはこう書かれていました。

『王立魔法学校』

私の故郷、平和国ロベッタにはこのような施設はありませんでした。なんて羨ましい・・・！早速見学を・・・。

「こら君、ここは関係者以外立ち入り禁止だ。外から見分には結構だが、敷地内に入るのはご遠慮願おう」

「えく・・・私、魔女なんですけど・・・」

「いくら魔女様といえど、規則ですので入ることは出来ません」

「むう・・・」

残念ですが・・・。仕方ありません、諦めるしかなさそうですね。街の方の散策でもしましよう。

と言うわけで仕方なく街中へと戻ってきたわけですが・・・。先ほども思いましたが、この街はどうして建物と建物の間に障害物を設置しているのでしょうか？あれでは魔法使いは空を飛びにくいと思うのですが・・・。ちよつと聞いてみましょう。

「すいません」

「はい、どうしました?」

「私、旅の者なのですけど、少し聞きたいことがあります」

「あら、私に答えられることならいいけど・・・何かしら?」

「この街は、どうして建物と建物の間に障害物を設置しているのですか?あれでは魔法使いたちは空を飛びにくいと思うのですが・・・」

「ああ、それはわざとそうしているのよ」

「わざと?」

「ええ、空を飛ぶときつてみんな疲れないように低く飛ぶでしょ?けれど全員が低いところを飛んでいたら渋滞してしまうし、細い隙間とかだと事故も起きやすくなる。そうなると関係ない人や地上の人達も危ないでしょう?その代わり、この国では建物の高さが統一されているわ。魔法使いたちが飛びやすいように」

「なるほど」

「ここでは魔法使いの人もそうじゃない人も、お互いに譲り合って生きています」

「・・・特に何か目的があるわけではありませんが、なんとなく空からの景色が見たくなりました」

「・・・うわあ」

眼下に広がるのは、地上からの風景とは全く違う鮮やかな街並み。同じ高さに並べられた色とりどりの屋根は、まるで絵画のよう。

「素敵な光景・・・彼が好きそうです・・・」

「いた!」

「?」

そんな時、すぐ近くからそんな声が。顔を上げるとみると、すぐ近くに男女二人の魔法使い・・・いえ、まだ見習いですらない方達がなぜか私を見ていました。先ほどの「いた」とは、もしかして私のことでしょうか?

「あなた、灰の魔女さんですよね?」

「ええ、そうですが・・・あなたたちはなんですか?」

「わ、私たちは王立魔法学校の生徒なんですう」

「ああ、先ほどの……学校の生徒さんが、私になんの用ですか？」

「お、願いです、理由を聞かずにいつて来てくれませんか？」

「いやです」

「ふえ!？」

「どうしてですか？」

「なんかいやだから、いやです」

「そこをなんとかお願いしますよ、騙されたと思ってついて来てください」

「無理です、それじゃあ……うえ!？」

さっさと立ち去ろうと思いますが、これは予想外。いつの間にか私は彼らと同じ魔法学校の生徒さん達によつて囲まれてしまっていました。どうやら全員目的は同じようで、どうしても私を魔法学校まで連れていきたいみたいです。

「なあお前ら、協力プレイで行くとしようぜ」

「そうね、全員で捕まえましょう」

「手柄、独り占めすんなよ!」

全員が一斉に動き出しました。全く、これだけの人数……抜けるなんて簡単ですよ？

「ほっ」

「うわ!？」

囲まれてたとはいえ、それはあくまでも私と同じ高さから上にかけて。真下はガラ空きだったので、箒を急降下させてさっさとお暇させてもらいます。

「全く、一体なんだったので……ええ!？」

どうやら簡単には諦めてくれないようです。後ろを見ると、私を追ってくる姿が。先ほどよりも人数は減っているのですが、何人かは諦めたのか……いえ、どうやら分散して追跡してるだけのようですね。地の利は向こうにありますし、回り込むことは彼らにとって雑作もないことなのでしょう。

「ま、そう安易と捕まるつもりもありませんけどね」

こうして、私と魔法学校の生徒による、盛大な鬼ごっこが始まった
のでした。 ちよつと鬼多すぎませんか？

.

「.」

闇黒剣月闇が見せた未来、世界の崩壊。それに伴うイレイナの犠
牲。

それを阻止するためには、全ての聖剣を封印する必要がある。そし
て、そのほとんどが組織の元に

「まずは組織を誘き出すか そのためには」

向かうは王立セレステリア。イレイナが足を運び、師と再開する地
だ。

第六話

「はあ……はあ……」

「も、もう無理……」

昼ごろから始まった魔法学校の生徒との鬼ごっこ、時刻が夕暮れになると流石に皆さん疲れて来たようです。なおも捕まえようとする人はいますが、あまりにも動きがゆっくりすぎて少しつまらないすら感じます。

とはいえ、流石にこれ以上遅くはなりたくありませんし……そろそろおしまいにするとうしましょう。

「あなた達がいくら束になっても私を捕まえられないと言うことはこれで分かったでしょう、諦めてください。では……」

「皆さん、お疲れ様でした」

さっさとこの場を立ち去ろうとする私の前に、一人の女性が立ち塞がりました。先ほどまで私を追いかけ回していた生徒さん達とは違い、胸には魔女の象徴であるブローチが。まるで星の輝く夜空のような髪を持つ彼女は……

「フラン先生!?!」

「お久しぶりですね、イレイナ」

……

「今日の課外授業はここまで！レポートは明日提出するように」

「はい……」

「ありがとうございます……ごいまして……」

先ほどは追い出されてしまった魔法学校へと戻ってきた私たち。今回はフラン先生のおかげで追い出されずに足を踏み入れることができました。生徒の皆さんは随分と疲れた様子で校舎内へと戻っていきます。

「あらあら、あんなにフラフラになって……少し扱きすぎたのでは？」

「私のせいですか!？」

「私のせいでもありません」

あの頃と何も変わっていない、そんなやりとり……数年ぶりということもあって、随分と懐かしく思います。

「フラン先生がこの学校で教師を？」

「ええ、国王様に誘われましてね?ま、立ち話もなんですから、中に入りましょう?。」

相変わらぬマイペースさ。本当に、懐かしい。

「課外授業の一環として、多少強引に引きずってでも、あなたを私のところに連れてくるようにと指示したのでですよ」

「どうして、私がこの国に来ていると?。」

「学校に入ろうとしたでしょう?その時の警備員の方の話を聞いて、すぐにあなただと分かりましたよ。それで、いても立ってもいられなくて、生徒達を使ってあなたを探すことにしたんです」

「なるほど……」

フラン先生が用意してくれたお茶をカップへと注ぎながら話を聞き、納得します。それだったら、一度ここに立ち寄ったのは正解でしたね。

「たくさん、旅をして来たのですね」

「ええ……私が旅をしているって知ってたんですか?。」

「もちろん、あなたのお母様から聞いてましたから」

「え、会ったんですか?。」

「あなたのことをとても心配していました。故郷の近くに寄ったら、顔を見せてあげてください」

「そのつもりですが……それはまだかかりそうです」

「……何かあったんですか?。」

……なるべく隠そうと思っていたのですが、さすがは先生。私のちよつとした声を変動で、すぐに見抜いてしまいました。このことは今まで誰にも話したことはありませんが、先生になら……。

「……実は」

……

「そうですか……彼が」

「はい……」

私がフラン先生の元で修行をしていた頃、ユウマは度々その場を訪れていました。だからフラン先生も彼のことは知っていますし、彼がソードオブロゴスの炎の剣士になったことも分かっています。

「それで、今は旅をしながら彼を探しているとう？」

「はい……ですがなかなか情報も見つからず……ただ、以前立ち寄った国で、一つだけ有力そうな情報は手に入ったんです」

あれは確か、花の国での話だ。彼のお父さんが変身する闇の剣士・カリバーの目撃情報を手に入れたのは。

「とは言っても、それ以降は音沙汰も無しですけど……」

「なるほど、分かりました。それでしたら、私の方でもできる限りのことをしましょう」

「え？」

「こう見えても彼のことはそこそこ気に入ってたんですよ？それに、弟子の大切な人が行方知らずなんて……動かないわけにはいかないでしょう」

「い、いえ、ユウマはただの幼馴染で……」

「何を言ってるんですか、今更」

「先生こそ何言ってるんですか！」

「ふふ……」

全く、ただ私の反応を見て楽しんでるだけじゃありませんか？

「……」

「どうかしましたか？」

「ああ、いえ……ところで、イレイナはこの国にどのくらい滞在

する予定なのですか？」

「そうですね、久しぶりにゆつくりしようと思っていたところですし……明後日の朝に出発ですかね」

「あら、意外と早い。では、明日の用事は？」

「特にありませんが」

「それでしたら……」

……

翌朝、私は再び魔法学校を訪れていました。というのも、フラン先生からこの時間に来るよう言われたからです。そのフラン先生は私の隣に、そして私達の目の前には、昨日私を追いかけ回した生徒達の姿が。

一晩休んで疲れは十分取れたようで、昨日の帰り際に姿が嘘のように思えてきました。

「皆さーん！今日は特別講師に、“灰の魔女イレイナ”を呼びました！年はあなた達と近いですが、立派な魔女です。なんでも聞くように」

『はい！』

「あ、あの、フラン先生？私、指導なんてしたことありませんけど……」

「あら、そんなの見様見真似でいいんですよ」

「そんないい加減な……」

「さあ、何か質問がある人はいますか？」

「はい！」

いやどつちかかっていうと私が質問したいんですけど、先生に。

そんな私の心の言葉は全く通じず、私への質問タイムが始まりました。

・彼氏はいるの？

A. 居ません、旅をしている身なので。

「あくまでも魔法に関することを質問しなさい、他には？」

・得意な魔法は？

A. 特に無いです。攻撃魔法も変身魔法も、何もかもそれなりにできるつもりです。

・今まで訪れた国の中で、どの国が一番好き？

A. この国です。

・今のはお世辞ですか？

A. いいえ、事実です。

・出身は？

A. 平和国ロベッタという街です。

・旅人って楽しい？

A. ええ、とても！

まあこのような質問がしばらく続いたのでこれ以上は割愛させてもらいます。約1名ほど吹き飛ばされましたけど。

というわけで始まったフラン先生の授業。とりあえず初めはフラン先生が指導しているところを見ることにしました。……以外と真つ当な先生っぷりですね。

「あ、あの……」

そんなことを考えていると一人の生徒が手を挙げました。フラン先生は他の生徒を相手をしていますし……試しにフラン先生を真似てやってみますか。

授業の内容自体は、水を特定の形にして維持させるもの。魔女であ

る私からしてはとても簡単なものですが、生徒の中には水を持ち上げるのに苦勞している人もいます。ですからまずはそこから――

「・・・ふむ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

それからもフラン先生の授業は続きました。凍結魔法や逆にその水を溶かす魔法だったり、火炎魔法だったり。火炎魔法とは言っても、ちよつとした花火程度のものでしたけど。

しかし、そんなことをしていたからか時刻はいつの間にか夕暮れ・・・今までの旅の中で最も一日を短く感じました。

授業も無事終わったということで、私は今フラン先生に連れられるある場所に訪れていました。そこは、街全体を見渡すことができる場所で、昨日箒に乗って見た上空からの景色とはまた違った、とても素敵な景色でした。

「私のお気に入りの場所なんです」
「フラン先生の？」

「ええ、あなたが旅に出る前に、この景色を見せておきたかったのですよ。気に入ってくれましたか？」

「はい！」

「なら良かった・・・確か彼も、こんな景色が好きでしたよね」
「・・・はい、私よりも」

「彼が見つかったら、またこの国にいらっしやい。そしてまた、この景色を見るのです」

「そうですね・・・その時は、3人で」

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして翌朝、私は一人この国の門の前に来ました。本来であれば、このまま門を潜って旅を再開するところですが、昨日フラン先生が“餞別”を用意すると言っていたのです。しかし、門のところには誰一人いません。まあ早朝なので当然といえば当然なのですが……。ただ、少しホツとしている自分もいます。最後に先生の顔を見れば、名残惜しくなるに決まっていますから。そんな思いをすることなく、また旅に――。

そんな時、私の目の前に一片の花びらが。いえ、一片ではありません。とてもたくさんの花びらです。それが唐突に、私に降り注ぎ始めました。

「イレイナー！」

その声に振り向くと、空にはフラン先生や生徒の皆さんが全員でバケツトに詰めた花びらを撒いていました。

「随分と早いですね、もう少しで間に合わないところでしたよ」

「フラン先生……」

「私たちからの餞別です。喜んでくれましたか？」

「――はい、とつても!!」

私は旅人、まだ見ぬこの世界の景色と人を見るために、旅を続けま

す。
そしていつか、あなたとともに――。

.....

「いっちゃいましたね」

「あくあ、ちよつと残念だなあ〜」

「分かる！イレイナーさん可愛いしな〜」

「ほら皆さん、学校に戻りますよ！」

イレイナーが去った王立セレステリア。彼女が再び旅に出るのを見

届けた生徒達は皆口惜しそうに声を揃える。そんな彼らを諫めるフランだったが、その彼女もまた、イレイナが立ち去って行った門を名残惜しそうに見ていた。

「……おや？」

果たしてそれは幸か不幸か。フードを目深に被った一人の男が入ってきたのを見つけた。本来であれば気に留めることもないが、今はまだ早朝。国から出ることはともかく中に入るための受付はまだ始まっていない時間帯だ。外から人が入ってくることは、この時間はまだありえない。

「そのあなた、まだ受付は始まっていませんよ。もう少し時間が経ってから改めて……」

高度を下げ、地面へと降りたつてその男の目の前に立つ。理由を話して一旦引き取り願おうと思つたところで、フランはその男の顔に気づいた。

「あら？あなた……ユウマじゃないですか！」

「……お久しぶりですね、フラン先生」

イレイナから行方知らずだと聞いたユウマが今日の前にいる。その事実にはフランは驚く。

「どうしてここに？イレイナからは行方知らずだつて聞きましたけど……ああ、もうちよつと早く来ていればイレイナと会えましたのに」

「ええ、知ってますよ。だからこのタイミングで来たんです」

「？それって、どういう……」

「フラン先生、その人は？」

なかなか戻つてこないフランと話している人物が気になり、生徒たちも徐々に降下してくる。それも仕方ないことだろう、自分たちとほぼ同年代の人物と講師が仲良さそうに話しているのだ。気にならないわけがない。

「ああ、皆さんにも紹介しましょう。彼の名前はユウマ。イレイナの幼馴染で、若くしてソードオブロゴスの剣士に選ばれた少年です」

「剣士!？」

「マジかよ、すげえ！」

世間から見て、剣士に選ばれるのはとても栄誉あること。自分たちとそう遠くない年で既に剣士に選ばれているユウマに、生徒達は驚きの声をあげる。だが、それを聞いたユウマは全く誇らしげにすることはなく、むしろその顔に影がささった。

「組織に選ばれたからって、いいわけじゃない」

「はい？」

「今の組織に正義はない。あるのは世界を意のままに変えようとする欲望……奴にとって聖剣も本も、剣士や魔女も全てが道具も同然」

「あの……一体なんの話を……？」

「奴の計画は阻止する。そのために俺は全ての聖剣を封印する」

「……あなた、何をするつもりで……」

「まずは残りの聖剣を所有している剣士を引き摺り出す。そのために、あんたを倒す」

「っ!？」

何が起こったのか、生徒には理解できなかった。突如ユウマとフランの間に突風が巻き起こったかと思うと、次の瞬間には二人はかなりの距離を開け、フランは自身の前に防御障壁を創り出していた。

「あのタイミングの攻撃をしっかりと防御したか……やっぱりあんたは強い。だからこそ、奴らを誘き寄せる餌の役割を担ってもらおう」

『ジャアクドラゴン！』

「変身……」

『Get go under conquer than get keen. ジャアクドラゴン！』

剣を振り、その身を闇の剣士カリバーへと変えるユウマ。その事実
にフランは驚愕する。

「闇の剣士……!?それはあなたのお父上の剣のはず……どうしてあなただ!？」

「話す必要はない」

フランが作った距離を一瞬のうちに詰めるカリバーは、一切の躊躇なく剣を振るう。

「ふっ！」

「ちっ……やっぱり硬いな」

しかし、その攻撃はフランの防御障壁に阻まれてしまう。

いくら剣士といえど、攻撃が阻まれてしまつては意味がない。魔法を使えば自分の身を守りつつ魔力弾で総叩きなんてことも可能だ。相手がフランであるならば尚更だ。

「……やはり先に、他の奴らか」

『必殺リード！必殺リード！ジャアクイーグル！』

「他の？……まさか！」

空を見上げるフラン。その視線の先には一部始終を見ていた生徒の姿が。

「なんかよく分かんないけど、助太刀しますよ、先生！」

「俺も！」

勇敢か、命知らずか。“フランの手助けをする”というだけの目的での突貫は、全くもって意味を成さない。

「ダメ……逃げて!!」

「悪いが……部外者にはご退場願おう」

『月闇必殺撃！習得二閃！』

闇黒剣月闇より放たれる漆黒の熱風が、突貫してきた生徒も、周りの生徒も、一人の例外なく襲いかかる。

次々と地面へ落ちていく生徒達。全員が気を失っているらしく、誰一人動くことがない。

「はあ……はあ……っ！」

「ふん！」

いつの間にかフランの背後に移動していたカリバー。気配を察知して振り返るも、防御が間に合わず蹴り飛ばされる。

「瞬時に生徒全員に障壁を張る。見事な手際ですが、それによってあ

「なた自身の防御が疎かになる」

「まさか、そのために生徒を・・・？」

「次はあなたが、彼らのようになる番だ」

「・・・どうしてあなたがこんなことにするのか分かりませんが、そう安易とやられるわけにはいきません！」

『必殺リード！ジャアク西遊ジャー！習得一閃！』

「・・・・・・・・え？」

フランが行ったのは、複数の魔力弾の生成と発射。場所に規則性は皆無であり、少なくとも生成した魔力弾の内数発は喰らう計算だった。

「そう、だったのだ。」

まさかその魔力弾が生成と同時に全て撃墜されるなんて思っても見なかった。その攻撃は、まるで魔力弾の生成される位置を把握しているかのように的確にその場所だけを貫いていった。

「これで終わりです。イレイナのために、ここでやられて下さい」

カリバーが闇黒剣月闇を地面に突き立てると、それを中心に一つの魔法陣が広がる。

フランの意識はそこで途絶えた。

第七話

「……………マスターへの報告。」

王立セレステリアにて、闇の剣士カリバーが動きを見せた模様。

魔法学校にて教師をしていた星屑の魔女とその生徒一同が迎え撃ち、迎撃されたとのこと。皆気を失っている状態であることが確認されました。急激な魔力不足による一時的な意識障害だと思われます。

魔力を奪ったであろうカリバーは再びその身を眩ませました。

……………了解しました。直ちに雷の剣士を向かわせます。

……………

「……………」

俺が今いるのは、“正直者の国”からほんの少しだけ離れた場所。そこで国で購入したパンを食っていた。随分と固くて美味しくないパンだが、とりあえず腹を満たせればそれでいい。これから、この場所、あいつと戦うんだからな。

「……………来たか」

その男が来たのを感じ、俺は横に立てかけていた闇黒剣月闇を持って立ち上がる。それと同時に、雷の剣“雷鳴剣黄雷”を携えた男が目の前に現れた。

「やあ、裏切り者の剣士セイバー……………いや、今はカリバーだったな……………」

「ちつ、無視か……………昔はあんなに愛想良かつたくせに、人って変わるもんだな」

「御託はいい……………目的は剣とブックだろ……………」

「理解してんなら話が早い……………お前を粛清し、闇黒剣月闇と火炎剣烈火、そしてお前が持っている全てのブックを回収させてもらう」

『ランプドアラランジーナ』

『とある異国の地に、古から伝わる不思議な力を持つランプがあった……』

「……」

『ジャアクドラゴン』

『かつて、世界を包み込んだ暗闇を生んだのはたった一体の神獣だった……』

俺はジャアクドラゴンのライドブックを、奴はランプドアラランジーナのライドブックを取り出し、それぞれ腰に装着していたドライバーへと装填する。

「変身！」

「変身……」

『黄雷抜刀！』

『闇黒剣月闇！』

『ランプドアラランジーナ！』

『Get go under conquer than get keen. ジャアクドラゴン！』

俺には漆黒の斬撃が、奴には電撃迸る黄色い斬撃が、その身を変えていく。俺は見慣れたカリバーの姿へと、奴は雷の剣士。エスパーダ“へ。”

『黄雷一冊！ランプの精と雷鳴剣黄雷が交わる時、稲妻の剣が光り輝く！』

『月闇翻訳！光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する！』
「はあー！」

変身するや否や、エスパーダは早速聖剣を振りかざしてくる。ひとまずそれは闇黒剣で受け止めたが、エスパーダはすぐさま二手目を繰り出してくる。横一閃のその斬撃は、後ろに跳躍して避ける。

「どうした？避けてるだけじゃ戦いにならねえぞ！」

「……」

すぐさま距離を詰めてくるエスパーダ。当然防御し続けるわけではない、こちらからも攻めの攻撃を繰り出す。エスパーダの振り下ろ

した剣を闇黒剣で受け止め、その隙にガラ空きの胴体を蹴り飛ばす。
「ぐふっ！・・・。テメエ、よくやってくれたな・・・！」

考えもなしに立ち向かってくるエスパルダ。この短絡的な動き、未来を見る必要もない。向かってきたところを闇黒剣で斬り返す。

「ちいー！」

すぐさま反撃に転じたエスパルダだったが、動きが簡単すぎる。避けて反撃する程度、あまりにも容易い。剣を一度弾き、再び蹴り飛ばす。

「クソが・・・。大人しく粛清されやがれ!!」

「・・・」

新たに本を一冊、取り出したエスパルダ。これが今代の雷の剣士の力・・・。結局はこの程度か。聖剣の力も、本の力も、どっちも出しきれしていない。

『ニードルヘッジホッグ』

『この弱肉強食の大自然で、幾千の針を纏い生き抜く獣がいる・・・』

「ふん！」

『黄雷抜刀！トゲ！トゲ！ランプドヘッジホッグ!!』

『黄雷二冊！キュキュツと擦ると現れた、その魔神への願いとは、チクチクの鎧だった!』

「こいつでも喰らいな!!」

『ヘッジホッグ！ふむふむ・・・』

「おりや!!」

エスパルダが飛ばしてきた電撃を帯びた針状のエネルギーを飛ばしてくる。俺はその針を間を縫ってエスパルダへと近づき、一撃、二撃と、その体を斬りつける。そして最後に、その顔面を思いっきりぶん殴る。

「ぶお!!・・・。つう、やってくれんなあ・・・！」

エスパルダは全く諦める様子もなく剣を構えて向かってくる。物覚えの悪い奴だ・・・。動きに全く変化がない。振り下ろしてきた剣を顔を横にズラして避け、すぐさま闇黒剣で斬りつける。

「クソが・・・。だったら、俺の本気を見せてやるよ!!」

『トライケルベロス』

エスパルダが取り出した三冊目の本。一部の剣士のみが可能とする、同色の本三冊を同時に使用する姿。

『かつて冥界の入り口に、三つの頭を持つ恐ろしい番犬がいた・・・』
「はっ！」

『黄雷抜刀！ランプの魔神が真の力を発揮する！ゴールデンアラン
ジーナー！』

『黄雷三冊！稲妻の剣が光り輝き、雷鳴が轟く！』

「・・・ワンダーコンボ、か」

「セイバーだったお前は当然知ってるよな？この力・・・ワンダーコンボの力を!!」

「っ!!」

聖剣から放たれる強烈な電流に、瞬時に闇黒剣を前に突き出したが防ぎきれずに喰らってしまふ。さらにその隙を突かれ、エスパルダの剣戟をまともに喰らってしまった。

「ふん！はあ!!」

「くう!？」

「どりゃー！」

「ふっ！」

振り下ろされる剣を闇黒剣で受け止める。が、エスパルダは剣に電流を発生させ、その力を高めていった。

「くっ・・・うう・・・」

「クツクツク・・・ふん!!」

「ぐあああ！」

くっ・・・これがワンダーコンボの力か、敵に回すとそれなりに厄介な相手だな・・・。しょうがない、あれを使うか。

「・・・ん？なんだそのブックは？」

「・・・ああ、あんたはこれの存在を知らなかったな」

俺は闇黒剣を地面に突き刺し、取り出したブックを開く。

『ジャオウドラゴン』

『邪道を極めた暗闇を纏い、数多の竜が秘めた力を解放する・・・』

そして月闇を手に取り読み込ませる。

『ジャオウリード』

「ふっー！」

『闇黒剣月闇！』

その瞬間、俺の周りに四体の黄金の竜とそれを束ねる一体の紫の竜が出現し、俺の身を包み込んでいく。

『Jump out the book. Open it and burst. The fear of the darkness. You make right a just, no matter dark joke. Fury in the dark. ジャオウドラゴン！』

『誰も逃れられない・・・』

今までの、そしてエスパーダの知らないカリバーの姿に、エスパーダは明らかに狼狽える。

「おいおい・・・なんだよその姿・・・なんだよその闇は・・・！」

「・・・」

「っ・・・クソがあ!!」

もはや余計な動きは不要。相手の攻撃をわざと受け、瞬間的に出来た隙を的確に討つ。闇黒剣で斬り、手からは闇の衝撃破。さらに闇黒剣を地面に、正確にはエスパーダの影に突き刺し、本体へのダメージを与える。

「ふんー！」

「ぬあああー！」

斬り飛ばしたエスパーダへと近づき、その顔面を押さえつける。そして怯んだところを思いつきり斬り飛ばした。

「うっ・・・ぐ・・・うあ・・・」

「いくら強力なワンダーコンボとはいえど、使用者がそれを使いこなせていなければ意味がない・・・さて、お前の聖剣を封印する」

「封印、だと・・・んなバカなこと、させるわけねえだろ・・・！」

『必殺読破！黄雷抜刀！』

「・・・」

『必殺リード！ジャオウドラゴン！』

「はあ！」

『ケルベロス！ヘッジホッグ！アランジーナ！三冊斬り！サ・サ・サ・サンダー！』

雷鳴剣黄雷から飛び散る黄金の光を放つ電流、対して闇黒剣月闇からは漆黒の闇が溢れ出す。

「トルエノ・デル・ソル！」

「・・・！」

『月闇必殺撃！習得一閃！』

背後より出現した四体の黄金の竜が、向かってきたエスパーダの雷鳴剣黄雷を受け止める。勇ましくも押し返そうとするエスパーダだが、そこにさらに一体、四体の竜を束ねる漆黒の竜を追加、闇黒剣を振り下ろす。

「ぐあああああああ!!!?」

倒れ伏すエスパーダ！雷鳴剣黄雷はエスパーダの手から離れ、地面に転がっている。

「く、そがあ・・・！」

「これで最後・・・闇の力、その身を持って味わってもらおう」

躊躇はない、ただただ振り上げた闇黒剣を、エスパーダ目掛けて振り・・・

・・・

正直者の国・・・今まで立ち寄ってきた国とはまた違った一波乱がありました。無事に問題は解決。修行の末魔女になり、“炭の魔女”の名を授かったサヤさんとも再会しました。彼女が別れ際にくれた可愛らしいネックレスに手を当て、私は旅を再会させようと思いました。

ちようどその時です。国からさほど離れていない場所・・・

ど国からは決して見ることでできない死角となっている場所で、何か
が光るのが見えました。それと同時に伝わってくる、何やら爆発した
ような音。本来であれば近づかない方がいいはずですが、好奇心にか
られた私はその場所へと音を立てないように近づいていきました。

そうしてたどり着いた場所、そこでは――

「う……ぐ……うあ……」

「……………」

見たことのない、けれど間違いない、闇の剣士カリバーが佇んでい
ました。その足元には男性。すぐ近くに聖剣が転がっていましたか
ら、おそらく彼も剣士なのでしょう。彼は苦しそうに蹲り、やがてそ
の体は闇に包まれ消失してしまいました。

「っー」

思わず漏れ出しそうになる声。なんとか口を塞いで体を隠しまし
たが、カリバーには気づかれてしまったのか、辺りをこちらの方を見
ています。……って、どうして私は隠れたのでしょうか？カリ
バー、あの人は私のことを知っています。何も隠れる必要性なんてど
こにも……。

そう思っ、姿を表そうとしたその時、全く予想だにしていなかつ
た声が私の耳に届きました。

「まず一本目……」

『ジャオウ必殺読破！』

『ジャオウ必殺撃！』

カリバーが何をしたのかは私には分かりません。ただ闇黒剣月闇
を転がっていた聖剣に叩きつけた後、その聖剣と散らばっていた三冊
の黄色い本を回収して、どこかへと消えていってしまいました。

問題はそこではありません。先ほどの声――長らく
聞いていない、けれど決して忘れたことのない声……。

――ユウマ？

第八話

「……ん……」

「お、目が覚めたか」

酷く気怠さを感じながら目を開ける。真つ先に目に入るのは見慣れない天井。何があつたか記憶を探っていると、横から見知った声が聞こえてきた。

「シーラ……」

「つたく、魔力枯渇が原因とはいえ、目覚めるのが遅いんだよ。……それで？何があつたか覚えてるのか？」

その言葉に、改めて記憶を探り出します。記憶の最後にあるのは、私の弟子であるイレイナを、生徒達と一緒に見送つて……それ……それで……

「あの子が、セレステリアに来ました」

「あの子……そいつは剣士か？」

「流石にそこまでの情報はすでに持っていますか」

「あんなだけ壮大に暴れたらな」

「生徒たちは？」

「全員まだ眠っているよ。ただ、命に別状はない。どいつも魔力枯渇が原因だからな」

「そうですね……それで？あなたは どうしてここに来たんですか？基本的な情報はもう得ていると思うのですが」

「その剣士の目的が知りたくてな……。なんでお前達を襲つたのか、そこに何かがあると思うんだ」

「目的に何かがあるって……どういうことですか？」

「……実を言つとな、その剣士は今現在消息不明、おまけには教会は捜査から省かれちゃったんだ」

「省かれた……？どう言うことですか？」

「さーな。教会の本部の連中がソードオブロゴスにトップの顛末を伝えに行つたら……』その剣士については我々が片付けますので、お引き取りを』……』って言われて追い出されたらし

い」

「そんな一方的に．．!?」

「ああ、こんなことは前代未聞の出来事．．だからこそその剣士の目的が知れりや何かしら分かるかと思っただが．．どうやら無駄骨だったらしい。邪魔して悪かったな」

「あ、もう行くのですか？」

「あいにく仕事で行かなきゃいけないところがあってな。ここにはついでに寄っただけだ。それじゃあ」

そう言つてシーラはさっさと部屋から出て行つてしまいます。私以外誰もいなくなり、静かになった部屋で思考を凝らす。あの子の突然の襲撃．．．組織の謎の行動．．．。

『今の組織に正義はない。あるのは世界を意のままに変えようとする欲望．．．奴にとって聖剣も本も、剣士や魔女も全てが道具も同然』

『イレイナのために、ここでやられて下さい』

あの時彼が言っていた言葉。世界を変える．．．イレイナのために．．．！

「もしかして．．．彼は．．!?」

．．．．．

人形の国、この国に住んでいるほぼ全ての人は必ず人形を所持している。こうして椅子に座って道行く人達を眺めていますけど、やはり誰もが様々な人形を抱えています。

とはいえ．．．正直私にとってはどうでもいいこと。頭の中はこの間の正直者の国の近くで遭遇した現場で一杯です。どうしてユウマはカリバーなのか、今まで何があったのか、あそこで何をしていたのか．．．聞きたいことや知りたいことは山のようにありますけど、

その真実を確かめる術がない。ユウマもあの後すぐにどこかに行つてしまいましたし……。

「はぁ……。」

考えても答えは出ません。仕方なしに私は買っておいたパンを食しながら街を眺めることにします。耳に届くのはそれぞれの人形を称賛するような会話や、普通の日常会話だったりしましたが、その中で一つだけ普通とは違う会話が聞こえ、思わず聞き耳を立ててしまいます。なんでもこの付近に百人以上の女性の命を奪った切り裂き魔が出発しているとかで、魔法統括教会の魔女が聞き込みを行なっているのです。百人以上の女性の命を奪ったなんて、ずいぶんと物騒な事件が起こっているんですね。……あ、このパン美味しい。

ただ聞き込みの成果はあまり芳しくないらしく、他の人達の話す内容は“男が狼男になった”、“犯人は猫女という噂”、“男でも女でもない不思議な生き物”、“犯人は人形”といった、とても掴み所のない、内容もバラバラといった感じで魔女も頭を抱えています。教会の魔女も大変ですね。さて、私はパンを食べ終わりましたし、そろそろ動くとしましようー。

「おいお前、ちよつといいか」

「はい？」

歩き出し始めた瞬間、肩にキセルを乗せられて呼び止められました。後ろにいるのは先ほどまで聞き込みを行っていた魔女。

「なんででしょう？」

「お前はこの国のものか？」

「いいえ、旅人です」

「私は夜闇の魔女・シーラ。見ての通り、魔法統括教会から派遣された魔女だ」

「灰の魔女・イレイナです」

するとシーラさんは私の顔……というより、髪に視線を向けます。なんででしょう……？

「……んでお前、この国で起こった事件について知ってるか？」

「切り裂き魔の話ですか？知ってますよ」

「どうして旅人のはずのお前が知っている?」

「どうしてって・・・先ほどシーラさんが話しているのを聞いたからです。残念ですが、それ以上のことは知りません」

「・・・そうか」

シーラさんが見るのは街の人達。何かを話しているけど、流石に距離があって聞こえませんね。

「この街の奴ら、何も知らないんだ。適当なことばかり言いやがる・・・何か手がかりになりそうなものを見つけたら、私に教えてくれ。ここの集会所にいるから」

「何も無いとは思いますが・・・わかりました。ではー」

・・・

シーラさんと別れて数分、暑さに帽子で仰ぎながら街中を散歩していましたが、この街の特産物というだけあって本当に人形だらけです。そんな折、人形が並べられているお店を見つけたので、何の気無しにそこへと足を踏み入れることにしました。看板には“人形差し上げます”の文字が。

流石は人形店、店の棚には所狭しと人形が並べられています。

「ふふふ・・・ようこそいらっしゃい!」

「人形が・・・!?」

「うちの店の人形は全て私の手作りだよ!」

「・・・口、動いてますよ」

カウンターと思われる場所に一体だけ鎮座していた人形が喋り出した思いましたが、その後ろからお店の人であろう女性が姿を表しました。・・・なぜか人形の口も動いています。

「気に入ったのがあったら、持って行っていいよ」

「本当にお代はいらないんですか?」

「うん!」

「どうしてですか?こんなボロボロな・・・いえ、質素なお店

なのに」

「いいんだよ！お金じゃないんだ、僕はみんなが喜ぶ顔が見たいだけなんだよ！だから、人形はたくさん作って、街の人にプレゼントしてあるんだ！」

「へへへ．．．立派ですね」

「欲しいのがあつたら持つていつていいからね、魔導士さん！」

「あ、私は魔導士ではー！ー」

「遠慮せず、好きなを選んでよく。ほら、あれなんてどおく？うちじゃ一番人気！」

どうやら私が帽子を前に持つていたから、胸につけていた魔女のエンブレムが目に入らなかつたようです。女性は勘違いしたまま、私に人形を進めてきます。とはいえ．．．．人形は少し苦手なんですよね．．．．。

「．．荷物になるので、お気持ちだけありがたいいただきます。では、失礼します」

頭を下げた私は、足早にお店から出て行きました。ですから、彼女の眩きが私には聞こえなかつたのです。

「そう．．．残念」

．．．．．

『ランプドアラランジーナ』

この間の戦いの戦利品として手に入れたライドブックの内の一冊、ランプドアラランジーナライドブックの力で空飛ぶ絨毯を召喚した俺は、その上に乗ってある街に向かつていた。

その街には組織の施設があり、聖剣を持つ人物が一人だけそこに屯している。次の狙いはそいつ．．．．土の剣士・バスター。その聖剣、土豪剣激土だ。

手元に置いてある闇黒剣月闇に触れて未来を見ながら、目的の街————人形の国へ着くために絨毯のスピードを早めることにした。

第九話

あのお店を離れ、宿へと向かった私。受付で鍵を受け取ってその部屋へと向かいますが、その間にも人形が数体。部屋へと踏み入れると、部屋の中にあつた机の上にも一体置いてありました。いくらこの国の特産物とはいえ、これほど人形だらけとなると多少の不気味さすら感じます。私は机の上の人形を魔法で持ち上げると、そのままタンスの中へと仕舞い入れます。

「これでよし、と・・・」

とりあえず時間もいいぐらいですし、お風呂に入ってゆっくり休むとしましょう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

時刻は真夜中、すでにこの部屋に泊まったイレイナは眠っている時間帯に異変は起こった。人知れずゆっくりと開いたタンスから出てきたそれは、そのままベットで眠っているイレイナへと近づいていきーーーーー

朝、開いている窓から入ってくるそよ風によつて目を覚ましたイレイナは、窓が開いていることに多少の疑問を覚えながらも深く気にすることはせずに洗面所へと向かう。歯を磨き、顔を洗い、備え付けてある鏡を見ることでようやく異変に気づいた。鏡に写っているのは昨日までの長髪のイレイナではなく、なぜか短髪になっているイレイナだったのだから。

「・・・・・・・・誰？」

突然のことに固まり、自分の髪の毛を触るイレイナ。彼女はそこで、昨日の切り裂き魔の話思い出した。

『100人以上の女性の命を奪った』
「髪は・・・女性の命・・・」

.....

私の髪が切り裂き魔に取られたことに気づいた私は、すぐさまシーラさんへと連絡を入れました。案の定シーラさんはすぐさま駆けつけてくれて、部屋の中を調べてくれます。

「お前のお察しの通り、例の切り裂き魔の仕業に違いない」

「そうでしようとも・・・!」

「ふっ、魔女ともあろう者が切り裂き魔の被害に遭うなんてなあ」

「キッ!」

シーラさんの物言いに思いつきり睨みつけてやりましたが、当の本人は全く気にした様子もなく話を続けます。全く、私がどんな思いをしていると・・・!

「ま、とりあえず現場は見させてもらおうぞ」

「・・・私はどうすればいいですか?」

「そこで置物になつてろよ」

そう言われては私には何もできません。言われた通りベッドで横になり続けていると、部屋の中を粗方調べ終えたシーラさんが困ったように頭をかきながらお風呂場から出てきました。

「うくん、ないなあ・・・よっ!」

「きゃ!?!」

何の声もかけることなくいきなりベッドをひっくり返され、上で横になっていた私はそのまま床に転がることとなってしまいます。ちよつと・・・いくらなんでも私の扱い雑すぎませんか・・・?

「ベッドの下にも怪しいものは何もない、と・・・」

「多分この部屋の中に置いて一番怪しいのはシーラさんだと思います・・・!!」

「怪しくねえ、捜査だ捜査!残るは・・・あそこだけだな」

そういつてシーラさんが指すのは扉が半端に開いているタン

ス。．．．あれ？なんでダンスが空いてるのでしよう？あそこは服をしまった後にしつかりと閉めたはずですが．．．。

「．．．ん？」

「あれ？」

シーラさんが扉を開けると、そこには私の服と髪の毛が落ちていました。ですが、確かに入れたはずの人形の姿はどこにもありません。ていうかあの髪の毛、確かあの人形のだったような．．．。

「人形の髪の毛．．．？」

「人形？」

「ベットサイドに置いてあった人形を、その中にしまったんです」

「やっぱりか．．．」

「やっぱり？」

「一連の事件の共通点があるんだ。被害者は寝込みを襲われ、部屋があった人形が無くなっている。そして、人形の髪の毛が散らばっている」

「．．．なぜ？」

「被害者の髪の毛を人形の髪の毛にでもするんだろ」

「人形が？」

「おそらく犯人が人形を魔法で操ってな。．．．んで、どうする？」

「どうするとは．．．？」

「街に調査に出るが」

「もちろん行きます！」

私の髪の毛を奪った犯人は絶対に逃しません．．．！必ず捕まえて取り戻してみせます!!髪の毛を!!

「卑怯な犯人を捕まえて、その首を跳ねて、地獄で後悔させましょう

!!」

「飛躍しすぎだろ．．．ん？」

「どうかしましたか？」

「え？ああ．．．いや、貧相だなあと思ってた」

街へ繰り出すために早速着替えを始めた私ですが、シーラさんはそんな私を見てそんな失礼なことを言います。思わず頬を膨らませて

しまうのも仕方ありません。……って、今はそれよりも早く犯人を特定しなくては。

「……お前、名前なんて言ったっけ？」

「名乗りましたよ？イレイナです、灰の魔女」

「あ！……ああ」

「？」

「いや、なんでも。ほら行くぞ」

「一体なんなんでしょう？そもそも呼び止めたのはあなたの方じゃありませんか？」

「そんなことは思いましたが、私はそれを飲み込んで黙ってついていきます。今現在の最優先事項は私の髪の毛を取り戻し、犯人を地獄で後悔させることです！一刻も早く！」

「というわけでロビーへと来た私たちですが、そこで私はあることに気づきます。この宿には至る所に人形が置かれていて、それはこのロビーも例外ではありません。カウンターに置かれている人形の髪の毛……とても作り物とは思えない、まるで人間の髪の毛のような質感をしていました。それをシーラさんにお伝えしたところ、彼女の同様のことを思ったらしいです。と、いうわけで……」

「痛い思いをしたくなきやこの人形をどこで手に入れたか吐け！」

「やっぱり、これ人間の髪の毛ですね」

「おら吐けよ!!」

「や、闇オークションです……！」

「闇オークション？」

「は、はい……そのあーちゃんのように、特別なお人形が出品されるオークションでして……」

「何が“あーちゃん”ですか……」

「その闇オークションはどこで開かれるんだあ!？」

「思ったよりもあっさりと重要な情報を入手出来た私たちは、早速その闇オークション会場へと乗り込むことに。シーラさんが用意して

くれたドレスに着替え、仮面で素顔を隠し、夕刻ごろに会場に向かいます。……この格好はただの雰囲気作りです、はい。

ともあれ無事に闇オークション会場へと潜入できた私たち。周りには小さい会場ながらも一杯になるほどの人が集まっています。それほどこの闇オークションは認知度がある、ということでしょう。

「まるでオペラ座ですね・・・」

「実際、昔はオペラ座として使われていたらしいからな
「へえ・・・」

周りにいる参加者はみんな人形を抱えていて、何かしら呟いています。例えば・・・

「今日こそ例の人形をマサくんの彼女にするんだ・・・！」

「絶対落とす絶対落とす絶対落とす絶対落とす・・・！」

「俺は今日のために金をずっと貯め続けてきたんだ・・・落とすまで帰れねえ！」

「私のかわいこちゃん・・・んんん！」

などなど。正直引きます。

「どいつもこいつも必死だな」

「人形ぐらいでどうしてそこまで熱くなれるんでしょうね」

「よく分からんが、表向きには売れないような非正規品が魅力的なんじゃないのか？」

「はあ・・・」

そんなことを話していると、会場の明かりが消えて壇上に焦点が当たります。闇オークションが始まったようです。司会の進行のもと勧められていくオークション、最初に壇上に出された人形は人間大サイズの大きさのものです。非正規品ってそういう・・・。

「500！」

「1000！」

どうやらオークションは順調に進んでいるようです。値段はど

らんどん膨れ上がっていき、最終的には300まで跳ね上がりました。よくもまあ人形にそれだけのお金を使えますね・・・。

「ああいう人形ばかりなんではいしょうか・・・?」

「いや、それはないと思う」

次に出された人形はこれまた人間大サイズの大きさの人形、先ほどと違うのはバニーガールの格好をしているところではいしょうか。

「同じじゃないですか」

「ははっ・・・」

その後も同じような人形が続き、見ているだけで疲れてくる始末。隣にいるシーラさんは帰りたくなっていました。私の髪のためにももう少しだけ辛抱してください。

そうして進んでいく中、ようやく目的のものが壇上に出されました。目玉商品として出された六つの人形、その内の一つにとっても見覚えがありました。

「あの灰色の髪の人形、私が泊まった部屋に置いてあったものによく似ています!・・・ていうか部屋にあった人形ですし、あれは私の髪の毛です!」

そうシーラさんに伝えている間にも、司会の人はオークションを進めます。どうやら人形に関する情報はある程度伝えられているらしく、人形の髪が本物の髪のものであることを公表します。それを聞いて高揚を示す周りの人たちに、思わず杖をこっそりと取り出してしまったのですが、ここで事を起こすわけにはいかないとシーラさんに止められてしまいました。

「落ち着け、客は髪の入手ルートを知らないんだ。罪は無い」

「ちなみにこちら、巷を騒がせている切り裂き魔からの出品です!どうですか?すごいでしょう!!?」

「!!」

「ちくしょう、フォローしきれねえ!!」

「それでは、オークションスタート!」

「っ!!」

目的の人形のオークションが始まった瞬間、私は壇上へと魔法を容

赦無く放って客席から移動します。その際に人形が転がってしまいました。が、まあいいでしょう。それよりもこの人たちに罪を教える方が先決ですから。

「あなた達は女性の敵です。その罪は万死に値します！・・・切り裂き魔さん、ここにいますのでしよう？どうぞ出てきてください」

とは言いましたが・・・そうですよ、そう簡単に出てくるわけがないですよ。それでしたらこちらは、こうするだけです！

手始めに私の髪の毛の持っている人形の首をへし折り、胴体を投げ捨て、その髪の毛を思いつきり引つ張ります。わあ、ミリミリ言い始めましたね。そしてその首を足元に捨て、思いつきり踏みつける！客の人達が悲鳴をあげたりしています。そんなことは知りません！私は髪を取られた怒りや最近のストレス、その他諸々全て混みで何度も何度も！ていうかまだ足りません！！

「そこまでだよ」

「!!」

「僕の人数に酷いことしないでくれるかな？」

「・・・あなたでしたか」

姿を表したのは昨日立ち寄った人形店の店主。彼女は何の悪びれた様子もなく壇上へと歩いてきました。

「うん、僕だよ！君がお店に来た時に思ったんだ、その髪素敵だなあつて!!」

「ふん！何がお金は要らないですか！結局こうやって、闇オークションで稼ごうとしているんですよ」

「ううん、お金が要らないのは本当だよ！闇オークションで稼いだお金だって、いつも全部恵まれない人達に寄付しているしね！」

「「おおおおお!!」」

「キッ!!」

会場で起こる拍手、はつきり言って不愉快なので睨みつけたら簡単に沈まりました。全く・・・!!

「じゃあ、なんでこんなことをするんですか？女性の髪を切って、悲しませて・・・喜んでくれる顔が見たいって言っていたのに！」

「それはね……」

「それは……!」

「喜んでくれる顔が見たいっていうのは本当だよ! 僕の特別な人形でここのお客さん達が喜んでくれるし、闇オークションのお金を寄付したら喜んでくれる……! その顔最高だよね!!」

「うえ……?」

「でも同じくらい最高なのは、誰かが悲しんでる顔や怒っている顔や笑っている顔や、色んな顔だよ!! 喜怒哀楽の表情ってほんと素敵だよね!! ああもう興奮しちゃうよお……!!!」

「……うわあ」

「あなたのその怒っている顔もいいよねえ……! はあ……はあ……はあ……」

「あ、はい、もういいです。じゃあ捕まってください」

まさか切り裂き魔の真実がこんな変態欲求だったとは……正直これ以上話したくなくなりましたし、さっさと捕まってもらいましょうそうしましょう。

「あらあ? 魔道士さん、僕実は魔女だよ? 君が挑んで勝てる相手じゃないよ?」

「あ、私も魔女なんで」

「え?」

「残念ながら、あなたはここで終わりです……ふん!!」

シーラさんから預かっていた檻を使って切り裂き魔sさんを収容、その瞬間にシーラさんが切り裂き魔さんの両手を拘束し、無事に確保することが出来ました。

「いやあ、協力感謝するぜ、イレイナ」

「どういたしまして」

「はあ!? 何をするの!? 何をしているの!? あなた怒ってるんでしょ!? もっと怒りなさいよ! そしてその顔を私に見せて!!」

「はあ……」

「いやああ顔を見せて!!」

切り裂き魔さんがうるさいですが私はそれを無視し、一番大切な髪の毛の回収を行います。魔法でちよちよいのちよい……つと!

「ふう……やっぱり長い方が落ち着きますね」

「おお、なんかしつくりくるな」

「しつくりって……シーラさんはこの状態の私とそこまで会っていませんよね？」

「え？あ、ああ、そうだな」

どうにも歯切れが悪いような気がしますが、どうしたのでしょうか……まあとにかく、無事に髪の毛を取り戻すこともできましたし、こんなことをしている間に一夜明けてしまったようなので、一回宿に戻って着替えてから旅を再開……

『激土乱読撃！ドゴーン！』

そんな音と共に壁を破壊して現れた巨大な大剣は会場を最も簡単に真っ二つに分けてしまいました。幸いにも負傷者はいないようですが、皆何が起こったのか理解ができずに混乱しています。かくいう私も状況は同じ……

「シーラさんは会場の人達をお願いします、私は外を見てきます！」

「あ、おい!!」

先ほどの大剣によって破壊された壁から外へと飛び出し、念の為防御魔法を使いながら周囲を確認します。

原因はすぐに分かりました。外では二人の剣士が戦いあっていたようで、今もなおお互いを睨みつけているようです。その片方は……この間も目撃した剣士……

「相変わらず大振りな一撃だ。直撃で受ければ脅威だが……避ければ何の問題もない」

「っ……その声……やっぱり……」

闇の剣士・カリバー……そして……変身者はおそらく……いいえ、絶対という確信に変わりました……私が探し続けてきた人物、ユウマでした。

第十話

時間は闇オークションが始まってしばらく経った頃に巻き戻される。時刻は真夜中、そんな時間にこの国へと辿り着いたユウマはランブドアランジーナブックの力で召喚した絨毯を使って城壁を飛び越え、たやすく中へと侵入していた。

彼はそのままの足で真っ直ぐ目的の人物がいる施設へと向かい、今度はこっそり侵入とかではなく堂々と入り口から中へと入っていた。

「な、なんだお前は！」

「おい、侵入者だ！」

「捕らえろ!!」

あまりにも堂々としているとはいえ不法侵入者、警備をしていた魔道士や中にいた剣士見習いを取り押さえようと向かってくるが、ユウマはそれを薙ぎ払っていく。

10・・・50・・・100・・・どれだけの数薙ぎ払ったのか、もはや数えるのは諦めようとした時に目的の人物が姿を現した。

「おいおい、ずいぶんとまあ派手に暴れてくれたなあ」

「し、師匠・・・!」

「おうお前ら、あとは俺に任せな！」

姿を現した男はかなりの大柄で、背中にはユウマが持っている聖剣よりも一回りも二回りの大きい大剣を背負っている。ここは剣士の育成を目的としている施設であり、この男は指南役としてここに屯していたのだ。

「よおユウマ、数年ぶりだな。元気だったか？」

「・・・」

「・・・かあ！冷たい奴だねえ、久しぶりに会ったんだし、挨拶の一つ

くらいくれてもいいじゃねえか」

「……」

「……まいいや、それで？長年姿を眩ましてたお前が、一体何のようだ？」

その問いかけに、ユウマは言葉ではなく闇黒剣月闇とジャアクドラゴンのブックを取り出すことで示す。

「やっぱそれか……エスパードの剣と本も持っているのか？あいつをどこへやった？」

「質問が多いですね。俺はここに話しをしにきたわけじゃない……」

「……わーったわーった！相手をすりゃいいんだな」
男は背負っていた大剣「……」 土豪剣激土」を振り下ろし、一冊の本を取り出した。

『玄武神話』

「かつて、四聖獣の一角を担う強靱な鎧の神獣がいた……」

「ふん！」

『玄武神話！一刀両断！』

「変身！」

『ブツた斬れ！ドゴ！ドゴ！土豪剣激土！』

『激土重版！絶対装甲の大剣が、北方より大いなる一撃を叩き込む！』

「おら、来いよ！」

「……」

『ジャアクドラゴン』

「……変身」

『闇黒剣月闇！ジャアクドラゴン！』

『月闇翻訳！光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する！』

彼が土の剣士・バスターへと変身したのを見て、ユウマもカリバーへとその姿を変える。

唐突に始まった二人の剣士の睨み合い、周りで様子を伺っていた剣士見習いはそれを息を呑んで見守っていた。

「……」

なかなか動く気配が無いカリバーに痺れを切らし、バスターは土豪

剣激土を正面に構えてカリバーに向けて振り下ろした。カリバーはこうなることが既に分かっていたため避けるが、バスターはその手を止めることなく二撃、三撃と土豪剣を振るい続ける。カリバーはそれを闇黒剣で往なすが、その際に壁を突き破ってそのまま外へと出てしまう。

『必殺リード！ジャアクヘツジホッグ！』

「ふっー！」

「うおっと!?!」

月闇より放たれるは無数の針。全て漆黒に染まっていたそれに気づいたバスターは土豪剣激土を盾代わりにすることで防ぐ。

「そいつはエスパーダの本じゃねえか、やっぱりお前が持つてるんだな。他の二冊もあるのか？」

「・・・望みとあらば」

『必殺リード！ジャアクケルベロス！』

振われた闇黒剣から三つの頭を持つ獣の形をしたエネルギー体が出現してバスターを襲う。

「悪いが、そいつはもう見飽きているんだよ」

『玄武神話！ドゴーン！』

「大断断!!」

『激土乱読撃！ドゴーン！』

土豪剣の刀身を巨大化させ、ケルベロスのエネルギー体ごとカリバーを叩き潰そうと振り下ろす。

「っー！」

その目論見は半分だけ達成する。ケルベロスのエネルギー体は一瞬の内に消滅したが、肝心のカリバーは優々と避け切り、それによりカリバーの背後にあった建物へと直撃してしまう。

「相変わらず大振りな一撃だ。直撃で受ければ脅威だが・・・避ければ何の問題もない」

「やっば避けられるよなあ・・・しょうがねえ、お前相手に出し惜しみを出来ねえな」

『ジャツ君と土豆の木』

『一刀両断！ブツた斬れ！ドゴ！ドゴ！土豪剣激土！』

バスターがブツクを新たに変えると、その左腕が変化する。そこから土豆をあたかも弾丸のように射出してくる。

『必殺リード！ジャアクイーグル！』

カリバーは慌てず、ストームイーグルライドブツクを使用して小規模の炎の竜巻を召喚、土豆を全て燃やし尽くした。

「ふっ！」

「おっと!？」

その炎の竜巻を突っ切ってバスターへと攻撃を仕掛けるカリバー。突然のことではあったがバスターはそれを何とか受け止めることに成功。離れる前に左手から伸びている一本の蔦をカリバーへと巻き付かせた。

「こいつは避けられねえだろ！」

『ジャツ君と土豆の木！ドゴーン！』

「大断断!!」

『激土乱読撃！ドゴーン！』

瞬間、蔦はその長さを急速に縮めていく。それにより通常よりも加速するバスターは、その勢いで拘束しているカリバーへと土豪剣を叩きつけようとする。

「.....」

『闇黒剣月闇！ジャオウドラゴン！誰も逃れられない.....』

すぐさまその姿を変えたカリバー。その際に生じる衝撃により蔦の拘束を解除、バスターはそのまま押し返されてしまう。

「うおっ!?!.....おいおい、まじかよ」

今の一撃を防がれるとは思っていなかったらしく、バスターは立ち上がって土豪剣を構える。そのまま次の一撃を探し始めた時だった。

「ユウマ!!」

まるでこの場には不釣り合いなドレス姿をした少女が声をあげた瞬間、カリバーの動きが止まった。それもそうだろう、その声の主は

彼の行動理由なのだから。

振り返りその少女――レイナを見るカリバー。仮面によって顔が隠されているのが些か残念であり、彼がどんな顔をしているのかは全く分からない。

「ユウマ、何でしょう?」

まるで答え合わせかのように、カリバー……否、ユウマは変身を解く。最後に会った時とは服装や顔つきなど、要所の差異はあるが、それでもその顔は間違いなくレイナの知るユウマの顔だった。

「……やっぱり……やっぱりユウマだ……」

探し続けていた人物の顔を見て、レイナは思わず泣き出しそうになる。出来るのなら今すぐ抱きつきもしたい。何に、その足は動かない。いや、動かせない。ユウマが放つその雰囲気、彼女の知るそれとは大きく異なるからだ。

「ユウマ……何があつたんですか……?どうしてあなたがカリバーになつているんですか?今までどこで何をしていたんですか!」

矢継ぎ早に様々な質問が紡がれる。当然だ。長い間探し求めてきた人物が目の前にいるのだから。

どうしてカリバーに変身しているのか、おじさんはどうしたのか、なぜ味方のはずの剣士と戦っているのか。聞きたいこと、聞かなきゃいけないことは沢山ある。

「……」

「黙つてないで何か言ってください!!」

「……全ては世界を救うためだ」

「……どういふことですか?」

「俺は、未来を見た」

ユウマは語り出す。それがレイナが欲している内容では無いにしろ、紡がれた言葉は途切れ無い。

「世界は滅びへの未来へと進んでいる……救うには全ての聖剣を封印する必要がある」

「ちよつと待つてください……未来を見た?世界が滅びる?……」

「一体何を言っているんですか？」

「聖剣を一本封印した程度じゃ未来は変わらない……俺がやるしかないんだ」

話されるのはあまりにも唐突な内容。とても簡単に理解できるようなものではなく、イレイナも全てを飲み込み切れていない。それでも何とか言葉を絞り出す。

「あなたの話が、真実だとしても……本当にそれしか手段はないんですか？あなたがどうやってそれを知ったのかは知りません。けど、手段は一つだけではないはずですよ。もしかしたら他にも……」

「剣士と争わずに世界を救う手段があるかもしれない／ません」
!!…………え？」

「他の剣士や魔女と一緒に世界を救う手立てだって見つけれらる………だろ？」

ユウマの口から紡がれたのはイレイナが紡ごうとした言葉を。それを一語一句違わずにユウマは述べた。

「この未来も見た……いくつもの未来を見た！だけど……一つも希望は無かった」

たとえ他の剣士と手を結んだとしても、魔女と協力したとしても、未来は変わらない。まるで運命付けられているかのように、世界は滅びていった。まさに絶望。決して抗うことが許されない闇の力。そんななかで見つけた、数少ない希望————。

「イレイナ、お前は近いうちに自らの無力さに絶望する。だが安心して、お前の元には光が来る。その光が、お前を導くだろう。………これで話は終わりだ」

『ジャオウドラゴン！誰も逃れられない……』

再びカリバーへと変身するユウマ。まるで、自らの顔を隠すかのよ

うに。

「おい……その話、もっと詳しく教えろ!!」

先ほどまでの話を聞いていたのはイレイナだけでは無かった。直前まで戦っていたバスターも割り込むことなく、ただ黙って話を聞いていた。……聞かなきゃいけないと、思った。

「おらっ!」

「ふっ!」

「おいイレイナ!」

カリバーとバスターの戦いが再び始まる中、周辺住民の避難を終えさせたシーラが合流する。動きやすさを考慮してか、先ほどまでのドレス姿ではなく魔法の姿に戻っている。

「ったく、いくら魔女とはいえ勝手な行動はするな。何かあるか分からないんだから……って、あれはまさか、闇の剣士か?」

「っ、シーラさんは、カリバー……闇の剣士を知っているんですか?」

「……ああ、少し前に王立セレステリアで大暴れしたからな。今じゃ悪い意味で噂立ってるぜ」

「王立……セレステリア……!?!」

王立セレステリア。かつて旅の道中で立ち寄り、そして恩師と再開した街。この旅の中で、最も気に入った街。いつか、ユウマと一緒に見たいと思ったあの景色を見せてくれる街を、他でもないユウマ自身が、破壊した。

「どうして……」

「ん?何か言ったか?……!?!」

シーラは驚く。いつの間にかイレイナの周りには無数の光弾が浮かび上がっていた。しかし、その光弾は魔法が従来使う光弾とは全くの別物……魔女歴も長いシーラでさえも、全く知らない魔力を帯びていた。

「ああああああああああ!!!」

叫び声と共に放たれるその光弾は、剣を交えている二人の剣士に向かつて飛来。急なことに、二人の剣士は反応ができなかった。

「うおお!」

「何・・!」

驚き、イレイナを見るカリバー。だが、彼女はまるで疲れ尽きたかのように地面へと倒れ伏していった。

「っー」

思わず手を伸ばしかける。だけど・・・彼にはやらなきやいけないことがある。他ならぬ、イレイナのために。

『必殺リードー・ジャオウドラゴン!』

一瞬の迷いの末に出した答え。カリバーはジャオウドラゴンのライドブツクの闇黒剣に読み込ませ、バスターへと止めを刺しにいった。

「おいおい・・・何だったんだ今のは・・・って、何?」

先ほどの光弾によって意識がイレイナの方に向いていたため、気づくのが遅れてしまった。バスターは五体の竜に飲み込まれ、変身が解除される。

「二本目・・・」

『ジャオウ必殺撃!』

闇黒剣の切先は地面に転がっていた土豪剣激土のエンブレムへと叩きつけられ、土豪剣激土はその力を失ってしまった。そして、今度は切先をバスターの変身者である男へと向ける。

「お、おい、何の真似だ?」

「詳しい話を知りたいのでしょうか? だったら、あなた自身も味わってくるといい」

「おい待て・・・待て!!」

必死の叫びも届かず、振り上げられた闇黒剣は真っ直ぐ男を切り裂いた。切られた場所からは瞬く間に闇が漏れ始め、男は苦しみながらその体は消滅した。

「・・・」

これでこの街での目的は無事終了。やることを終えたカリバーは

地面に転がっている土豪剣激土、並びにバスターが使用した二冊の本を回収し、月闇で空間を切り裂いた。

「おい待てー！」

そのまま闇の世界へと入ろうとした所で、シーラが声をかけてくる。それに反応し、少しだけ振り返るカリバー。その目線の先には、倒れ伏しているイレイナの姿が。

「……………」

結局、何も言葉を発しないままカリバーは闇の世界へと消えていき、裂け目は閉ざされた。シーラは何もできなかったことに無力感を感じながらも、隣で倒れ伏している少女を運ぶのだった……………。

第十一話

朝、周りでは様々な人で賑わっているなか、少し古びた時計塔の下で顔を俯かせている一人の少女の姿が。彼女の名はイレイナ、灰の魔女。時計郷ロストルフという街に来ている彼女は、街を見て回るなど全くせずに、ただベンチに座っていた。

人形の国での事件からすでにそれなりの時間が経過していて、彼女は旅を再開させた。けれど、その旅はまるで無機質のよう。今までのように次の街へと思いを馳せることなく、ただただ旅をしているだけとなっていた。

「……………」

彼女の脳裏に過るのはあの日の出来事。人が変わってしまったかのようなユウマの姿。結局、聞いたかったこともほとんど聞けず、むしろ謎は深まる一方だったことに、イレイナの気持ちはどんどん沈んでいく。

「……………お腹、空いた」

こんな状態でも変わらずに襲ってくる飢餓感。イレイナは何か食べ物を買おうと財布を取り出したが、その中にはお金など一枚も入っていないことに気づき、ため息をつく。彼女の元に一枚のチラシが飛んできたのは、そんな時だった。

「……………」

風に飛ばされてきた一枚のチラシ、何の気無しにそれを手に取ってみると、内容は仕事の募集だった。それも超短期間と銘打たれ、募集要員は魔女、報酬もそれなりに出るらしい。正直今仕事をする気にはなれないが、今は無一文の身。このままでは餓死してしまう。

「……………行ってみますか」

結局その仕事を受けることにしたイレイナは、チラシに書かれていた住所へと向かうことにして立ち上がる。そんなイレイナの姿を、一人の男が見ていた。

.....

「.....それで、イレイナさん。ここを訪ねてきたってことは、働く気があるってことだよね？」

イレイナの対面上に座って紅茶を啜っているのは薫衣の魔女・エステル。イレイナが拾ったチラシを書いた張本人である。

「どっちかっていうとお金稼ぎですかね.....」

「.....働く気は？」

「できれば働きたくないのが現状です.....」

「.....ま、いいや.....働く気はなくても魔女は魔女だし」

ポリポリとお茶菓子として出されたクッキーを食べながら気怠げに答えるイレイナに多少の苦笑いを浮かべるものの、せっかく訪ねてきてくれた魔女のため良しとすることにしたエステル。

「で、結構若いみたいだけど、年はいくつ？」

「今年で18です」

「魔女になったのは？」

「14の時ですね」

「あ、私より一年遅い」

その言葉にクッキーを食べていた手を止めるイレイナ。たとえどれだけ悩んでいようと、その心にある負けず嫌いは変わらない。

「魔女見習いになったのはいくつの時ですか？」

「10歳の時かな」

「魔女になるまで3年かかったということですか.....私は1年で魔女になりましたよ。2年遅いですね！」

「.....」

「あなたは今いくつなんですか？」

「19だけど.....」

「あ、私よりも一つ年上！」

「.....もしかして、馬鹿にしてる？」

「いえいえ！」

あまり意味を持たないマウント取りだが、多少は調子が回復したのだろうか。イレイナは用意されていた紅茶に口をつけ、改めて仕事内容の確認へと移行する。

「それで、お仕事の報酬とは？」

間違えた、内容じゃなくて報酬だった。

「内容じゃなくて、お金が気になるんだね……まいいや、それじゃあ先に報酬の話をしようか」

そう言つてエステルが机の上に置いたのはそこそこの大きさの袋。かなり重いらしく、置いた瞬間ドンという音がする。イレイナは思わず持っていたクッキーを落として、袋を開ける。その中身は全て金。袋一杯に詰まっている金貨だった。

「それは成功報酬よ。私の依頼が無事に済んだら全てあげる」

「マジですか……」

「とつてもマジだよ」

かなりの衝撃に、瞬間的に悩みなど吹き飛んでしまう。そういえばこの子、お金大好き人間だった。

ただ、これで一つの疑問が湧いてくる。これだけの成功報酬が出るような仕事なんて、一体どれ程の難度なのだろうか。

「もしかして不安になっちゃった？大丈夫、イレイナさんには私のお供をしてもらいたいだけだから」

「お供？どこに？」

お供が必要ななら、確かに魔女を募集していたのは頷ける。だが、問題はエステルも魔女だということ。彼女自身も魔女だということにさらに魔女のお供を必要とするなんて、いったいどこへ行こうというのか。

それを話す前に、ある事件を知っておく必要がある。

「イレイナさんは、2丁目殺人鬼の話を知ってる？」

「2丁目殺人鬼？」

「この国では誰でも知っている有名な話だよ。演劇や本にもなっている、実際にあった話さ」

そう言つてエステルが本棚から取り出したのは一冊の本。中には

その2丁目殺人鬼の資料がまとめられていた。

「……今から10年前、2丁目にある金持ちの家に強盗が入った。当時家にいた金持ちの夫婦は殺されて無惨な姿で発見されたが、セレナという名の二人の娘は事件発生時に買物に出ているため助かった。その後セレナは叔父に引き取られたが、そこでひどい虐待を受けることになってしまった。その結果セレナは心に深い闇を抱えてしまい、人を……悲惨で救いのない世界を憎むようになってしまった。セレナは叔父を刺し殺した。それも滅多刺しに。その後、セレナは姿を消した。そう……彼女こそが“2丁目殺人鬼”なのだ……」

「彼女は……私の幼馴染だったの」

「え？」

「仲良しで、まるで本物の姉妹のようで……」

部屋の壁には何枚かの写真が飾られている。写っているのは二人の少女、一人はエステルとそっくりということから彼女の子供の時の姿なのだと分かる。となると、一緒に写っているもう一人の少女が……

「だけど、私は魔法を学ぶために別の国に留学することになった。そして留学を終えて戻ってきたときにはセレナはもう……。人を殺す快楽を覚えてしまった彼女は次々へと殺人を繰り返し、今から3年前にようやく捕まって処刑された」

そう語るエステルの瞳は、どこか悲しげで、何かを見ているようだ。「……私が捕まえたんだ。そして、この手で処刑した。……首を刎ねたんだ」

ここでイレイナは気付く。エステルが語っているのは彼女の後悔だ。幼馴染の自らの手で処刑する、どこか自分ごとのようにも感じるその話に、イレイナの不安は徐々に募っていく。

「本当は助けてあげたかった……償うチャンスをあげたかった……だが私は国に仕える身……国王様の命令は絶対……」

完全に重たくなってしまった空気。それを振り払うようにわざとらしく咳払いしたイレイナは、改めて話を戻す。

「それでエステルさん、その話は私がお供するのとどんな関係があるんですか？」

「私は・・・あの子を救ってあげたい。だから一緒に来てほしい」

「す・・・救う？ですが、その子はもう処刑されたのでしょうか・・・？」

「そうよ、だから行くの・・・10年前に」

訪れる沈黙。時計の針が進む音だけが、部屋の中に響く。

「・・・どうやって、10年前に行くのですか？」

「私はセレナを処刑したあの日から、時を遡るための魔法を研究し続けてきたの。不幸な結末を避けるためにね。・・・10年前のこの国にはあの子がいる、まだマトモだった頃のあの子がいるの！強盗がセレナの両親を殺すのを阻止すればきつと、セレナの未来は救われる」

小刻みに震えるエステルの手。3年という時間の中、彼女は幼馴染を救えなかった後悔に苛まれながらも救う手段を求め続けた。それが時間逆行の魔法。大切な幼馴染を救うために創り上げた魔法だ。

そんな魔法を創り上げたエステルの思いは一つ・・・“やり直したい”。

「・・・事情は分かりましたが、まだ分からないことがあります。10年前に行って過去を変える・・・それにどうして私の力が必要なのですか？」

「・・・来て」

立ち上がったエステルの案内のもと、扉で閉ざされていた部屋へと入る。その中にはエステルが創り上げた時間逆行の魔法、それを発動するのに必要なものが置いてあった。

「私が創り上げた時を遡る魔法は簡単なものじゃなかった。犠牲を払わずに創れるものでもなかった・・・」

「と、いうと・・・？」

「魔力がない時、魔法使いって自分の何かを犠牲にして魔力を生み出すことができるじゃない？」

その話に、イレイナは過去に立ち寄った国のことを思い出す。

例えば、記憶。一人の魔女が自身の記憶を代償に自らの国を滅した。

例えば、声。一人の魔女が自身の声を代償に一本の剣に嘘をつけない境界を張り巡らせる力を込めた。

時間逆行を可能とするほどの魔法。それには当然、とてつもないほどの魔力が必要だったはず。ある人が記憶を、またある人が声を代償にしたように、彼女が代償にしたのは……。

「……血を使ったの」

エステルが捲った袖。その中には、血を抜いた後がいくつもあつた。

「限界ギリギリまで使った。それとは別に魔力も貯めた。10年前に戻るためには、それこそ気が遠くなるほどの魔力が必要だったから。……それでも、まだ足りない」

「どれくらい足りないんですか？」

「私の中にある残りの魔力全てを注ぎ込めば丁度いいぐらい」

残っている魔力全て。それはつまり、過去に行ってから行動がかなり制限されてしまうことになる。イレイナを……魔女を募集していたのは、過去で想定外のことが起こってもいいようにするためだろう、とイレイナは考えたのだが、どうやら違うらしい。エステルは指輪を一つ取り出してイレイナに手渡した。

「この指輪を着けていれば、魔力を共有することができるの」

「魔力の共有……これを私が着けていれば、たとえエステルさんの魔力が尽きていても私の魔力で魔法が使えると……」

「そういうこと。どう、やってくれる？」

「……」

恐らく最終警告なのだろう。辞めるならここで辞めるべき、ここから先は後戻りができないと。

答えは、決まっている。

「私は旅人です。10年前のこの街に、少しだけ興味があります」

yesだ。

.....

「準備はいい?」

「はい」

過去へと行く準備も終え、エステルは杖を翳す。しかし、その手は小刻みに震えていた。

「・・・大丈夫ですか?」

「大丈夫、これは貧血のせい」

「汗も出てますが」

「これも貧血のせい!」

「大丈夫じゃないのでは・・・」

「でもやるよ! やれる時にやらないとチャンスはすぐに逃げていくから!」

チラリと、エステルの顔を見るイレイナ。その目には確かな覚悟が秘められているのが分かる。絶対にセレナを救うという、そんな覚悟が。

「もう一度聞くよ、準備はいい!?!」

「・・・エステルさんはどうなんですか?」

「万全だよ、何年も前からね!!」

杖から放たれる緑の魔力。やがて魔法が発動し、二人の魔女は10年前への旅を開始する。

『イレイナ、お前は近いうちに自らの無力さに絶望する』

なぜなのだろうか、こんなときに頭に浮かぶのは、まるで人が変わってしまったかのようなユウマの言葉だった。

第十二話

「……………ここは？」

目を開けるイレイナ。先ほどまで室内にいたはずなのに、いつの間にか外に出ている。隣にはエステルの姿が。そんな時に足に何か当たる。見ると、新聞紙が風で飛ばされてきていた。それに記された日付は、確かに10年前のものだ。

「どうやら成功したみたいだね」

エステル曰く、確かにここは10年前の時計郷ロストルフらしい。まあ、飛ばされてきた新聞紙を見てもそれは確実だろう。10年前……………自分が魔女見習いですらない時代、まだ平和国ロベツタでユウマと楽しく遊んだり本を読んだりしていた時代だ。

その頃のことを思い出して懐かしんでいると、エステルが話しかけてくる。

「急ごう。タイムリミットは一時間、午後6時を知らせる鐘がなった時、私たちは元の時間へと戻される」

「……………一時間!？」

「私の魔力だとそれが精一杯なの。だけど十分!一時間あれば、この先の10年くらい簡単になかったことにできる!」

一時間となるとあまりのんびりしている暇はない。二人は箒へと飛び乗ると、始まりの事件が起こった2丁目の家、セレナの家へと向かう。

「どういう作戦なんです？」

「約20分後、セレナの家には黒いフードを被った強盗が押し入り両親を滅多刺しにするから、その前にセレナの両親を家から出し、強盗を待ち伏せて撃退する!簡単でしょ?」

「上手くいくといいですけど……………」

「上手くいかせるの!両親が生きていれば、きっとセレナの人生が狂うこともなかったはずだから」

「だとすると、私たちが戻る10年後のロストルフは随分と違ったものになってそうですね……………まあ、未来が変わっていたらいい

とは思いますが……」

「そうはならないよ」

「え?」

「過去に干渉したところで、私がセレナを殺した未来は変わらないんだ。つまり、私たちが戻るのは元々いた世界だけど、殺人鬼が生まれなかったこの世界は全く違う時間軸となって存在することになるの」

「……大変失礼ですけど、それって意味があるんですか?」

「本当に失礼だなあ……意味ならあるよ!こうすることで私の気が晴れるもの!」

「そう、ですか……過去に干渉しても未来が変わらないのなら、ユウマがしていることは……」

「何か言った?」

「あ、いえ……って、エステルさん!」

前を飛行していたエステルが急に高度を下げ、後ろへと向かい始める。その向かう先にいたのは、買い物かごを持った一人の少女だった。

「セレナ!!」

「ふえ!」

セレナ、そう呼ばれた可愛らしい少女は、突如見知らぬ人間に抱きつかれたことに驚き足を止める。何が起こっているのか分かっていない様子だが、抱きついているエステルはそれに気づかず涙を流す。

「え?え?お、お姉さん、誰ですか!」

「ごめんね!ずっと助けられなくて……本当に、本当にごめん!!」

側から見れば……いや、側から見なくても十分不審者な行動を取っているエステル。当の本人は気にしていないようだが、抱きつかれているセレナはとても迷惑そうだ。

「きつと、あなたを救ってみせるから……!」

「……新卒の宗教の勧誘ですか?」

その反応は正しいだろう。この時代のセレナは未来を知らないのだから、いきなり「救う」などと言われたら宗教の勧誘とも思っ

まっても仕方ない。

「あつ・・・怪しかったよね、ごめん・・・」

「現在進行形で怪しいです・・・!」

「ははっ・・・本当にごめんね。ただ抱きしめたかっただけだから」

「新手的変質者か何かですか!?!」

「お姉さんは未来から来たんだよ」

「へ、へえ・・・私、買い物に行く途中なんで、ごめんなさい、失礼します!」

そう言つてさっさと走つていくセレナ。ただ変質者から逃げるためだけでなく、どこか急いでいるように見えるが、エステルはそれに気づくことなくセレナの後ろ姿を見つめる。そこに、上空で様子を見ていたイレイナが降下してくる。

「随分と冷たく当たられていたみたいですけど・・・」

むしろ見知らぬ人物に突然抱きつかれたりして、冷たく当たらないわけがないだろう。だが、残念ながらここにはそのようなツツコミをしてくれるような人はいない。

「あの子は昔からあんな感じだったよ」

少し先で振り返るセレナ。エステル(とついでにイレイナ)がまだ自分を見ていると分かり、走り去つてしまう。

「でもね、口先では冷たいくせに、中身はとつても優しい子なの!」

まだ生きている、殺人鬼になる前にセレナに会えた。それにより、彼女を救うという思いはより一層強くなる。

「それじゃあ行くっか。—————作戦開始よ」

.....

作戦はそこまで難しいものではない。エステルがセレナの家を訪問し、家に滞在しているであろうセレナの両親を外へ連れ出す。その後エステルはセレナの家に戻ってきて強盗を待ち伏せ、離れている間はイレイナが監視をしておく。

とてもシンプルで、1番の難所はセレナの両親を外へ連れ出すことなのだが、それは先ほどエステルが無事に成功させている。今現在イレイナは家を視界に収められる路地裏にて、エステルが戻ってくるのを待っている最中である。

「まさかここまで順調に行くとは……ちよつと怖いぐらいですね」とはいえ、自分たちは未来を知っている上で作戦を立てている。何かの間違いが生じたりしていなければ、作戦は無事に成功するはず。

「……未来、か……」

このままだと世界は滅ぶ。ユウマが言った言葉だ。

今自分たちがいるのは10年前で、未来から遡ったからこそこの後の事件を知ることができている。だけど、ユウマは未来から来ているわけではない。魔女でもないユウマがどうやって未来を見ることが出来たのか。

「……って、これじゃあまるでユウマを疑っているみたいですね……」別にイレイナは悩みを解消したわけではない。ただ幼馴染を救おうと奮闘しているエステルをどこか自分と重ね合わせて、手助けをしようとしているだけだ。勿論、本人は無自覚だが。

「……そういえば、随分前にもこんな風に悩んでた時があったっけ……あの時はどうしたんだっけかな……?」

どうしてか、次々とユウマとの思い出が出てくる。彼はどんな時でも側にいてくれた。魔女になるための特訓にも付き合ってくれて、よく一緒に本を読んで、遊んで……。自分が泣いてしまった時は、隣で涙を拭いたりして慰めてくれた。もつとも、本当にまだ小さかった頃の話だが。

そんなことを考えていると、嵌めていた指輪から赤い線が伸びる。これはエステルが今現在魔力を行使している証拠、恐らく誰かと戦っているかと推測できる。この線が向かう先に行けば、エステルと合流することができる。エステルがわざわざ戦っているということは相手は例の強盗である可能性が限りなく高い。

だとすれば、もうここで家を監視する必要もない。イレイナはエス

テルと合流するべく歩き出す。とはいえ、エステルだって魔女だ。例え相手が刃物を持っている相手だとしても簡単に鎮圧できる。とその時、指輪から伸びていた赤い線が消失する。

「終わったのでしょうか・・・？」

線が消える直前、それは次の曲がり角で曲がっていた。イレイナは迷うことなくそこを曲がり、そして気づいた。

エステルも、自分も、思い描いていた前提も、何もかもが間違っていたことに。

地面にはエステルとセレナの両親が血を流して倒れている。そんななか、刃物を持って立っていたのは、エステルが救おうとしていた、セレナだった・・・。

持っているナイフからは血が滴り落ち、先ほど見た可愛らしい顔は血で赤く染まっている。思わずイレイナが後退りしてしまうのも仕方ないと思うほど、その現場は狂気に満ちていた。

「お姉さん、この女と一緒にいた人ですよね？」

全く悪びれる様子もなく、足元で倒れているエステルを一度踏みつけた後、蹴り飛ばす。その口調は先ほど聞いた口調と大差なく、人を刺したことに對して何も思っていないことが伺える。

「ああ、困ったなあ、どうしよっかなあ？お姉さんも殺しておこっかなあ？」

「どうして・・・こんな・・・」

「私、両親から虐待を受けていたんです。父にはいやらしいことをされ、嫉妬した母には打たれ、それなのに家の外では仲のいい家族を演じるという、壊れた家でした。だから殺しちゃいました。これって許されますか?」

淡々と語られる、知らなかった真実。それが本人の口から語られる。

「ゆ、許されるわけ……」

「びっくりしちゃうよね〜!お姉さん達が私の計画を邪魔しに来た夕イミングに!本当に未来から来たんですかあ?」

「私達は……」

「ねえ!本当に未来から来たというのなら、教えてくれませんか?未来の私って何をしてます?」

「……親友に、殺されます」

「親友?」

その言葉に首を傾げるセレナ。記憶を探っているのか、目線を上を向いている。

「私に親友なんていませんが?ん〜?……あ!なるほどなるほど!私分かっちゃいました!これが未来のエステルですね!!」

先ほど蹴り飛ばしたエステルへと歩みより、一切の躊躇もなく踏みつける。

「あっ!……くっ」

「やっぱり!でも、どうしてエステルに殺されるんですかあ?」

「あなたが……殺人鬼になったから……!」

「……なるほど、殺人鬼に……なるほど、納得です!」

「納得……?」

「だって、人を殺すのって……こんなに……」

楽しいだもん!!」

ナイフを片手に血塗れの顔で笑いながら駆け出すセレナに、イレイ

ナは杖を前に構える。けど、あまりの狂気さに身が竦んでしまう。

そうしているうちにセレナがイレイナの元に到着し……横からの攻撃によって壁へと叩きつけられた。

「へ？」

イレイナは何もしていない。他にこんな芸当ができる人物なんて、この場には一人しかいない。

いつの間にか立ち上がっていたエステルが、自身の周りに次々と光弾を作り出している。指輪からは再び赤い線が伸び、エステルがつけていた指輪と繋がっていた。

「許さない……」

「あっはっは、まだ生きてたんだ！もっと刺しておけばよか……」

その瞬間、セレナの顔面に光弾がぶつかり、血が吹き出す。セレナの背後にあった壁は一面赤く染まった。

「はっは……あっはっは……」

「セレナ……」

次々と照射され、作られていく光弾。それらはセレナへと当たることが、彼女は笑い続けている。

「あっはっは！痛い、痛いよ！はははは!!」

「私をずっと騙してたの!?友達だと思ってたのに!!」

「えへへ、エステルが私を殺そうとしてる！あっはっは!!殺人鬼になる私を、エステルが!!はっははは!」

「友達だと思っていたのに！あなたがきつといい子に戻れると信じたのに!!ずっとずっと……私を騙してたの!?ねえ!」

「あは、痛い痛い、痛い痛い痛い！ははははは!!」

「この……悪魔!」

光弾が消え、かなりセレナの首には魔力による首輪が嵌められる。そのままエステルの意のもと、セレナは空中へと浮かされる。その首輪は、徐々にセレナの首を閉めていつている。

「この……人殺し……!」

元の世界では、エステルがセレナを処刑している。首を刎ねたと、

彼女自身が語った。そして、今また――

「え、エステルさん……待って……！これは……これは……こんなことは……」

このままではエステルは再び、幼馴染をその手で殺すことになってしまう。それは、それだけは阻止しなければいけない。

そこでイレイナは気付く。今エステルが魔法を行使出来ているのは自分と魔力を共有しているからだ。魔力を共有出来るようにしているこの指輪を外せば、エステルは魔力を失って魔法を使えなくなる。彼女がセレナを殺すのを阻止できる。

「うっ……くっ……はず……れて……!!」

なんとか指輪を外すことに成功したイレイナ。体から吸い上げられ続けていた魔力の流れが止まったのを感じる。けど、意味がなかった。

イレイナの前では、魔力を失ったはずのエステルが未だにセレナを吊り上げている。その体は緑色の魔力に包まれていた。

「あなたとの思い出なんて要らない……全部要らない……あなたごと全部、なくなってしまうばい……!」

自らの何かを代償に、魔力を生成する。魔法使いなら誰でもできる行動。エステルが代償にしたのは……セレナとの思い出だった。

「あなたなんて助けなければよかった……あなたのことなんて振り返らなければよかった……あなたの死なんて憐れなければよかった……あなたなんて死んでしまえばいいのよ！あなたなんて……あなたなんて……あなたなんて……!」

エステルの瞳から、血の涙が流れる。

「さよなら、セレナ……」

丁度、時計塔の鐘が鳴った。一時間のタイムリミットを迎えたエステルとイレイナは元の時間へと強制的に帰らされ、事件の場にはすでに息絶えたセレナの両親、そして体と首が別れたセレナの遺体が転

がっていた。

.....

無事、とは言い難い状態で元の時間へと戻ってきたイレイナ達。今にも倒れてしまいそうなエステルを椅子へと座らせるが、彼女がセレナのことを何も覚えていないことを知る。

イレイナはその部屋から走り去っていく。部屋の中央に置かれていた金貨の入った袋には一切目もくれずに、部屋から飛び出していた。

『イレイナ、お前は近いうちに自らの無力さに絶望する』

「止められなかった……彼女を、二度も……その手で親友を……」
風が吹き、帽子が飛ばされる。けど、それを追いかけるような気力など、イレイナにはなかった。

「私はただの旅人……ただの魔女……」
イレイナの瞳から涙が流れる。

「未熟で……何も、出来ないで……！うう……うつ……うう
うう……うわあああああ!!」

結界が崩壊したように、止まることなく溢れ出していく涙。

その涙を拭ってくれる人は、いなかった。

第十三話

風によって吹き飛ばされたイレイナの帽子。それは空をフヨフヨと漂い、ある男がそれを掴んだ。

.....

時刻は真夜中、月明かりだけが辺りを照らしてる何も無い平原をかなり遅いスピードで進んでいる一つの少女の姿が。そう、イレイナである。

時計郷ロストルフの一件のあと、イレイナは夜明けを待たずに街を出た。金がなかったから宿に泊まることが出来なかった、というのもあるが、一番はあの街にこれ以上居たくなかったのだ。あのままあの街にいたら、自分の無力さに苛まれ続けることになる。無意識でもそれを理解したイレイナは、一頻り泣いた後にすぐ街を後にした。

まるで酒を飲んだ後のようにフラフラと飛行しているが、幸いにも周りに人はいない。もし人がいたら、とても面倒臭い事態になっていただろう。いや.....もしかしたら人がいた方が良かったかもしれない。

「あなたが灰の魔女・イレイナですね？」

「.....あなたは.....？」

「私はソードオブロゴスの剣士、サーマと言います。私と共にソードオブロゴスへと来てくれませんか？」

何もなかったはずの場所に突然現れたサーマという女性。理由も話さずに手を差し伸ばしてくる。

「.....なぜですか？」

「マスターロゴスが呼んでいるからです」

「マスターロゴス.....」

話された理由もイレイナからしても掴みどころの無い内容だった。一言にマスターロゴスと言われても、イレイナからしたらソードオブロゴスのトップに呼ばれる覚えはない。たった一つの可能性を除い

て。

「……ユウマのこと、ですか……？」

「……ええ」

多少の間を置いてサーマは頷く。果たして素直についていくべきかどうか……イレイナには判断がつかない。

差し出されている手を取るかどうか迷っていると、サーマは痺れを切らしたのか腰に滞納していた聖剣を手を取った。

「あまり手荒にしないと言われていましたが……まあ、多少傷有りでも問題はないですよね？」

「っー」

刃物を向けられる恐怖。先ほどの記憶がフラッシュバックする。イレイナは杖を取り出して反撃することも防御することも忘れ、後退しようとする。しかしーーーーー

「逃げられると思っているの？」

「なっ!？」

突如発生した突風に、イレイナはバランスを崩して箒から落ちてしまう。もとよりいつバランスを崩しておかしくない飛行をしていたが、サーマの持つ聖剣より生み出された風によってそれが早まった。

「いっ……っう……」

「ほらほら、魔女なんでしょう？せつかくなんだし、もつと楽しませてくださいよ？ねえ！」

地面に倒れているイレイナへと抜いた聖剣を突き立てようとするサーマ。まるで戦いを楽しんでいるかのようで、笑顔で向かってくる。

セレナの顔が被さる。体が硬直し、避けることも叶わない。イレイナは目を瞑る。来る衝撃を想像して、一筋の涙が流れる。

しかし、その衝撃が来ることはなかった。

「……?」

恐る恐る目を開けるイレイナ。彼女の目前では、聖剣を振りかざそうとしているサーマの手を掴んでいる一人の男の姿があった。その顔はフードを目深に被っているためよく見えない。

「彼女を連れてかれるのは困るな。ここは引いてもらおう」

「ちっ……誰よあんた? 邪魔してんじゃないわよ!」

掴んでいる手を振り払いそのまま斬りかかる。男はそれを軽々と避け、呆然としているイレイナを抱えて距離を離れた。

「彼女の力はまだ発露したばかり、まだ連れてかれるわけには行かない」

「こっちの質問を無視してんじゃないわよ! 人の楽しみを奪っておいで!」

「貴様の遊び相手ぐらい、俺が変わってやろう」

そう言って、男は一冊の本を取り出す。

『金の武器 銀の武器』

『Gold or Silver』

「なっ……それはまさか……!」

『最光発光!』

「変身!」

『Who is the shining sword?』

腰に取り付けられていたバックルから聖剣を引き抜き、男はその中へと収束される。剣士であり、剣でもある存在。光の聖剣・最光だ。

『最光一章! 金銀の力を得た輝く剣! 最光!』

「……そう、なるほどね……あなたが失われた光の聖剣というわけ……」

はるか昔に失われた光の聖剣だが、どうやら組織の一部の人間はその存在を把握していたらしい。サーマはその光の聖剣が姿を表したことに驚きはしたが、すぐに自分の果たすべき役目を認識する。

「丁度いいわ。光の聖剣……あなたも回収するとしましょう」
『猿飛忍者伝』

『とある影に忍は疾風！あらゆる術でいざ候……』

取り出したライドブックを持っていた聖剣……風の聖剣“風双剣翠風”へと装填する。

『双刀分断！』

「変身！」

『壱の手、手裏剣！弐の手、二刀流！風双剣翠風！』

『翠風の巻！甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ！』

対抗するように剣士としての姿、風の剣士“劍斬”へと姿を変えたサーマは、二つに分断された聖剣を持って最光へと挑み始める。

「失われた光の聖剣……どれほどのものか楽しませてもらうわ！」
風双剣の力で風を生み出す。それもただの風ではなく、触れたものを切り裂く鋭利さをも持っている。

「今、風を作った……？それじゃあさっきのも……」

「ふっ、その程度……俺に通用しない！」

最光はまるで泳ぐように風に乗る、そのまま劍斬へと近づく。

「ふっ……はっ！」

「ちよっ、こいつ……だあもう！チョコマカしてんじやないわよ!!」
最光がグルグルと回転しながら劍斬の周囲を飛び回ることによって、劍斬は冷静さを揺さぶる。言ってしまうえば簡単な挑発だ。このような挑発は短気な人ぐらいにしか有効ではないが……先ほどのレイナとのやりとりから問題無く有効だと判断した最光は実行へと移した。案の定、劍斬は自身の周囲を攻撃もせずに飛び回る最光に苛つき始めている。

「さて、君はこいつの相手でもしてみるといい」

『Who is this?』

最光が光り輝き、地面に出来た最光の影から人形の最光シャドーが召喚される。

「あら、人の形にもなれるのね？」

最光シャドーを認識するや否や、双剣の風双剣で斬りかかる劍斬。

が、剣斬の繰り出す斬撃はその全てが最光シャドーを擦り抜ける。

「つて、あらっ？」

少し不思議そうになりながらも、再度斬りかかる。しかし、最光シャドーには全く当たらない。

「ちよつと、何よこれ!?どうなってるのよ!!?」

剣斬が棒立ち状態の最光シャドーの相手(?)をしている間に、本体である最光はこっそりとイレイナの元へと行く。

「大丈夫か?」

「は、はい・・・一応・・・あの、あなたは?」

「俺のことはひとまず後だ。ここから離れるぞ」

「離れるつて・・・でも、あの人から逃げられるんですか・・・?」

「問題ない。少し目を瞑っていた方がいいかもな」

「わ、分かりました・・・」

最光の指示のまま、イレイナは目を瞑る。それを確認した最光は聖剣から強烈な光を発する。

「きやつ!?ちよつと何よ!!・・・つて、あれ?」

突然の光に顔を背ける剣斬。やがて光が止んで顔を上げると、周囲には誰もいなくなっていた。

「あらっ・あららっ?・・・どゆこと?」

まるで訳が分からないと、首を傾げる剣斬が虚しく佇んでいた。

.....

「おい、もう目を開けても問題ないぞ」

「・・・あれ?ここは・・・?」

声をかけられて目を開けたイレイナは、自分の周囲が先ほどまでと全く違う街中であることに驚く。近くに剣斬も含めて人の姿は一人しかなく、その一人は先ほど剣斬と戦っていた光の聖剣となったその人ぐらいだ。

「ここはきつスキの場所から少し離れた場所にある街だ。風の剣士を撒く分にはこれで十分だろう」

「……あの、それであなとは一体？」

「俺の名はユーリ。光の剣士であり、聖剣そのものになった者だ」

「聖剣そのもの……そんなことが出来るんですか？」

「光の聖剣は特別だ。あれは最初に生まれた二本の聖剣の内の一本、悪意ある者の手に渡ったら困るからな。俺自身が聖剣と同化することにしたんだ」

「はあ……そうですか……そんな人がどうして私を？」

「君は今組織に狙われている」

「組織に……？」

「君が今組織に捕まるのは色々と困るんだ。ユウマの行動も全て無に帰す可能性すらありうる」

「ユウマ……？あなた、ユウマのことを知っていますか!？」

ユーリの口からユウマの名前が出た瞬間、イレイナは時間が真夜中であることも忘れて大声を出しながらユーリの肩を掴む。

「ああ、知っている。何せあいつとは一度剣を交えたからな」

「剣を交えたって……何があったんですか？もしかして聖剣の封印のために……」

「いや、あいつが聖剣の封印をする行動を始めたのは俺と剣を交えた後からだ」

「え？」

「あいつは俺との戦いで闇黒剣月闇の真価を引き出し、この世界の未来を見た。だから聖剣を封印し始めたんだろう」

淡々とユウマとの戦いの結末を語り出すユーリ。

「まああの戦い自体、あいつに闇黒剣の真価を引き出させるためにしたことだが」

「ちよ、ちよつと待ってください……ええつと、それとつまり、ユウマが今のようになってしまったのって……」

「ん？……ああ、ひとえに俺が原因とも言えるな」

あつけらかんと答えるユーリに、イレイナは頬を思わず引き攣らせ

てしまった。

第十四話

「おーい、どうしたんだ？」

「ついて来ないで下さい！」

日も登り始め街中に人の姿がぼちぼちと見え始めた頃、イレイナはその中を一人で歩いてきた。その後ろからユーリが声をかけるが、イレイナはそもそもその同行を拒否している。

理由としては、昨夜の会話が原因だ。話から今のユウマの行動の原因がユーリにあったと発覚、イレイナはかなり怒っているらしい。

「そもそも貴方がついてくる必要なんて全く有りません！私は魔女です、組織が狙ってるが分かった以上対処ぐらいは………ってあれ？」

ふと後ろを見ると、先ほどまでいたはずのユーリの姿は無かった。確かについてくるなどは言ったが、そう簡単にいなくなるような人ではないことはすでにイレイナは理解していた。思わず来た道に戻って捜索し始めてしまう。

「全く……一体どこに………」

幸いにも、目的のユーリはすぐに見つかった。どうやら何か気になることがあったのか、ユーリは道端に出ているパン屋のショーケースを食い入るように見ていた。その様はまるで子供のようだ。

「……何をしていますか？」

「なあ、これは一体なんだ？」

「何って……パンではないですか。そんなことも知らないんですか？」

「このようなパンは500年前には無かった」

「ああ、なるほど………」

「よし、これを一つくれ」

「え、お金はあるんですか？」

「金か？それなら………」

「……あの、これってまさか500年前のお金とか言いませんかよね？」

「そうだが？」

「使えるわけないじゃないですか!!」

まるでコントのようなやり取りを繰り返して二人だが、場所が悪すぎる。パン屋の店主もそろそろ顔の圧が強くなり始めている。

「うう・・・そういえば私もお金が無かったんです・・・」

「こいつは使えないのか?」

「ちよつとこつちに来てください!」

急いでユーリを連れてそこから離れるイレイナ。流石にこの男には常識を与える必要がある。あとお金を稼がなくては。

「いいですか?今の世は云々かんぬんーーーーーーー」

・・・・・・・・・・・・・・・・

さて、数時間が経過した頃、街中に一つの怪しい人影が現れた。顔はフードを目深までかぶっているため確認できないが、灰色の髪の毛が覗き出ている。そう・・・イレイナだ。

「もし、そこの方・・・」

イレイナは怪しげな格好のまま丁度良く近くを通りがかつた青年を呼び止める。

「私は旅の占い師でございます・・・あなた、何か悩みを抱えていますね?」

「え?いや、別に悩んでなんかないけど・・・」

「いや、私には分かります。例えば容姿・・・あるいは仕事・・・もしくは恋とか」

「・・・!」

「ズバリ!あなたは恋人が出来ないことに不安を感じてますね?」

などと話してはいるが、当然全部出鱈目、嘘である。ただ相談事なりそんな単語を言っていき、相手が反応した単語のことを掘り下げているだけだ。つまり、詐欺である。

「・・・お前は何をしているんだ?」

「何って・・・見たらわかるでしょう?占い師ですよ」

先ほどの青年との話も終わり、しつかりと金を受け取ったところで事の顛末を見ていたユーリが声をかけてくる。

「お前は魔女であって占い師ではないだろう。なぜ占い師の真似事なんてしている」

「そりやお金稼ぎのためですよ。私は今無一文ですし、よくよく考えたら昨日のクッキーから何も食べていませんし、なるべく労働力も必要なく稼げる手段を選んでるんです」

「なるほど・・・一理あるな」

ああ、どうしてツツコミ役がないのだろうか。ユウマがいたら止めてくれたのだろうか。残念ながらその願いは届かず、ユーリが止めることもなくイレイナが荒稼ぎをするのだった。

.....

「結構稼げましたね」

「おお〜」

イレイナは悪い笑顔を浮かべながら財布の詰まった金貨を眺める。少し前までは一枚も入ってなかった財布はもはやこれ以上入れることが出来ないほどパンパンに硬貨が詰まっている。

もっとも不思議なのは占い師としては嘘しか言っていないのに関わらず当たることが多いことだ。多少の情報操作はしたものの、ここまで当たると少し怖いと思うレベルで当たる。

とにかく、今日一日たつぷりと使って稼いだお金を使って、宿とほぼ1日ぶりの食事へとありつける。というわけで、イレイナとユーリの二人は宿で二部屋取り、食事をして腹を満たし、それぞれの部屋で夢の世界へーーーーー

「ってちよつと待ってください!!なんですかこの流れは?!!」

と、大声を上げながら体を起こすイレイナ。あまりにも自然な流れでユーリと行動を共にしているが、よくよく考えればイレイナはユーリを拒絶していたはずだ。

「なんでこうなったんでしたっけ？え〜と確か……」

今日一日の流れを振り返ってみよう。まずユーリがパンに興味を示す、二人揃って金がないことに気づく、占い師としてお金を稼ぐ、現在に至る。……本当、どうしてこうなったのだろうか。

「そうです、どうして私が彼の分の食費と宿代を払わなければならぬのでしょうか？確かに彼には助けられましたが一……一……」

急に沈黙が訪れる。先程までの勢いはどこへ行ったのか、手は力無く置かれている。

「ああ……また私、何も出来なかった……」

人形の国でユウマと対峙した際も、時計郷ロストルフでエステルがセレナを殺した時も、剣斬に襲われた時も、イレイナは何も出来なかった。いつも見ていることだけしか出来なかった。

昼間は気丈に振る舞っているイレイナだが、その心の中にある陰りは全く消えていない。

「どうした？」

「え？……って!？」

声をかけられ横に顔を向けるとそこには何故かユーリの姿が。思わず手近にあった枕をユーリの顔面に向けて投げつけてしまう。

「おい、いきなりなんだ？」

「なんだじゃないですよ!!なんでここにいますか!？」

「お前には話しておこうと思っただけ。お前がどういう存在なのかを」

……

今から1000年前、こことは違うもう一つの世界……ワンダーワールドに、『二つの世界を繋ぐ女性』と5人の人間が降り立った。後に1人はソードオブゴスを造り、1人は残ってワンダーワールドを守ることになった。残りの3人は力に魅入られ、『全知全能の書』と呼ばれる本の一部を取り込み、メギドへと変貌した。

「全知全能の書……?」

全知全能の書「……」はるか昔にこの世界を創造し、この世のあらゆる知識が収められている本だ。だが、その本はすでに失われている。

1000年前、ワンダーワールドに降り立った内の3人がメギドになって、ソードオブロゴスと戦った。その戦いの際に全知全能の書は破け散り、その一ページ一ページが「ワンダーライドブック」へと変わった。

「ワンダーライドブック……剣士が変身するために使っている、あの本ですね?」

そうだ。そしてその戦いの最中に光と闇の聖剣が誕生した。光の聖剣“光剛剣最光”には様々な奇跡の力が、闇の聖剣“闇黒剣月闇”には光の聖剣が悪用された時に聖剣を封印する抑止力としての力が込められている。だから闇黒剣月闇は他の聖剣を封印することが出来るんだ。……だが、闇黒剣の力はそれだけではない。

「……未来の見る力、ですね」

ああ、闇黒剣を振るうものは必ず未来を見ることになる。だが、それはあまり使い勝手のいいものじゃなくてな、より正確に言えば「未来の災いの啓示」と言った方が正しい。未来の知ることが出来るのは、その副次的な効果だ。

「ユウマはそれで世界が減び未来を知って、聖剣を封印し始めた……と」

世界が減びという未来を変えるために全ての聖剣を封印する「……」確かに可笑しい行動ではないが、それが全てじゃないはずだ。何故なら奴の行動理念には、必ずある人物が関わっているのだから。

「え……?どういう、意味ですか……?」

そもそもあいつが組織を離れたのは未来を見る前だ。つまり、未来を見なくても組織を離れるだけの理由があいつにはあったということだ。……そこで最初の話に戻ろう。1000年前、二つの世

界を繋ぐ女性が現れた。その女性……正確にはその女性の力、世界を繋ぐ力は世界の結び目が解かれる時に現れるはずだった。今はまだ世界の結び目が解ける時ではない……にも関わらず、すでにその力を持つ者がこの世界に現れている。そして組織が欲しているのはその力を持つ者。

「ちよ……ちよつと待つてください！二つの世界をつなぐ存在はすでにこの世界のどこかにいて、それでその人を組織が欲しているって……」

おそらく、ユウマはなんらかの理由で組織がその者を狙っている事実を知った。だから組織を離れて一人で行動することにしたんだ。そして未来を知った。世界が滅ぶ要因の中にその少女が含まれていることを知ったんだ。それこそが、ユウマが聖剣を封印する、滅びの未来を変える本当の理由。

「それって……でも、そんな……まさか……」

灰の魔女・イレイナー……お前こそが、二つの世界を繋ぐ存在。組織が欲し、ユウマが本当に救おうとしている、唯一の存在なんだ。

第十五話

世界が滅びる……その過程として命を失ってしまう存在があった。それがイレイナ……二つの世界を繋ぐ存在。

「私が……世界を繋ぐ存在……？」

「お前には確かにその力がある。事実、少し前にその力の一部を発現している。……もつとも、あまり綺麗なものとはいえなかったが」

例え世界が滅ぶこととそれを防ぐ手段を知ったとして、ユウマが他の剣士と戦ってまで聖剣の封印に躍起にならないだろう。にも関わらずあのような行動を取っているのは、そうするだけの理由があるから。

世界を救う……それ以上にイレイナを救うことこそが、ユウマが聖剣を封印する本当の理由。例えその結果がどうなるろうとも。

「もしユウマが聖剣を封印していなかった場合、まず間違いなくお前は犠牲になる。ユウマはそれを良しとしていない」

「それはつまり……ユウマが本当に救おうとしているのは世界じゃなくて……私、ってことですか？」

「そうなる……これで俺の話は終わりだ。何かあるか？」

あまりにも一方的な気もするが、そのことにユーリは何も思っていない。あくまでも今回は、イレイナがどういう存在なのかを伝えるに來ただけなのだから。

「君が組織に狙われているのは君が世界を繋ぐ存在だからだ。本来であれば組織に狙われることはなかったはずだが……どうやら今代のマスターロゴスは自らの使命を捨てたらしい」

「……もし、私が組織に捕まったら、どうなるんですか？」

「そうだな……まず確実にお前は消滅する。その上で世界が滅ぶだろう。それ以上のことは俺にも分からん」

「そう、ですか……」

真実を知った今、イレイナには選択が迫られている。組織に捕まらないように隠れて過ごすか、もしくは今までのように旅を続けるか。

「……お話、ありがとうございます。少し、一人にさせてもらえま

すか・・・？」

「分かった。何かあれば俺の元へ来るといい」

そう言い残して、ユーリは部屋から出ていく。たった一人残ったイレイナは、必死に頭を働かせる。事実を知った上で、今後どうするか。何をすべきなのか。その答えを出すには、まだまだ時間が足りない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

深い森の中・・・俺は何の目的もなく、その中をぶらぶらと歩いてきた。普段であれば闇黒剣によつて見た未来から剣士と戦うのだが・・・あいにく、残りの剣士の居場所は把握していない。方法としてはエスパーダの時のように、向こうから接触して来たところを迎え撃つぐらいだ。

「まだ封印した聖剣は二本だけ・・・なるべく急がないと・・・」
組織がいつイレイナを確保しに動くかは分からないが・・・あいつの元には光の聖剣がいるはず。すぐには捕まることはないだろう。それに伴って光の聖剣の封印は後回しだ。俺の持つ二本の聖剣と光の聖剣を除いて、残りの聖剣は水・風・音・煙・時・無の六本。まずはそれらの聖剣を持っている奴らの場所を探さないと・・・ん？
「こんなところに洋館？」

今俺がいるのは人里からはかなりの距離がある森の奥。まさかこんなところで洋館を見つけるとはな・・・まあ関係ないな。ここに入る必要もないし、さっさとここを離れよう・・・

「ちよつとそこの人！止まってくださいー!!」

「あ？」

声と共に森へと降り立ったのは一人の魔女。肩まで伸びる黒髪を持った少女なのだが・・・こいつの帽子、イレイナと同じ・・・
「僕は魔法統括協会に所属している炭の魔女・サヤと言います！つかぬところお聞きしますが、あなたはこの場所を・・・んん？」

「……なんだ?」

「この匂い……イレイナさんの!? どうしてあなたから!」

「……は? 何言ってるんだお前?」

「まさかイレイナさんの……いやいや、イレイナさんに限ってまさかそんなこと……でもそれじゃあ……」

……こいつ、ヤバいな。どうやらイレイナとは知り合いらしいが、まさかこんな変態じみたやつが魔法統括協会の魔女とは……大体イレイナの匂いって何だよ、俺からあいつの匂いがするわけ……あ、もしかしてあれが原因か? それならまあ納得するが……

「……それで? 魔法統括協会の魔女が俺に一体何のようだ?」

「ちよつと待つてくださいい僕にとってはそんなことよりも重要なことがありました!」

「テメエが呼び止めたんだろうがさつさと要件を言えゴラ」

危ない危ない……危うく闇黒剣を取り出すところだった。何とか拳骨で止めることが出来た。

「うう……急に殴るとか酷いですよお」

「お前が悪い……それで? 要件は何だ?」

「ああ、そうそう! あなたはこの廃墟のことを知ってここに来たんですか?」

「いや? ただこの森を歩いてたら偶然辿り着いただけだ。何だ? ここに何かあるのか?」

「何でもここでは人が消えるっていう噂があるんです。事実、僕は依頼を受けて行方不明になったおじいさんを捜索していたんですが、調べていくうちにここに辿り着いて」

「ふん」

人が消える廃墟、ねえ……いくつか思いつく現象はある。例えば世界とワンダーワールドとの壁が薄い場所。前の俺のように偶然ワンダーワールドに入ってしまった、戻って来れなくなった可能性もある。もしくは純粋に閉じ込められてしまっただけで出られないとか、あるいは自分から出てこないとか。

後者ならともかく、前者だった場合は魔女では対処出来ないだろう

う。ワンダーワールドに入れるのはソードオブロゴスに仕える剣士
だけなのだから。

「あそうだ！せつかくだから手伝ってくれませんか？」

「……は？お前は魔女だろ、俺が協力する必要なんか全くない」

「まあまあそう言わずに！……イレイナさんとどういう関係か聞
きたいですし……」

「何か言ったか？」

「いえいえ別に！それで、あなたの名前は？」

「……はあ、ユウマだ」

「あれ？ユウマ？……何かどつかで聞いたような……ま、思
い出せないということは大したことじゃないってことですね、はい
！」

「……お前、失礼だな」

「何がです？」

「……はあ、こいつの相手は疲れる。はつきり言っでこいつの仕
事を手伝うメリットなんて無いし、むしろ時間を奪われるっていうデ
メリットしかない。ここはさっさと離脱して……」

「ほらほら行きますよ!!」

「ダア！分かったからその手を離せ!!」

クソが、強制連行かよ……まあ離脱しても今は何も出来ない
し……しょうがねえ、暇つぶしがてら付き合ってやるか。

第十六話

「失礼しまゝす！」

「意外と堂々と行くんだな」

「そりやそうですよ！さっさと仕事を終わらせたいですし」

「真面目なのか不真面目なのか分かんねえな」

全く……しかし、外からは分からなかったが、どうやらこの廃墟にはかなりの魔力が籠っているな。正確にはこの森が持つ魔力なのだろうが……。

「うえ!？」

「あ?どうし……」

サヤの驚きの声に正面を向くと、そこには一つにティーポッドが浮かんでいた。その様はあたかも俺たちを出迎えているかのようだ。誰かが魔法で動かしているのか？

ティーポッドはその向きを変えると、奥に向かって動き出す。

「これは……ついてこいってことでしょうか？」

「さあな……どちらにせよ、ずっとここにいっても意味がない。行くぞ」

誘われるがまま、俺たちは奥へとどんどん進んでいく。いくつかの扉を横切った後、ティーポッドは一つの扉の前で止まった。

「入れ、ってことだろうか」

「それじゃあ開けますよ。……わあ！」

サヤが扉を開けることで、部屋の中の様子が分かる。先のティーポッドと同じように、椅子や鏡、ぬいぐるみ、様々な家具が自由に動き回っていた。そのどれもがヒビ入っていたりと壊れている。

これはまた予想外の光景だな……誰かが魔法で動かしているとしても、一体何のために動かしてるんだ?……ここにどまるのは危険そうだな。

俺は一人、闇黒剣を使って闇の世界へと入りその場から離れる。部屋には窓がついていたからな、俺はその窓を通じて外から様子を見ることにした。……あ、サヤが何か叫んでる。

それにしても、おかしい廃墟だな。家具はまるで意思を持つように動き回っているわ、動かしているであろう人の姿は見られないわ、そもそもこの廃墟に溜まっているこの魔力は……ん？

部屋の中を覗くと、サヤはいつの間にか来ていた一人の老人と一緒に壊れた家具の修復作業をしていた。……あいつ、何やってんだ？確か老人の搜索依頼を受けたって言ってたよな、だったらあの老人が探していた奴か？だとしたらさっさと連れ戻すはずだが……なんで家具の修復なんかしてんだ？

「ひとまずは様子見、かな……」

……

あるから数時間が経過。部屋の中ではあいも変わらず家具の修復が続いている。さすがに同じ絵ばっかで飽きてきたぞ。……やっぱり何かおかしいな。ちよつと未来を見てみるか。そう考えた俺は闇黒剣に手を触れ、少し先の未来を見る。

……外壁の一部が崩れている廃墟、気を失っている老人を肩で担ぐサヤの姿。そして壊れた家具の集合体と対峙するカリバーの姿……

「……なるほど、そういうことか」

道理で家具を操っている人の姿が見当たらないわけだ。そもそも存在しないものなど、見つけることはできないからな。

しかし、だとするとちよつとめんどくせえな。下手に中に入ったらあの二人のように無心に家具の修復をすることになっちまう。そうになったら本末転倒だし、そもそもそんなことに時間を費やしたくない。じゃあ最善の手は……よし。

「よしよし……つと」

「うわあ!？」

闇黒剣で空間を引き裂き、闇の世界を通じて部屋の中にいたサヤを引つ張り出す。やはり廃墟の外に出た段階でこの廃墟に蔓延る魔力

からは解放されるようだ。サヤは先ほどまで無心で家具を修復していた時とは違い、はつきりとした意識を持ってあたふたしている。

「あれ!? 何で僕は急に外に!？」

「俺が連れ出したんだ」

「あ、ユウマさん! どこに行つてたんですかもう!」

「別にどこでもいいだろ。それで? 中で家具を修復してた気分はどうだ?」

「・・・それが、可笑しいんですよねえ。何か気づいたら家具を修理しなきゃつて思つちやつて・・・」

「だろうな」

「だろうなつて・・・気づいてたんですか?」

「お前とあの老人の様子を見てな。・・・おそろくこの廃墟、正確には家具にはこの森の魔力が宿っている。それも通常とは違って変異した魔力がな」

厄介なのはそれによつて家具達の意味が宿ってしまったこと。それによりここに足を踏み入れた人間を魔力で魅了し、家具の修復を行わせているのだ。たとえばそれが魔女であろうとも、逆らうことはできない。

「一度ここに捕らえられたら、今後一生家具の修復する物語になるだろう。それこそ死ぬまで」

「うええ!? それじゃ、あのお爺さんを早く助け出さないと! ああでもどうすれば・・・」

「そんなの簡単だろ。外に連れ出せばいい」

「外に連れ出すつて・・・そのためには中に入らないと駄目ですよね? 中に入つたらまた魅了されて家具の修理ですよ? それじゃあどうしようもないじゃないですか!!」

「落ち着け・・・外に連れ出すのが不可能に近いのなら、中に溜まっている魔力を外に放出すればいい」

「ふえ?」

「お前は魔女だろ。この廃墟を破壊すればいい」

.....

廃墟を視界の中に収められる程度の場所まで下がった俺は、木にもたれかかって様子を伺う。サヤはすでに箒で空中に浮かび上がっていて、いつでも放てるように風の魔法を貯めている最中だ。あれだけの魔法ならば、廃墟の壁を吹き飛ばすぐらい簡単だろう。老人の居場所とは判明しているし、風ならば少なくとも致命傷となるほどの怪我を老人が負うこともないはずだ。

・・・それにしても、あれほどの風を作り出せるとはな。あいつは風に何らかの適正がありそうだ。

その時、肩越しにこちらを見たサヤと目が合う。最終確認だろう、俺が頷くとサヤは貯めていた風の魔法を廃墟に向けて解き放った。「うお」

一瞬で崩れる廃墟の外壁。その衝撃は俺のところまで届いてくる。まあ崩れたとは言っても、廃墟の上階部分の一部だけ。まあ中に溜まった魔力を外に放出するぐらいでは十分だろう。

「ふう」

「うん、これだったら中の魔力も放出できただろう」

「わあ!?!いつの間ここに来たんですか!?!」

サヤが地上に降りてくる間に。

「ほら、早く老人を助けに行ったほうがいいじゃないか?」

「ああそうでした!ちよつと行つてきます!」

サヤはそう言い、廃墟の中へと入っていく。全く・・・慌ただしい奴だ。

だが、まだ終わってはいない。まだあの未来には到達していないのだから。

「ギャー!?!」

「・・・何とも分かりやすい・・・・・・変身」

『ジャアクドラゴン!』

カリバーへと変身し、サヤの後を追うように廃墟の中へと足を踏み

入れる。中には先ほど見た光景が広がっていた。気を失っている老人を肩で担ぐサヤ。そしてそのサヤへと迫っている壊れた家具が集合した怪物。一種の怨念だな、こりゃ。

『必殺リード！ジャアクヘツジホッグ！』

「ふっ！」

紫の染まった針状の光弾が、サヤに迫っていた怨念へと直撃する。

「うえ!? け、剣士!」

『ぐうううう！なんだ貴様!!』

「驚いたな、意思を持つだけでなく会話も可能とは。ならば聞いておこう、人を捕まえる理由は何だ？お前達に何があった？」

『ふぎけるなよ．．．お前達人間が！私たちを傷つけたのだろう!!』

怒りのままに、巨大な腕となった家具達が叩きつけようとしてくる。

『必殺リード！ジャアク西遊ジャー!』

筋斗雲を召喚、家具達を受け止める。なるほど．．．こいつらは全員に、人間によって傷つけられ、そして捨てられた物達．．．その恨みが森の魔力と結びつき、意思を持つようになった。

「．．．お前達の思いは分かった。だが、人を恨むだけではどうしようもないぞ。確かに人はお前達を傷つけ、捨てたのかもしれない．．．だが、そんなお前達を直すことができるのもまた、人なんだ」

『そうしなかったじゃないか!!壊れても直さなかった!傷ついたら捨てた!まだ使える道具もゴミのように見捨ててきた!だから!!』

「だから人間へ復讐する．．．か?」

力を込め、巨大な腕となった家具達を押し返す。

「だが、お前達はここしか知らないだろ?世界は広い．．．お前達が思っている以上に。そしてその世界には様々な人間がいる。お前達が出会った人間のように物を大事にしない奴以外にも、大事にする奴や、修理する奴もいる。それを生業に生きている奴もいる。．．．中にはうるさすぎる奴もいるがな．．．」

闇黒剣を見ながら思い浮かべるのはかつての仲間。その一人に聖剣に関してとても口うるさい奴がいたことを思い出す。

「お前達を直し、大事に使ってくれる奴は必ず見つけてやる。だから安心しろー。お前達の物語は俺が決める」

『っ……黙れ、黙れ黙れ黙れ!!』

家具達は逆上し、襲いかかってくる。そこで俺は慌てず、闇黒剣月闇を地面に突き刺してある魔法陣を展開した。以前王立セラステリアでフランさん達に使用したのと同じ魔法、闇黒剣月闇のエネルギーを吸収する力を利用して俺が造り上げた魔力吸収魔法。

展開された魔法陣は廃墟の中に残留している残りの魔力を吸収していく。家具達が意思を持ち、自由に動き回ることができる原因、その魔力がなくなっていくことで家具の動きがどんどん鈍くなり、やがて崩れ出していく。

「だから……今は眠れ」

やがて、全ての家具が崩れ落ちる。先ほどまでの自由に動き回る姿が嘘のように、ただの一つも動くことがなかった。

……

「ふう……色々ありましたけど、無事に依頼達成ですね！師匠の所に行って報酬もらって来ましょーと！」

色々想定外な事態は発生したが、無事に老人を助けて依頼を達成したサヤは教会への報告と報酬の回収へと向かっていた。元々お金を稼ぐために今回の依頼を受けた節もあるので、報酬をしっかりと受け取らなければ意味がない。

「それにしても……ユウマさんは一体どこに行っただけでしょう？あの剣士さんもすぐにいなくなっちゃいましたし」

カリバー……ユウマはサヤが気づいた時にはすでに姿を消していた。本来ならば依頼の協力者にはそれなりの報酬を渡すことになるのだが、その話をする前にユウマは居なくなっていた。時間があればあの後に森の中を捜索しただろうサヤだが、あいにく老人を放置するわけにもいかず、捜索は断念することとなったのだ。

「う〜ん・・・まあ考えても仕方のないことですね、ししよ〜!」

教会へと辿り着いたサヤは扉を開け、その中の一室へと向かう。部屋に居るのは魔法統括教会に所属する魔法使い数人と、夜闇の魔女・シーラの姿が。サヤは迷わずシーラのもとへと歩み寄る。

「ししよ〜、依頼を無事に達成しましたよ〜、起きてくださ〜い!」

「だあ、うつせえなあ!聞こえてるからそんな大声で話しかけるな!・・・ったく」

「随分とお疲れですね、何かあったんですか?」

「ああ・・・そういやお前にはまだ話してなかったっけ。ほら、前に人形の国で切り裂き魔を捕まえた話は知ってるだろ?」

「ああ、僕を差し置いてイレイナさんと二人で解決したあの」

「目が怖えよ・・・その際に遭遇した闇の剣士の行方だよ。あの後色々と搜索してみたが、どういうわけか足取りがさっぱり掴めねえんだ」

「はあ、それは大変ですねえ・・・何か手がかりは無いんですか?」

「手がかり言われてもなあ・・・ああ、そういやイレイナがいくつかの名前を呼んでたな。なんか見知った関係っぽかったし」

「は?イレイナさんと?その話もうちよつと詳しく」

「落ち着け!・・・ちよつと距離もあつたし避難誘導してたからはつきりとはしてないが、確かユウマとか言ってたな」

「え?ユウマ・・・ああ!!」

「うおびつくりした!急に何だよ」

「そうでしたユウマさんの名前どこかで聞いたことがあると思つたら・・・イレイナさんが言ってたんでした!!」

「は?おいどういふことだ?」

「実は今回の依頼で向かった森の廃墟で、そのユウマさんと会つたんですよ・・・という事はあの剣士さんもユウマさんが?」

「おい剣士に会つたのか?そいつは何の剣士だ!」

「ええつと・・・あまり剣士には詳しくはないんですけど、紫色でした」

「つ・・・間違いなえ、そいつは闇の剣士だ。それで?そいつはどこ

に行った？」

「それが・・・気づいたらいなくなっちゃって」

「・・・つーことは」

「どこに行ったか分かりません！」

「使えねえ・・・」

先ほどの興奮から一転、見るからに落胆するシーラ。

「だってしようがないじゃないですが！まさか師匠が探しているなんて思ってもいなかったんですから！」

「クソ・・・まあしょうがねえ、また別口が探すき・・・それよりもサヤ、お前に次の依頼だ」

「次の依頼ですか？まあいいですが・・・内容は？」

そうサヤが聞くと、シーラが取り出したのは一つの赤い箱。そこまで大きなサイズではなく、片手で抱えられるほどの大きさしかない。

「何ですかこの箱？」

「さあな、随分前にある事件で押収された品らしい。今回はその箱を・・・ふっ」

キセルから口を外し、壁にかけられている地図へと煙を吹きかけるシーラ。地図へと当たった煙は矢印に形を変え、ある国を指し示した。

「ここから海に出て西にずっと進んだ先に、自由の街クノーツってところがある。そこの魔法統括教会にそいつを届けて欲しい」

「はあ」

「その箱を届けて金を貰ってくるって依頼だ。簡単だろ？」

「え、それだけですか？そんなちよろい依頼なのに師匠がやらないんですか？」

「あいにく私はこの後用事があってな・・・とにかく、頼んだぜ」

「まあ分かりました、それじゃあ行くとしますね」

「ああ、蓋は開けるなって話だ。そこんとこ、忘れんなよ」

「あいあいさー！」

新たな依頼を受け、サヤは次の街へと向かい始める。自由の街クノーツ……物語が交わる場所へと。

.....

「いやあーこれはすごいな！宝の山だよここは！いいのかい、こんなすごい場所教えてもらって！」

「ああ・・・むしろ、買い手でつくかどうかの方が心配だ」

再び森の廃墟へと戻って来ていたユウマ。今度は一人ではなく、近くの街にいた古道具屋を連れて来ていた。

「そりや多少の修理は必要だけど・・・どれも質の良いヴィンテージ品だ。すぐに全部買い手はつくと思うよ」

「それを聞いて安心した・・・それじゃ俺はもう行く。あとのことは任せた」

「ああ、ありがとなー！」

家具を古道具屋に託し、その場を離れるユウマ。もう森の廃墟すら見えない所まで歩いてから、闇黒剣を取り出す。

今回は多少の寄り道をしたが、本来の目的を忘れたわけではない。ユウマは闇黒剣へと手を触れることで、未来を確認する。

「っ!？」

「……………自由の街クノーツ。天より降り立つ見たことのない剣士。その剣士と戦闘を繰り広げるカリバー^{自分}の姿。背後にはイレイナ、サヤ、フラン、シーラの姿。やがて戦闘の末に倒れ伏す自分。そんな自分に駆け寄ってくるイレイナに向かって剣士が聖剣を振り下ろす……………」

「くあ!?!……………はあ・・・はあ・・・今の、未来は……………」

見たことのない剣士と聖剣だった。だが、これで向かう場所は決まった。ユウマはその地へ向かって歩き出す。自由の街・クノーツへと。

.....

「……………そうですか、光の剣士が姿を現しましたか。」

「……………報告ご苦労様です。下がって構いません。」

「……………ふふ、失われた光の剣士が姿を現したのなら、次の段階へと進めるとしましょうか。」

「……………あの猟犬を、解き放つとしましょう。」

第十七話

自由の街・クノーツ。ニケの冒険譚では弟子のシレンとフローラが骨董堂と呼ばれる組織を壊滅させた街。ニケの冒険譚の愛読者ならば一生に一度は必ず行っておきたいと思うその街に、ある人達が向かっていた。

その内の一人であるユウマは、この間見た未来を思い返して久方振りの焦りを感じていた。未来を知ることができるようになってからというもの、焦りなど皆無に等しかったユウマは、その焦りを感じるごとに街へと向かう速度を上げる。しかし、クノーツに辿り着くには海を渡る必要性がある、道のりはまだまだ長い。

ちょうどその時、ユウマの上空を一体の鳥が通過する。それは鳥と呼ぶにはあまりにも大きく、異質な容姿をしていた。その身はまるで炎に包まれているかの如く、羽ばたくごとに辺りに火花が撒き散らしながらある街へと向かっている。

「あれは・・・!」

それを視認し、ユウマはクノーツへと向かう速度をさらに速めるのだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ユウマがクノーツへと向かっているのと同時期、二人の魔女が同じように海を渡っていた。イレイナの師匠である星屑の魔女フランと、サヤの師匠である夜闇の魔女シーラの二人である。同じ師を持つ謂わば姉妹弟子の関係にある彼女たちは、フランの頼みである人物を探していた。

「それで?あの剣士の目的が分かったのか?」

「まだ完全に分かったわけではありません。だから、それを確かめたんです」

彼女達・・・というよりもフランが探しているのはユウマである。

以前彼と相対した時に聞いた話、そして彼女自身がかつて手に入れた情報から一つの可能性を思い浮かべた彼女は、その真偽を確かめるべくシーラの協力の元、ユウマの行方を探していた。

それでも一筋縄ではいかなく、情報を集めるだけでなく自分たちも探し回ることにしたのだ。今までのイレイナのようには。

「にしても、流石に想定外だよ。唯一手に入った情報は私の弟子が依頼の最中に遭遇したって程度だ」

「え、あなた弟子がいたんですか？」

「そこかよ……言ってなかったか？ サヤって名前だ、お前の弟子とも知り合いじゃなかったぜ？」

「サヤ……魔女見習いになるためにイレイナが協力してあげた子です。世間は狭いですねえ」

「全くだ。イレイナにも会ったぜ？ サヤに話したら死ぬほど悔しがってた」

「あらあら」

そんな世間話をしながら、フランはふと思う。「過去の自分たちからしたら、こうして二人で行動しているのが嘘みたいだろう」と。

何せ、この二人は出会った当初、すこぶる仲が悪かったのだ。それこそ犬猿の仲と称されるほど。事あるごとに二人は衝突し合い、口喧嘩をし、お互い相手のことを快く思っていなかった。

そんな彼女達が今のような関係性になったのは、ある事件が密接に関わっている。そう、それは自由の街クノーツの出来事だった。

.....

まだフランが魔女見習いとして師匠である灰の魔女“ヴィクトリカ”とその幼馴染のハマと共に旅をしている頃。それは突然のことだった。

「師匠、今何とおっしゃいました？」

「私、弟子が欲しいのよ」

「・・・ヴィクトリカ、その言い方は少し誤解を生むぞ」

すでに日が落ちているにも関わらず3人で空を飛んでいるところ、フランが耳を疑うことをヴィクトリカが話し始めた。自分はヴィクトリカの弟子だと思っていたフランも思わず聞き返してしまう。

「正確にはもう一人、だろ?」

「さすがはハヤ、その通りよ♪」

「・・・そういうことは、師匠が決めればいいと思います」

「でも、私が勝手に決めたら怒らない?」

「どうせ、もう決めているんでしよう?」

「お、フランも大分ヴィクトリカのことが分かってきたな」

「やっぱり・・・」

「大丈夫よ、フラン。良い子だから♪」

そう語るフランはとても笑顔であった。とにかく、もう決まっている以上弟子であるフランが言えることは何もない。ただ、“良い子だから”とヴィクトリカが話したときに少し後ろを飛んでいたハヤマが苦笑いを浮かべているのが気になるところではあったが。

兎にも角にも、フランの了承は出たも同然。3人は早速そのもう一人の弟子の元へと向かい始める。・・・残念ながらそこその距離があつたため、着いた頃にはもう日が登っていた。

辿り着いたのはすでに寂れた教会跡地。その瓦礫の山の上に、その人物は座っていた。

「遅かったじゃないか、師匠!」

そう、若き日のシーラである。彼女はヴィクトリカ達の姿を見て、瓦礫の上から飛び降りてくる。この時代では煙管ではなくタバコを啜えている。

「ごめんなさいね、ちよつと弟子を説得するのに時間がかかっちゃつて」

「しれつと嘘をつかないでください・・・」

「へえ・・・こいつが私の姉弟子ねえ・・・随分と弱そうだけど」

「むっ・・・」

「ああ?何だよオメエ、見てんじやねえやんのかゴラア!」

「師匠、どこが良い子なんですか。出会い頭にガンつけて毒を吐いてくるんですけど」

「んだとテメエ」

「ほらほら、そんな喧嘩腰になるな」

「姉妹弟子なんだから、二人共仲良くするのよ」

ハヤマが二人を引き剥がし、ヴィクトリカが笑いながらそう言うと、フランは納得仕切れてはいないがこのままでは話が進まないの大人しくシーラへと手を差し出す。

「・・・分かりました・・・よろしく、名前は？」

「テメエに名乗る名前なんざねえ！」

「・・・」

しかし、シーラにはその気は全く無いらしく、差し出された手も振り払ってしまう。普段は温厚な性格のはずのフランも、流石に怒りを抑えようとしなくなってきた。それを見かねたハヤマが二人の名前を教える。

「こっちはフランで、こっちはシーラだ。全く・・・これから一緒に旅をすることになるんだから、ずっとその調子じゃ疲れるぞ？」

「二人とも、仲良くね？」

「はああああ」

「ごほごほっ！」

シーラがフランの顔面にタバコの煙を吹きかける。フランはタバコはあまり得意ではなく、むしろ苦手な部類に入る。その煙を顔面に受け、フランは咳き込むとヴィクトリカへとはつきりと申しつける。

「師匠、無理そうです！」

「おお珍しい」

「ふふふ」

さて、これがフランとシーラの初対面の瞬間である。今の話で十分分かったと思うが、二人の出会いはずいぶん最悪だった。二人はとにかく馬が合わず、事あるごとに対立行動を見せた。

例えば夕食の時、フランは魚料理を所望したのに対してシーラは肉料理を所望、結局ヴィクトリカが間をとってパンを選んだ。

例えば魔法を教わる時、フランは氷魔法を所望したのに対してシラは炎魔法を所望、結局ヴィクトリカが間をとってお休みにした。

例えば魔法使いにとって不可欠な杖を失ってしまった時の対処法を教わる時、フランが弓の使い方を所望したのに対してシーラは体術を所望、結局ヴィクトリカが間をとってナイフの隠し方と抜刀の仕方を教えた。

……まあ詰まるところ、対立はするが結局師匠のヴィクトリカが全てを決めるので、あまり大きな問題は起こらなかった。陰で苦労している人はいたが……。

そんなこんなで続いた旅の途中、四人は自由の街クノーツへと降り立った。目的はこの街の魔法統括教会支部からの依頼を受けるため。ところが、街に降り立った瞬間から不穏な空気を感じ取る。壁には“魔法使いは悪”と書かれている貼り紙が至るところに貼られていて、街の人々も四人の姿を見ると何やらヒソヒソと話している。

「どうやらあまり歓迎はされていないようだな」

「あら、そうかしら？こんな物があるとはいえ、この街そのものを拒絶する理由にはならないわ。そんなんじや、この貼り紙や看板を出している連中と同じよ。さ、行きましょう」

魔法統括教会の支部へと向かう四人。その間にも街中の人からの視線を何度も浴びることになったが、多少気にはなるものの特に何もすることなく支部へと到着する。

着くや否や、応接室へと通される四人。ヴィクトリカ、フラン、シーラの3人がソファアールへと座り、ハヤマは3人の後ろに立つ。やがて部屋に入った瞬間にお礼を言って頭を下げる。彼はかなり困っているのか部屋に入った瞬間にお礼を言って頭を下げる。

「ようこそ、首を長くしてお待ちしておりました。早速ですが、依頼と申すのはですね……」

「報酬はいくら？」

会話が始まるや否や、ヴィクトリカが聞くのは依頼内容よりも報酬。彼女にとっては報酬の金の方がよっぽど重要なのだ。

「……あ、あの、内容の方を先に……」

「いくら?」

物言わさぬ勢いで笑顔で聞き返すヴィクトリカ。いつものことなのか、ハヤマやフラン達が何か言う様子もない。やがて圧に負けたのか、支部長を大人しく報酬の額を口にする。

「ええと・・・金貨十枚でございます」

「ほお・・・」

（ああ、喜んでる!）

「それで、内容は?」

どうやら報酬の額には満足しているらしい。受ける価値はあると判断したのだろう、ヴィクトリカは内容を尋ねる。

「はい・・・この街には今、“骨董堂”と名乗る怪しい組織が暗躍しています」

「ほうほう、骨董堂」

「街で、魔法使いを誹謗中傷するような貼り紙や看板をいくつも見たと思うのですが」

「ああ!」

「あれか」

「骨董堂は、魔法を使えない連中が集まった強盗団です。魔法を使えない故に、自分たちの邪魔をする魔法使いを心底毛嫌いしていて、あのような嫌がらせや、誹謗中傷を行っています」

「なるほど・・・大体話は読めた。要は俺たちにその骨董堂の連中を捕獲してほしいってところだろう?だが、それならこの街にいる魔法使いや魔女で十分事足りるはずだ。どうしてわざわざ旅人である俺達に依頼をするんだ?」

金貨十枚という額も決して安くはない。この街にいる魔法使いに依頼すれば、安くはない額とは言っても金貨十枚も払う必要性はないだろう。それにも関わらず金貨十枚という額を支払ってまで旅人の自分達・・・正確にはヴィクトリカに依頼しているのだ。そこを疑問に思わないわけがない。

「それはぐもつともなのですが・・・」

「何か事情が?」

「ええ……骨董堂の連中は、不思議な道具を持っているのです」「不思議な道具？」

「何でも斬ることが出来る剣であったり、何百発でも打つことが出来る銃であったり、幻獣を見せるマツチであったり……魔法を使わなくとも魔法と同等、あるいはそれ以上の特殊な力を引き出すことが出来たり、不思議な物なのです……」

「なるほど……この街にいる魔法使いや魔女は、粗方その道具によってやられてしまった……ってことか？」

「はい……その道具によつて奴らには逃げられっぱなしで……この街では、魔法使いの信頼は地に落ちてしまっているのです」

「それで、大金を払つてでも事態を収束させようと……」

「左様です……」

ひとまず依頼の内容は分かった。話を聞く限り、連中はその道具に頼っていることが伺えるから、難度もそこまで高くはなさそうだ。報酬も申し分なく、さっさと依頼を完了させて報酬を受け取ろう。そう考えたハヤマはヴィクトリカへと視線を移す。あくまでも依頼されているのは魔女であるヴィクトリカなのだ。ヴィクトリカが依頼を受ければあとは自分が勝手に動いても問題無い。と思っていたハヤマだったが、ヴィクトリカは全く予想外のことを口にした。

「分かりました、この件、必ず解決することを約束するわ……この子達が！」

「え？？」

「はっ！」

ヴィクトリカは両脇に座っているフランとシーラの肩に手を置いている。つまり“この子達”というのは、フランとシーラの二人のことだろう。一体どういふことかと視線を向けるハヤマや支部長を無視して、ヴィクトリカは二人に話し始める。

「二人で骨董堂の連中を捕まえなさいな。厄介な道具を持っているとしても、私の弟子の貴方達なら問題無いわよね……しくじつたら、破門よ♪」

とつてもいい笑顔で宣告するヴィクトリカ。その言葉を聞いた瞬

間、フランとシーラの頭の中には共通の言葉が流れた。

“自分が骨董堂の連中を捕らえて、フラン／＼シーラこいつを破門にしてみせる”
と。

第十八話

骨董堂討伐の依頼を引き受けて早数日。進展は良くも悪くも進まなかった。

と言うのも、実際に捜査をしている二人がお互いの足の引つ張り合いをしているからだ。それによって骨董堂の道具こそ入手することは出来たが肝心の人は誰も捕らえられておらず、結局は骨董堂の妨害、という枠に収まっているのが現状なのだ。

「なかなか解決しそうにないわね」

「この事態になることは予想出来てたろ・・・」

「あら？ハヤが持つてるそれって、フランが奪ってきた？」

「ああ、なんでも斬れる剣だと。一回試してみたが、まあ確かによく斬れる剣だよ。・・・そういう魔法がかけられているがな」

「そうねえ」

街中の喫茶店でお茶を飲みながら話すハママとヴィクトリカ。ハママは以前フランが入手した骨董堂の道具の一つを調べていたが、剣にはある魔法がかけられていた。

「恐らく、骨董堂が使う道具は全て魔法がかけられているんだろう。・・・だとしたら、調べなきゃならないことがあるな」

「誰が骨董堂に道具を渡したか・・・ね？」

この剣にかけられている魔法は、魔法使いなら誰でも扱えるような代物じゃない。何処かの誰かがその魔法を創り、道具に込め、そして骨董堂に渡した。

「とりあえず俺はそっちを調べてみるよ。骨董堂の連中の確保はフランとシーラに任せなきゃいけないようだしな」

「ふふ、よろしくね♪」

.....

ハママとヴィクトリカのやりとりから再び数日が経過、二人がいたのはまた別の喫茶店でフランがコーヒーを飲んでた。手元には

今朝購入した新聞紙が置かれており、その一面に目を通す。その内容はつい昨日の出来事、フランからしたらありがたい内容が記されていた。

そんな時、空いていたフランの向かいの席に座る一人の女性が。片手にはコップを持っており、かすかに空いている口からは八重歯が見受けられる。

「お主がフランとやらじゃな？」

「どうして私の名を？」

「細かいことは気にしなさんな。それで、仕事は順調かい？」

「そう見えますか？」

フランはそう答えると、女性に見えるように新聞の一面を広げて見せた。先程までフランが目を通していた一面だ。

「何々？」骨董堂のリーダー、邪魔をする魔女の首を刎ねると宣言
”・・・なんとも物騒じゃな！”

笑いながら、あたかも他人事のように振る舞う女性。しかし、それとは裏腹にフランは涼しげな表情のままだ。

「いいえ、この状況は願ったり叶ったりです」

「何故じゃ？命を狙われとるのじゃぞ？」

「ええ。要は向こうから来てくれるということでしょう？探す手間が省けてありがたいです」

「ほお、対した自信じゃな。しかし、そう上手く行くかな？」

フランの考えに少し物申しながら、机に置かれていたクッキーを食べる女性。そんな女性に向かって、フランは杖を向けながら答える。

「ええ。だって、こうやって来てくださいましたから。・・・貴女が骨董堂のボスですね？」

「・・・」

会話を開始してから、初めて黙る女性・・・否、骨董堂のリーダー。フランの読み通り、彼女は骨董堂のリーダーであり、新聞の内容の宣言を行ったその人である。

杖を向けられても尚、骨董堂のリーダーに変化はない。怯えるわけでも、許しを乞うわけでもない。何も問題無いとでもいつているよう

な表情のまま、コップの縁を鳴らした。その瞬間、喫茶店の中にいた全ての人がフォークやナイフ、ロープを取り出した。そう、この店はすでに骨董堂によって占拠されていたのだ。客だけでなく、先ほどコーヒーやクッキーを運んできた店員までもが骨董堂の一味であり、銃を向けている。

有利だったはずが一転、圧倒的な戦力差が生まれてしまった。それでも、相手のリーダーは自分の目の前にいる。フランは杖を向けたまま魔法を発動しようとしたところ、骨董堂のリーダーに止められてしまう。

「おっと、妙な真似はするんじゃないよ。少しでも動いた瞬間、新聞の見出し通りにあんたの首を刎ねてやるからな」

フランは考える。この状況をどう切り抜けるか、どうやってコイツらを捕らえるか……しかし、見たところこの場にいるのはリーダー含め十数人、全員だとしたらあまりにも少なすぎる。だとしたら取るべき行動は――

「連れて行け！こやつを始末するぞ！」

「へい！」

杖を奪い取り、孫の手代わりに背中を掻く骨董堂のリーダー。その姿も、袋をかけられたことで視界を奪われてしまい見えなくなってしまう。

.....

それから数分。どこかへと連れてかれたフランは両手を拘束された後にかけられていた袋を外される。日の光の届かない、どこかの建物の中。周囲には骨董堂であろう連中が囲んでおり、自分の後ろには同じように捕まったのかシーラの姿を確認できる。

「んだよ、あっさり捕まってんじゃないやねえよ。使えねえ姉弟子だな」

「あなたも捕まっていたんですか。ほんとにつくづく使えない妹弟子ですね」

まるでいつものように軽い言い合いを行う二人。

「お前達魔法使いはいつもそうじゃ、我ら骨董堂の仕事を悉く邪魔しおる……おぬしらのせいで、我らの仕事はいつも失敗ばかりじゃった。気に食わん、実に気に食わん!……お前達もだ!こんなちんちくりんの魔女見習い二人に、遅れを取るとはのお!!折角地に落ちた魔法使いの評判がまた元に戻ってしまいうじゃろうが!!今までの苦労を水の泡にするつもりかあ?」

そんなことを骨董堂のボスが話している間、フランとシーラは拘束された手をこそそと動かす。その際にフランの手がシーラの足に触れてしまい、思わずシーラは笑い出してしまう。

「それでよく骨董堂を名乗れたもんじゃな!もつと気を引き締めなあ!!……ん?」

その笑いに気づき、離していた視線を二人に戻す骨董堂のリーダー。その視線に気づいたシーラもなんとか笑いを抑え込み、骨董堂のリーダーへと微笑みかける。

「師匠がどーだの、話は全部筒抜けだったよ。なんじゃ?お遊びで我らの邪魔をしとったんか?」

「……遊びにもなんねーよ。お前らをぶつ倒すことなんて」

悪態をつき、唾を骨董堂のリーダーの顔面に吹きかける。

「ぬあ!!お、おぬし……!ぐあ!!」

怒りのままにシーラの胸ぐらを掴みかかったところで、思いっきり顔面に頭突きをかますシーラ。骨董堂のリーダーは派手に倒れる。

「「頭!!」」

「つう……こやつらを始末しろ!今すぐに!!」

「「へん!!」」

完全に怒りを買ったらしい。指示を出された骨董堂の連中は各々の得物を手に持ち二人へと歩み寄る。今まで散々自分たちの邪魔をしてきたとはいえ、杖はこちらが持っている。拘束もしている以上子供二人を始末するなんて簡単だ。そんな余裕の態度が透けて見える動き方だ。そんな油断しまくりな状態だから、一二人がすでに拘束から逃れていることに気づかない《……》。

「ふえ？」

間拔けな声を出す骨董堂のリーダー。二人の腕を縛っていたはずの縄は宙を舞い、その手には杖に変わる得物が握られている。以前師であるヴィクトリカから教わったナイフだ。しつかりと隠し持っていたそれらは骨董堂に奪われることもなく、シーラが骨董堂の注目を集めている間にフランが取り出し、縄を切った。

「は……は……は……？」

「はあ!!」

手始めに骨董堂のリーダーへとナイフを投げるシーラ。ナイフはギリギリのところで避けられる。……多少服は傷ついたかもしれないが。

それに続くようにフランもナイフを投げ、ひとまず近くにいた骨董堂が持っていたナイフを弾き飛ばす。それと同時にシーラは駆け出し、骨董堂のリーダーの腹部を蹴りつける。その際にこぼれ落ちた杖を回収、フランへと投げ渡す。

「そらよー」

優々とそれをキャッチし、即座に魔法を発動。骨董堂の連中を次々に薙ぎ倒していく。

「な、何をしておる！そやつらさっさと仕留めんか！」

起き上がりながら部下へと指示を出す骨董堂のリーダー。だがその間にもフランの手によってどんどん再起不能になっていく。その間に地面に落ちていたタバコの箱を発見したシーラはそれを拾い、一本啜えて火をつける。そんなシーラを二丁の銃を構えた男が狙っていた。

「へっへっへー！」

次々と放たれる銃弾。話に聞く何発でも打てる銃なのだろう、弾切れを気にする様子もなく、何十発と打ち続ける。さて、そんな打たれ続けているシーラはというと、手元に自身の杖を引き寄せ魔法を発動。銃弾は一つ残らずシーラの手前で動きを止める。

それでもめげずに撃ち続ける男だったが、流石に負荷が掛かりすぎたのだろう、シーラに一発も入れることなく銃は爆発してしまう。

その間も一人で骨董堂を薙ぎ倒し続けていたフランの背後に忍び寄る男が一人。が、合流したシーラの魔法によって難なく撃退される。

「もしかして、あなたもわざと捕まっただんですか？」

「はっ、潜入して一網打尽にしてやろうと思っただけなあ」

「無茶ですよ」

「お前もだろー！」

決してその手を休ませることなく魔法を行使しながら会話する二人。やがて起き上がってくる骨董堂もいなくなり、最後の一人が倒れ伏す。その際に何やら赤い箱がこぼれ落ちたが、フランとシーラはそれを気にも止めない。

「はあ．．．はあ．．．」

「はっ．．．はっ．．．」

流石に魔法を酷使し続けた際か息が上がっている二人。そんな二人の元に先ほどまでの強気な態度が嘘のように謙った態度で近寄ってくる骨董堂のリーダーの姿が。

「さ、流石は魔法使い様．．．まだまだ我々では歯が立たぬのおお！」

言い切るのを待たずに容赦なく放たれる魔法に逆らえずに吹っ飛ばされる骨董堂のリーダー、これで完全に骨董堂は潰すことができたはずだ。フランとシーラはその場に座り込んでしまう。

「少し休んでから教会に連絡しましょう」

「賛成だ」

「．．．あなたは、どうして師匠に魔法を学ぼうと思ったのですか？」
唐突な質問。しかし、今この場を逃せばもう二度と聞くことはない気がする。そう思ったフランは兼ねてより疑問に思っていたことを口にする。

「．．．別に、大した理由じゃねえよ．．．．．私は独学で魔法を覚えてな、それを使って生活してたんだが、ある日財布を盗もうとした相手が師匠でな、あっさり捕まえられちゃった。そんな時に初めて知ったんだ、魔女って存在を」

「それまで知らなかったんですか？」

「誰も教えてくれなかったからなあ。だけど師匠が教えてくれた、魔法がどれほど強くて、人々に尊敬されているかを。．．．魔法になれば、こんな野良猫みたいな生活をしないで済むって思った．．．だから弟子にしてくれて頼んだ。な？大した理由じゃないだろうか？．．．で、あんたは？」

どうやらヴィクトリカの弟子になった理由を聞きかかったのはフランだけではないらしい。粗方自分の経緯を話し終えたシーラは逆に聞き返す。

「私の方がよっぽど大した理由じゃありませんよ．．．私の故郷には魔法がいらないんです。だから魔法になれば、それは国でただ一人であるということ．．．そしたら一生食いつばぐれることがないじゃないですか。だからです」

「．．．打算的に魔法になろうと思ったってわけか」

「まあ、要約すれば」

「んだよ、私と同じじゃねえか」

「ですね」

思わぬ共通点、たった一つの小さな共通点ではあるが、それは二人にとつては大きな共通点。性格も、味の好みも、何もかもが違うと思っていたければ、結局は自分と同じなのだ。

お互いの答えに満足したのだろう。それぞれが優しい笑みを浮かびている。

「さて．．．そろそろ教会へと連絡しましょうか」

「だな．．．結局、破門の話はパアになっちまったな」

「ですね．．．けど、もう必要ないかもしれないですね」

「．．．かもな」

慌てる必要はないだろうが、また魔法を酷使するのは流石に面倒すぎる。さっさと教会へと連絡をしようと立ちあがろうとした時だった。

「やれやれ．．．骨董堂もこの程度でしたか」

「ふ！」

急いで飛び退くフランとシーラ。いったいどこに隠れていたのか、いつの間にか姿を表した男が一人立っていた。先程の惨劇を見ていたであろうに、その顔に恐怖という感情は一切無い。むしろ余裕すら感じさせる。

「なんですか、あなたは？」

只者ではない雰囲気、二人は警戒を解くことなく杖を構える。何があっても、いつでも魔法を行使出来るように。

「そうですねえ……彼らの支援者、とでも言っておきましょう。最も、もはや意味のない肩書きですが」

「支援者だと？」

「それにしても……あまりにも美しくない」

「は？」

「これが終わりだなんて……美しくないにも程がある。だからせめて……私が吊ってあげましょう」

男の背中から出現した怪しく光り輝く触手が、倒れ伏している骨董堂の連中諸共二人を襲う。

「んな？！」

「ぎゃ!!」

瞬間的な判断で防御魔法を展開する二人。だが、それはいとも容易く打ち碎かれる。触手はその勢いを殺さずに二人へと迫り――

「ふん!!」

何も無い空間に突如発生した黒い穴から、闇黒剣を携えたハヤマが乱入してその触手を斬り倒した。

「二人とも、大丈夫か？」

「は、ハヤマさん!？」

「え、今どっこから出てきた？」

「それは後で教えてやる」

ひとまず二人の無事を確認したハヤマは、闇黒剣を目の前の男へと向ける。

「合点がいったよ……お前が骨董堂にあの道具を渡したんだな？……ストーリーストリウス！」

「これはこれは……今代の闇の剣士ですか。こんな所までご苦労ですねえ」

「目的はなんだ？」

「ふっ、そんなの……ただの暇つぶしですよ。むしろそれ以上に何がある？」

「……そうか、なら……遠慮はいらないな！」

闇黒剣を振りかぶってストーリーウスへと向かっていくハヤマ。しかし、その剣が到達する前にストーリーウスは姿を消してしまった。

「なっ……くそ、どこ行った!!」

叫ぶハヤマ。しかし、その返事は一向に返ってこない。どうやらもうこの場から去ってしまったらしい。

「ちっ、逃したか……しょうがない、ヴィクトリカに連絡して、こいつらを捕縛するか」

「あ、あの、ハヤマさん……」

「お、二人とも、お疲れ様。よく骨董堂の連中を壊滅させたな」

「けどよお、さっきのやつはなんだったんだ？あんたは知ってるみたいだったけど」

「……あいつはストリウス、はるか昔から存在するメギドと呼ばれる怪物の一体だ」

まあ、表向きにはあまり伝えられていないけどな。と付け加え、ハヤマはヴィクトリカへ通して教会へと連絡する。程なくして教会の魔法使いが駆けつけ、無事に骨董堂は牢屋へと入れられることとなった。結局骨董堂に道具を渡したストリウスは行方が分からずじまいとなり、分からなかったとして教会へは報告が行われた。

これが自由の街クノーツでの一連の出来事。二人の魔女見習いの活躍で街を騒がせた骨董堂は壊滅し、四人はこの街を去った。それからも旅は続き、紆余曲折を経てヴィクトリカとハヤマの故郷……

平和国ロベツタにて、フランとシーラは魔女へと昇格を果たした。それと同時にフランには“星屑の魔女”を、シーラには“夜闇の魔女”の魔女名を与えられた。

夜闇と星屑は常に共にあるもの—————そういう願いを込めて、ヴィクトリカが与えた名だ。……最も、その由来は二人の髪の色からではあるが。曰く、“かつこいいから”らしい。こうしてヴィクトリカの旅は……ニケの冒険譚は終わりを迎えた。

……

さて、そんな思い出話も終わり、フランとシーラは懐かしさに思いを馳せる。と、そこでシーラはあることを思い出した。自由の街クノーツ、今現在弟子であるサヤにあるものを託して向かわせた地であり、そして持たせた箱は、あの時骨董堂の一人が落とした赤い箱であることを。

「あああああああああああ!!!」

「ちよつ……急にどうしたんですか？」

「行き先変更だ!!」

「ええ!？」

「良いから黙ってついてこい!!」

「全く……ちよつと待ってください!」

突如急旋回をしたシーラに文句を言いながらもそれを追いかけるフラン。二人が向かう地はかつて骨董堂と対決したあの場所……自由の街クノーツだ。

第十九話

自由の街クノーツ……ニケの冒険譚の愛読者なら一生に一度は来ておきたい街の一つ。当然ニケに憧れて魔女になったイレイナにとつても、それは変わらない。

朝、未だにユーリから聞いた話の整理がついていないイレイナは、少し外の空気を吸おうと考え部屋から出る。そこで、別の部屋で泊まったいたユーリとばったり会う。

「どこか行くのか？」

「ええ……ちよつと外の空気を吸いに……」

「そうか、それなら魔女の格好はしないほうがいい」

「え？どうしてですか？」

ユーリが渡してきたのは、どうやって手に入れたのかまだ新しい新聞。見出しには「デカデカと」骨董堂が復活!」と銘打たれていた。

「骨董堂……つて、まさかニケの冒険譚に出てくるあの？まさか実在していたとは……あれ？ということはこの街って……」

「ん？ああ、言つてなかったな。ここは自由の街クノーツと呼ばれている街だ」

「クノーツ!？」

街の名前に反応するイレイナ。いずれは来ようと思つていた街に、思いもよらず来れたイレイナは、気分転換もかねて観光をしようかと思いを馳せる。

自分の格好を確認するイレイナ。魔女のローブや帽子は部屋の中に残っていて、ぱつと見ではとても魔女とは思えない。これなら良しと、イレイナは早速外へと出る。

昨日は全く気付くことがなかったが、どうやらこの街は四方を海に囲まれているらしい。少し高台に登れば簡単に海を見ることができ

る。海を見て、再び街中へと戻つてきたイレイナはパンを食べながら歩いてきたところに、ある喫茶店を見つける。

「ここは……もしかしてニケの冒険譚で弟子のフーラが骨董堂のボス

と会ったところでは？」

少し興奮しながら、喫茶店へと近づくとイレイナ。外から中を覗き込み、物語でフーラが座っていたであろう席を探す。

.....

さて、イレイナが街中を観光しているのと同時刻、イレイナとは少し離れた場所でサヤがクノーツに到着していた。魔女らしくいつもの格好のまま箒に跨り空を飛び、道行く人達の視線が集中する。

サヤ自身視線が集まっていることには気づいているが、その理由までは気にしていない様子。そのまま教会支部に向かって飛び続ける。

やがて人通りが少なくなってきた時、サヤを呼び止める声が。

「あちよつとそこのお主……そこのお主じゃよお主、可愛い魔女のお嬢さん」

「えもしかなくても僕のことですなえ！」

なんとも分かりやすい。最も簡単に釣られたサヤは振り返り、呼び止めた者の近くまで降下する。その人物は魔女のような帽子を目深に被り、口元は布で覆っていて顔ははつきりとは分からない。しかし、そこそこの年を召していることはなんとなく理解できる。

「そうじゃよ、そうじゃ！魔女さんよ、この街は近頃物騒でな……特にそんな格好をしていたら、いつ誰に襲われるかわかったもんじゃない」

「襲われる？この街ってそんな危険なんですかあ？」

「そうなんじゃ、危険なんじゃ」

さて、サヤは全く気づいていないのだが、2人が会話をしている間に1人の男が抜き足差し足でサヤの足元まで来ており、必死に頭上の手を伸ばしている。その手の先にはサヤの鞆があり、その中には例の箱が入っている。

「へえ、それは大変ですねえ」

「お主は知らんじやろうが、その昔沢山の魔法使いがここで襲われた。

魔法使いは皆震え上がっておったわ！……はよせんかい！
「え？」

「ああいや、なんでもない！」

サヤが足元に視線を移すも、その時には男はサヤの死角に入り込んでいて、サヤは一切気づくことがない。

「であるからして、ここで生き残りたくばこの“骨董堂”……いやアンティーク堂で素晴らしい護身用の道具を一式買っておいはいかがかな？」

「はっはくん、そんなことだろうと思った！僕押し売りは遠慮していませんで〜！」

「あ、ま、待ちな〜！」

なんとかかして箱を手に入れようと試行錯誤している男には一切気づくことなく、サヤは急上昇してその場から立ち去っていく。しっかりと箱を持ったまま。

なんとか呼び止めようとしてもサヤは止まらない。仕方なしに呼び止めていた者は後ろにあった露店から赤い球に手を伸ばし、それをサヤへと吹きかける。球はサヤの背中に当たった瞬間に飛散、中にあった赤い煙がばら撒かれるが、サヤ自身に目立った変化は見られなかった。

「すいやせん、頭……」

「ふん、相変わらず鈍臭い奴じゃのお……まあいい、ようはあの箱を開けさえすれば良いのじゃから」

そんなことを話すその人物の顔は、まさしくフランとシーラが捕まえたあの骨董堂のリーダーの顔だった。

そんな会話が起こっているとは露知らず、サヤは教会本部へと進み続ける。しかし、どうも怪しい空気感が漂い始める。パツと見ただけでも人の姿は全く無く、とても静かな道だ。それでも、そこに漂う異様な空気は、確かにそこにある。

その空気を感じ取ったのか、サヤの動きが少し身長になり始める。辺りを見回し、少しゆっくりと飛行する。

と、その瞬間の出来事だった。横に伸びる小さな路地裏から突如と

して現れた手がサヤを捕まえ、そのまま引き摺り込んでしまった。叫び声をあげようにも口を抑えられ、声が出せない。

やられる!! ―――― そう思ったサヤの耳に聞こえてきた声は、彼女には聴き慣れた、それでいてとても懐かしい声だった。

「暴れないで、私よ姉さん」

「へ?・・・ミナ!」

自身を引き摺り込んだ者の顔を確認し、サヤは驚愕する。他でもない、サヤの妹のミナなのだったから。

「ど、どうしてここに・・・?」

「私は教会の仕事で潜入捜査・・・よからぬことを企んでいる連中がいるらしくてね、まだ潜入はできてないけど・・・」

「よからぬこと?」

「・・・姉さんはなぜこの街に?」

あまり多くは語ることなく、ミナはサヤへと話をふる。とても久しぶりに再開した姉妹の会話とは思えないほど、ミナは少し呆れているような口調で話す。

「僕も仕事だよ、仕事!教会の!」

「はあ・・・よりによって教会の仕事?」

「これを届けにね」

サヤが取り出したのはシーラから渡されたあの箱。見た目は至って普通の箱なのであまり疑問に思うことはないが、一体どんな箱なのかとミナは疑問に思う。

「それは何?」

「知らない」

あいにくだがサヤは渡されただけであり、開けてはならないということぐらいしか知らされていない。当然聞かれても答えられるだけの知識も持ち合わせていなかった。そして、ミナもまた不思議に思う。教会からは特にそのような箱が届くなど一言も聞いていなかったのだから。

「教会からは何も聞いてないけど・・・とりあえず、私が止まっている部屋に行きましょう」

おそらく魔女だとバレないためだろう。ミナは持っていた帽子を深く被り、その場から立ち上がる。

「ああ僕これをお届けにいかなきやだから。それに迷惑だろうから宿屋に泊まるし、気にしないで」

「……はあ、そう」

「ため息つくと幸せが逃げるよ」

……

ちょうどその頃、喫茶店の中に入らずに例の席を探していたイレイナ。しかし、夢中になりすぎるあまり少し離れた場所にいた2人の存在に全く気づかなかった。

「あやつでいいじやろう」

「いいんですか?」

「間抜けそうじゃからの」

そう、先ほどサヤに謎の球を投げつけたあの2人、骨董堂のリーダーとその部下である。リーダーは先ほどサヤにしたのと同じように青い球をイレイナの方へと向ける。

「きつと何も考えずにあの箱を開けてくれるじやろうよ」

放たれる青い球。それは一寸の狂いもなくイレイナの後頭部に直撃し、青い煙がばら撒かれる。

「……ふえ?」

不思議な感覚に陥るイレイナ。一瞬の眠気のようなものに誘われて瞼をほんの数秒だけ閉ざす。しかし、次に瞼を開けた時には、目の前の光景も、声も、体も、何もかもが自分ではなくなっていた。

「いい? 姉さんは何もしないで」

(姉さん……? ……誰? どこ? 喫茶店の前にいたはずですが……)

辺りを見渡すイレイナ。先ほどまで見ていた光景とは全く違う、少し薄暗い路地裏にすることに戸惑いを覚える。しかし、そんなこちら側の気持ちなど知る由もなく、自分のことを「姉さん」と呼んだ目の前の少女は話を続ける。

「その連中は、この街の宝石店から武器屋、雑貨店に至るまで、店と呼べるものを片っ端から襲おうと計画しているらしいの」

(夢・・・じゃない?)

「聞いている、姉さん?」

「あの、すみません・・・あなた、どなたですか?私・・・」

「っ!・・・そういう冗談いいから!」

「冗談じゃないんですけど・・・ていうか、声がなんか・・・ん?」

そこでイレイナは、自分が身に覚えのない箱を持っていたことに気づく。箱は簡単なロックがかけられている程度であり、開けようと思えば最も簡単に開けることが可能だ。とすれば、やることはただ一つ。

「・・・姉さん、何を?」

先ほどからの不可解な行動に目の前の少女が首を傾げる。そんな少女なぞ尻目に、イレイナは一瞬の躊躇もなく箱を開いてしまった。

「ちよ!?!」

「わ!?!」

その瞬間、爆発的な勢いでピンク色の煙が溢れ出る。その煙は止まることを知らず、箱から裏路地、ついには街全体へと広がってしまった。

「っ!・・・ぷは!はあ・・・はあ・・・な、なんですか、これは?毒ガスか何か?」

徐々に煙が晴れていく。なんとか瞬間的には息を止めることに成功したイレイナはその煙を吸わずに済んだ。とはいえ、なんとか煙を吸わずに済んだのは自分だけ・・・目の前にいた少女は咳き込みながら屈み込んでしまっている。とんだとぼっちりだ。

「ごほっ!ごほっ!」

「だ、大丈夫ですか・・・?」

慌てて駆け寄るイレイナ。彼女がこうなってしまったのはおそろく・・・いや、絶対に自分が原因だ。その自覚があるイレイナは少女へと近寄り、そして後悔する。

「姉……さん……」

その顔はどこか高揚としていて、頬もほんのり赤くなっている。やはり先ほどの煙の影響か……。そう考えたイレイナは少女の体調を確認しようとしたが、おでこを触ろうとしたところで突き飛ばされてしまう。

「触らないで!!」

「ぎゃ!!……いって……ふえ!!?」

突き飛ばされ、背中をぶつけてしまうイレイナ。痛みに背中を摩っていたが、気づくと少女が自分に迫ってきていた。その顔はかなりヤバい方向へと変わっており、今までイレイナが味わってきた恐怖とはまた別ベクトルの恐怖を与えてくる。

「姉さん……可愛い……!好き!」

「ええつと……」

「姉さん、私、ずっと前から姉さんのことは好きだったの!おかしいでしょう?でも、昔から私の頭には姉さんのことしかないの!」

「ちよ、ちよつと待……」

「姉なのに子犬みたいに妹の私の後についてきて、私に頼ってばかりで情けなくて頼りない姉さんが、もう可愛くて可愛くて可愛くて……!」

後ずさつてなんとか離れようとするイレイナ。だが、少女もまた同じようににじり寄ってくるため、その間に距離が生まれることはない。やがて、イレイナは壁まで追い詰められてしまう。

「可愛くて可愛くて可愛くて可愛くて可愛くて仕方ないの!!ああもう!!私の人生に姉さん以外はいらない!!……それなのに、いつも冷たく当たってしまったってごめんなさい……本当は姉さんのこと大好きなのに、素直になれなくてごめんなさい……!」

「ヒッ!?!」

「本当は食べちゃいたいくらい、姉さんが大好きで、大好きで、大好きで、大好きで、大好きで!大好きで大好きで大好きで大好きで大好きで大好きで大好きなの!だからお願い……私と……」

「ふん!」

「グウ!?・・・きゆう・・・」

なんとかギリギリのところ、イレイナは迫る少女のガラ空きのお腹にグーパンチを叩き込むことで、少女を沈めさせることに成功する。ほんの先ほどまで目の前にいた彼女は凜とした、とてもクールな少女だったはずなのだが・・・一体何があったというのか。まあ原因は十中八九自分にあるのだが・・・。そんなことを思いながらイレイナは自分に覆い被さるように気絶している少女を壁に寄り掛からせる。

「よいしょつと・・・ふう、全く・・・何がなんやら・・・ん？」

しかし、どうやらこのようなことが起こっているのはここだけではないらしい。少し離れてはいるが、何やら表の方も騒がしくなっている。イレイナは少し迷った後、この場を離れることを決めた。

叫ばずにはいられなかったとき。

.....

「どういうことですか!?何がなんだか意味が分かりません!!説明してください、サヤさん!!」

「僕に言われても分かりませんよ!!気がついたら僕、こんな可愛いイレイナさんの姿に!!」

肩を掴み、体を揺らして問うイレイナ(中身)。体の入れ替わりには何かしらの理由があるはずだが、はつきり言って自分にはその原因であろうものは思い当たらない。だからこそサヤが何か知っていると考え問い詰めたのだが、残念ながら期待していた答えは返ってこなかった。

「そ、それに、街がこんなになっている理由も、全然僕には分かりません!」

「あ、それは別にいいです。理由は分かります」
「はあ!?!」

びつくり仰天目が飛び出る勢いで驚くサヤ。まさか街がこうなった原因がイレイナにあるとは思ってもいないだろう。

「ところで、私たちが入れ替わった理由ですけど.....」

「いや、街がこうなった理由が分かるってどういうことですか?」

「.....それはひとまず、置いときましょう」

目の前の物を横に置き直すジエスチャーをするイレイナ。周りの騒音やサヤとは対照的に、かなり落ち着いているイレイナだが、原因を知っているからこそその落ち着きだろう。

「.....僕、箱を持っていたはずですけど.....あれ、どうしました?絶対に開けちゃいけないヤバい代物らしいんですけど.....」
「.....」

再び同じジエスチャーをするイレイナ。しかし、その動きが全ての

答えを物語っていた。

「……もしかして、開けたんですか!？」

「……まあ、ちよつとだけ?」

「ちよつと!何してるんですか!!もく!!あんなの開けたらロクなこと無いに決まってるじゃ無いですか!!妹が止めなかつたんですか!!?」

「い、妹?」

「いませんでしたか?黒髪で妙に色っぽい女の子」

「ああ……」

イレイナの脳裏によぎるのはあの少女。かなりヤバい雰囲気を感じ出しながら自分(サヤ)に迫っていた彼女だ。先ほどの彼女の雰囲気と、イレイナが知るサヤの雰囲気比べ、イレイナは一つの結論を出す。

「あなた達姉妹って、その、似てますね」

「え、そうですかあ!?!そんなこと無いですよ!!えへへ♪」

普段のイレイナならば絶対に見られないような顔で笑うサヤ。流石に本人からしたらそれは頂けない。

「私の顔でその表情をするの辞めてもらっていいですか?」

「どんな表情?……あ、好き!」

その表情が気になったのか再び窓ガラスに近づき、そして映った顔を見て窓ガラスに顔を擦り付ける。その行動にイレイナは引かざるおえない。

「……窓から離れてください……」

「いやです!僕はもう一生イレイナさんから離れません!」

「今私たちが最優先すべきことは街を元通りにすることでしょうね。いえ、"私たちが"というよりは、"私が"すべきことなんでしょうけど……原因は私が作つたわけですから……」

「じゃあ、今の僕はイレイナさんですから、実質僕もするっていう方向でいいですね!」

「ありがたいですが窓から離れてください」

「でも、あの箱の中身はなんだったんでしょうね?」

「魔法というよりは呪いですね。惚れ薬みたいな物でしょうか」

「僕たちを入れ替えて、イレイナさんに箱を開けさせた・・・とか？」

「そんな雑な計画ありますか？」

「そうですね、流石に雑過ぎますよね」

まあ、実をいうとその考えはイレイナも真つ先に考えた。しかし、本当にそうだとしたらまんまと敵の計画通りに行動してしまったことになる。流石にそれは許せない、個人的に。

と、2人で敵の目的を考えようとしたところで、1人の男がイレイナ達に話しかけてきた。

「こんなところにいたのか、イレイナ」

「ゆ、ユーリさん!」

「ん?この人誰ですか、イレイナさん?」

別行動をとっていたユーリである。イレイナのことを探していたのか、彼女の姿を見つけるや否や駆け寄ってきて、一瞬立ち止まる。イレイナとサヤの2人を見比べ、サヤ(体)の方へ顔を向ける。

「・・・こつちか。また随分と珍しい事態になっているな」

「え、もしかして中身が入れ替わってくれてることに気づいているんですか?」

「そのぐらい見れば分かる。・・・つと、今はそれどころじゃなかったな」

「いえ、こつちもかなり重要なことなのですが」

「さつき煙がこの街を覆っただろう?あれのすぐ後にガスマスクをつけた人間がかなりの数、この街を襲い始めた」

「襲い始めた?それが私たちを入れ替えた奴らの目的、ということでしょうか・・・?」

「ああ、そういえば奴らの1人が、箱を持ってきた馬鹿な魔女と間抜けそうな女を入れ替えて箱を開けさせた」とか何とか言ってたぞ」

「・・・」
知りたかった、そして望んでいなかった答えをあつさり入手してしまい、イレイナの動きが固まる。もちろん、答えを知ったからではない。内容が全くの不本意な内容だったからだ。

「あ、あのく．．．イレイナさん？」

「どうした？」

「あの．．．ユーリさん、その人たちは今どこに？」

「ん？ああ、あいつらなら大した奴らじゃなかったからな」

ひとまず捕縛しておいた。その言葉通りに、ガスマスクをつけた怪しい連中は確認できる限りでは全員がロープで纏めて縛り付けられていた。全くの無傷な状態のユーリに対し、連中は所々汚れていて、完全に戦意喪失しているらしい。中にはユーリの姿を見て少し怯える人物もいる。

「あのくその．．．調子に乗って、すみません．．．」

「こいつらは先ほど〃骨董堂〃と名乗っていた。つまり、どこかにこいつらを束ねている存在がいるはず」

「なるほどなるほど．．．それじゃああなた達のボスの場所を教えてくださいませんか？」

笑っていない笑みを浮かべながら杖先から電撃魔法が迸る。連中には一切の拒否権がないことは明白だ。

こうしてイレイナ達は、とても親切な男達から骨董堂のボスの居場所を手ずかることに成功し、早速その場所へと向かうことにしたのだった。

．．．．．

ユーリは念の為、他の骨董堂の連中が暴れている可能性を考慮し、1人別れて街へと繰り出した。そのため実際に骨董堂のボスのところへと向かったのはイレイナとサヤの2人だけになってしまったのだが．．．．．

「ふええ．．．完璧な計画じゃったはずなのに．．．」

大した苦労もなく簡単に捕まえることに成功したのだった。骨董堂のボス、と言われれば聞こえはいいが、結局はただの人間。魔法も使えなければ以前と違って特別な道具ももはや数少ない。さらには

年を重ねてしまった今、2人の魔女に勝てる道理などなかった。

「いや結構雑な計画でしたよ」

「でもイレイナさん、まんまとひっかかりましたよね?」

「……それにしても、まさかニケの冒険譚にある骨董堂のボスを、私も捕まえることができるなんて……!」

「ちっ……」

ひとまず都合の悪いことは一切無視し、1人興奮の気持ちへと浸るイレイナ。

「あつそうそう、私たちの体を元に戻して欲しいんですけど」

「別に僕はこのままでもいいんですけどね!」

「元に戻して欲しいんですけど!」

「そそそそれは無理じゃ……」

「ああん!」

「ええ、ええつと、1日ぐらいで元に戻るじやろう!!」

「間違いありませんね!!」

圧がすごい。ボスの威厳など微塵もなくなるほどに、イレイナは圧倒的なまでに圧をかける。

「うう……じゃが、これで勝ったと思うなよ!我らの仲間は大勢居る!お前達が捉えたその何十倍もな!!」

「なっ!」

「今頃街の混乱に乗じて、盗めるだけ盗んでトンスラしておる頃じやろう……ぶあはっはっは!!残念じゃったな!我らの勝ちじや!!」

さつきまでの威勢の無さはどこへ行ったのやら、一気に調子に乗り始めるボス。あたかも勝ち誇った顔を浮かべる。

「ど、どうしますか、イレイナさん?」

「外にはユーリさんがいますが、相手が何人いるのか分からない以上任せっきりにするわけにも……探すしかないでしょう、手分けして……」

「いや、その必要はねえ」

突如、この場にはいなかったはずの人物の声が割り込んでくる。驚

き入り口の方を見てみると、そこにはいつの間に来たのか2人の師匠————フランとシーラの姿が。

「せ、先生!」

「師匠!」

「え、師匠? シーラさんが?」

イレイナにとっては初めて知った情報だが、まあここでは割愛させてもらう。

驚く弟子達は尻目に、2人の師匠はボスへと話しかける。

「お久しぶりですね、八重歯のボスさん」

「お前はあの時の魔女見習いか・・・!」

「え? あの時?」

「あら、今はもう八重歯が・・・ごめんなさいね」

「え? え?」

「外で暴れてた骨董堂の連中なら心配すんな。私たちが全部処理してきた。・・・残念だったな、またお前の負けだ」

「また・・・?」

「さて、街の人たちを元に戻すにはどうすればいいのかしら?」

「う・・・ううう・・・」

これもまた絶望というのだろう。一気に窮地へと追いやられたボスはもはや涙目状態であり、4人の魔女を前にしてなすすべなくこの街の魔法統括協会へと送られることとなった。

無事に街の人たちを元に戻す方法を聞いたイレイナたちは、再びあの路地裏へ。そこでは未だにサヤの妹のミナが壁に寄りかかって気絶している。

「・・・何で気絶してるんです?」

「ええつと・・・あ、あった」

イレイナ達の目的は、あの時イレイナが開けて放り投げてしまったあの箱だ。ボス曰く、煙は箱を開ければ勝手に吸収されるらしく、それで人々の元に戻るとのことだ。あの状況で嘘を吐いたとは思えないため、それを信じてイレイナ達は箱をおいてきてしまったこの場所へと戻ってきたのだ。

箱はそのまま地面に転がっており、それを拾ったイレイナは箱を開ける。すると街中に広がっていたピンク色の煙が一気に箱の中へと収束されていき、やがて全ての煙が収束されると自動的に箱が閉ざされた。

「これで街の人たちは元通り、実に簡単なことでしたね」

「……何で、気絶してるんです?」

「……………」

それには答えないイレイナ。おそらく、彼女のためにもそうした方がいいだろう。

……………

翌朝、例の喫茶店へと足を運んだ彼女達は、箱についての話をしていた。

「イレイナ、帽子はどうしたのですか?」

「ああ……それが、ある一件で失くしてしまつて……もう替えもありませんので、今はこのままで」

「なるほど、そういうことですか……それで、あの箱についてですが……」

「はるか水平線の向こうにある島から持ち運ばれた物ですか?」

1日経ち、無事に元の体へと戻ったイレイナがフランの言葉を引き継ぐ。半ば予想しただけの内容だったのがあっていたらしく、フランは頷く。

「その通りよ」

「さっすがイレイナさん!よく分かりましたね!」

「……………」

(私たちが入れ替わったのも、その島の道具の所為というわけですか……)

「そこそこ好きな人を前にするとまともでいられなくなり、まじで好きな人を前にするとどうしようなくなるって呪いがかけられている煙だそうだ」

「なぐるほどー!」

こうして聞くとなかなかしやうもない呪いな気がしなくもないが、昨日の惨状を見るにその効果は絶大だったのだろう。いったい誰が何の目的でそんなものを作ったのか。それを知る由はどこにもない。「どーでもいいわ」

「はは・・・」

「うっ・・・」

涼しい顔で済まそうとするミナだが、残念だが昨日の状態を知っているイレイナの苦笑いに気づき、言葉をつまらせる。

「・・・ごほん! イレイナさん!」

「なんででしょう?」

「姉さんから話を聞いています。私が姉さんを置いていった後、魔法を教えたとか、どこぞの国で再開したとか、それはもう嬉しそうに語ってくれました・・・!」

「ああの・・・どうして魔法使いの国でサヤさんを置いていったんですか・・・? かなり凹んでましたよ?」

「ああ、それはだな、すぐに魔女になるための修行を始めさせたかったから、強引の故郷まで帰らせたんだよ、私が」

「シーラさんが?」

「私はミナの師匠でもあるからな。知らなかったか?」

「初耳です」

「サヤは人に依存する傾向があるからな、妹といつまでも一緒にいても互いのためにならなそうだったんでな」

「なるほど・・・私はてつきり愛想を尽かしてミナさんがサヤさんを置いて帰ったのだと・・・」

「実際帰ってきたミナに散々罵られたぜ?」 どうして姉さんと離れ離れにさせたんだ”とか、“絶対に許さない”だとか、“一生呪ってやる”だとか」

「へえ・・・ミナが・・・」

「まあ意外・・・いえ、昨日のあれからすれば意外でもなんでもないんですけど」

「あれ？」

「これじゃあ、依存してたのがどつちか分かんねえな！」

「も、もうそのくらいにしてください・・・!!」

思ってもなくいろんな人からいじられまくり、とうとう目元に涙が浮かぶぐらい恥ずかしい思いをしてしまうミナ。なんとかその羞恥心に耐えながらいるところへ、他のみんなは笑みを浮かべる。

「さてと・・・そろそろもう一つの議題に移ろうか」

「もう一つの議題・・・ですか？」

「何ですか、師匠？」

「ふー・・・闇の剣士・カリバー、並びにその変身者であるユウマのことだ」

その言葉に、イレイナは目を見開く。

「私たちが今この街にいるのも、もともとは彼を探すために動いていたところだったんです。その道中で箱のことに気づいたシーラを追ってこの街に降り立ったところ、骨董堂の連中が暴れていたのですよ」

「急いでこつちに来たから途中で聞き込みすらできなかつた・・・つーわけで、サヤ！お前が持つてる情報が実質最後の目撃情報だ。もう一度詳しく話してくれ」

「サヤさん、ユウマに会ったんですか!?!いつ、どこで!?!」

「うええ!?!」

「イレイナ、落ち着いてください」

いつになく慌てふためくイレイナに驚くサヤ。フランが戒めるが、それでもなおイレイナが落ち着く様子はない。

「ですが、先生!!」

「ここで慌てても仕方ないですよ。ひとまずここは落ち着いて、話を聞くべきです」

「っ・・・はい・・・」

「ええつと・・・あまり話が見えてこないんですけど・・・イレイナさん、ユウマさんを知っているんですか？」

「2人は幼馴染の関係なんだよ。ほらサヤ、話してくれ」

「え、そうだったんですか!? あ、でもそれならあの時の匂いも説明が……」

「お前何言ってるの?」

「いえなんでも〜! それで、ユウマさんと会った時の話でしたよね? とは言っても、僕もあまり詳しいことは分かりませんよ? あの時會ったのも本当に偶然でしたし……」

「それでもいい。どこで会って、あいつは何をしていた?」

サヤはあの森での一件を語り始める。行方不明の老人を探すために森へと赴き、そこでユウマと遭遇したこと。彼に協力してもらって洋館へと足を踏み入れたこと。そこで森の持つ特有の魔力によって意思を持った道具に出会ったこと、道具との戦いになりカリバーが現れてどこかへと消えたこと。あの起こった出来事を、余すことなく全て語った。

「僕がユウマさんと会った時の話は以上ですね。あまり手がかりになりそうなことは無いと思うんですが……」

サヤの話を聞き終わり、シーラは思わず頭を抱える。サヤの話から何かしらユウマの目的を探ることができれば、彼の向かった先も検討がつくかとも考えたのだが、サヤの話からはその目的が全く見えない。

と、そこで恐る恐るといった様子で、イレイナが手をあげる。

「あの、ユウマの目的だったら、多分分かりますよ」

「何?」

「それは本当ですか、イレイナ?」

「はい、とは言っても、ユウマ自身から聞いた事と人から聞いた話を合わせた私の推測に過ぎないですけど……」

イレイナがそう口にした時だった。外からまるで何か爆発したような大きな音が響き、その直後に多くの人の悲鳴が聞こえてくる。シーラを始め、サヤやミナといった魔法統括協会に所属している3人はすぐさま立ち上がり、それに続くようにイレイナとフランも外を確かめる。

「なんだ、今の音?」

「まるで何かが発火……というよりも崩れた？」

「あ、あそこ!!」

サヤがある一点を指さす。その先ではまるで全身に炎を纏ったかのような巨大な鳥が上空を旋回している様子が見えた。

「な、何よあれ!？」

「こりや明らかに普通の事件じゃないな……お前達はここにいろ! 私が状況を……おいイレイナ!!」

シーラの静止の声も聞かず、イレイナはすぐさま喫茶店から飛び出した。先程サヤが上空を指さした際、他の皆は巨大な鳥にばかり視線が集中してしまっていたが、その鳥を追いかけるように空中を飛んでいる絨毯とそれに乗る一つの人影を、イレイナは見逃さなかった。

実際にそうしていると見たことはない。しかし、それでもイレイナは確かに確信していた。それがユウマであると。

第二十一話

「っ……っ！」

奴を追いかけ、俺はこの自由の街クノーツへと辿り着いた。あいつは街の上空を旋回すると、急降下して建物にぶつかったり、再び上空に上がっては滑空し、街を壊す。突然のことに、街の人々は驚き逃げ惑っているのがわかる。さっきから耳には人々の悲鳴が聞こえてくる。

「まずはあの暴れ馬を止めなくちゃな……変身！」

『ジャアクドラゴン！』

変身し、取り出したのはバスターが使っていたブック。

『必殺リード！ジャアクな豆の木！』

月闇から伸びる数多の蔦が飛行する鳥を掴み掛かろうとする。一部に火がつき燃え始めるが、それを気にする訳にはいかない。流れるように二冊目のブックをリードする。

『必殺リード！必殺リード！ジャアクケルベロス！』

蔦に沿ってまっすぐと鳥へと向かっていくケルベロスのエネルギー体。そのまま鳥に食らいつく。

「多少は怯んだか……ふっ！」

少しかだけ奴の動きが遅くなった。ここを逃す手はない。

俺は奴の頭上まで飛び上がると、そのまま三冊目のブックを取り出した。

『必殺リード！必殺リード！必殺リード！ジャアク玄武！』

「はあ!!」

玄武神話によって月闇の……そして俺自身の重量を増し、一気に鳥を叩き落とす。流石に奴も重さには敵わなかったのか、そのまま重力に乗って地上へと落ちた。

「ふう……」

続くように俺も地上へと降りる。鳥が落ちた場所からは砂煙が上がっており、現状の確認が難しい。だが、まだ終わってはいないはずだ。俺は月闇を砂煙の中にいるであろう奴に向けて構える。

その時だった。

「ユウマ!!」

「っ!...イレイナ...」

後ろから投げかけられた彼女の声。振り返ると、そこでは走ってきたのか息を切らして肩を上下に動かしているイレイナの姿が。

いや...何を動揺している。彼女がこの街にいることはあの未来を見た時点で分かっていたことだ。何も不思議なことじゃない。

「ユウマ...ユーリさんから聞きました。私がどういう存在なのか...私のためなんでしょう?ユウマが剣士と戦うのは...」

やはり知られたか...ユーリが彼女のもとに訪れることは前に会った段階ですでに分かっていたこと、だから知られるのも時間の問題ではあった。むしろ知られない方がおかしい...

「そこまで知ったのなら分かるだろう。俺は何がなんでも、全ての聖剣を封印しなくちゃいけないんだ。それが世界を...お前を救う唯一無二の方法なのだから」

「...本当に、それが唯一無二の方法なのですか...?」

「...」

...実のところ、一つだけ可能性がなくてはならない。しかし、それは不確かな方法であり、まだ一回しか確認できていない...そんなものに賭ける訳にはいかない。

「...な...」

刹那、圧倒的なまでのオーラが俺たちを包み込む。同時に背後からは剣を引きずるような音が聞こえてくる。

「っ...!!」

急ぐ振り向く。未だ晴れきっていない土煙が背後に広がっていたが、徐々にそこに人のシルエットが浮かび上がってくる。

「イレイナ、逃げろ!」

「え?」

「奴は危険だ...!」

「ほお・・・俺のことを知ってるとは、珍しい剣士じゃねえか」

現れたのは男。上半身裸の上に上着を一枚羽織っている。その手には一本の聖剣が握られ、腰にはスロットが一つだけのドライバーが装着されている。見た感じは俺が保有している火炎剣烈火や、エスパードが使っていた雷鳴剣黄雷を納刀する“聖剣ソードドライバー”と似ているが、一番右側のスロット以外はまるで羽のような造形が施されている。その二つのアイテムは、俺はある光景で見た。

「一応、自己紹介でもしておこう。俺の名はバハト、お前たち力有る者を無に帰す存在だ」

「無に帰す・・・？ユウマ、あの人はなんなんですか？」

「詳しいことは俺にも分からない・・・だが、あいつを野放しにするのは危険すぎる。それだけは確かだ」

俺はイレイナの前に立ち、バハトへと月闇を向ける。少なくともやるべきことははっきりしている。あの未来に到達する前に、奴の聖剣を封印する！

俺のその行動を見たバハトは、手に持っていた聖剣を腰のドライバーへと納刀した。

「随分とまあ好戦的な奴だな。まあいい、相手をしてやる」

『エターナルフェニックス』

『かつてから伝わる不死鳥の伝説が今、現実となる・・・』

ドライバー唯一のスロットへと装填されるブック。続け様に納刀した聖剣を抜刀する。

『抜刀・・・！』

「・・・ふっ、ふっふっはははは・・・・・・変身」

『エターナルフェニックス！』

『虚無！漆黒の剣が、無に帰す！』

奴の姿が変わる。今までその存在だけしか伝わっておらず、“無の聖剣”を持つという唯一の情報を除いてその容姿や能力の一切が不明の剣士・・・それが今、目の前にいる。

「無の剣士・ファルシオン・・・貴様を無に帰す」

2本の聖剣が交差する。奴の力は未知数、馬鹿正直にぶつかり合う

のは得策ではない。俺はファルシオンから一度距離を取る。

『月闇居合！読後一閃！』

横に一閃、真っ直ぐに飛んでいく闇の斬撃。それは確かに、確実にファルシオンへと直撃したが、ファルシオンは痛みは愚か痒みすら感じていないのか、全く怯む様子もない。

「・・・今、何かしたのか？」

「全く効果なしかよ・・・」

多少のダメージが入ることを期待したんだが・・・しようがない、さっさとこつちを使うか。

『ジャオウドラゴン！誰も逃れられない・・・』

「ふっ！はっ！」

背中のマントから闇のエネルギーが溢れ出し、俺の体は空中へと浮かぶ。その際に一閃の斬撃を繰り出したが、ファルシオンはそれを易々と無の聖剣で受け止め、斬撃はまるでエネルギーを失ったかのように消滅した。

「なんだ、次は空中戦か？」

そう答えると共に、ファルシオンの背中からは燃え上がる羽が出現し、すぐさま俺の目前に迫ってくる。

「速っ・・・」

「どうした？これで終わりじゃねえぞ？」

振り下ろされる無の聖剣をこつちも月闇で受け止める。しかし、この距離なら・・・！！

「はっ！」

「っ・・・何？」

月闇から発生した闇がファルシオンを拘束する。どれだけ強力だろうと、その能力が不明だろうと、身動き一つ取れなければ意味がない。この機を逃すわけにはいかない！！

「はあ！！」

「ぬう・・・！！」

五体の龍を召喚、ファルシオンに向かわせ食らいつかせる。相も変わらずダメージ自体はそこまでないようだが、それでも一瞬の隙が生

まれる。

「今だ・・・！」

『ジャオウ必殺読破！ジャオウ必殺撃！』

「はあああああ!!」

五体の龍と闇のエネルギーが拘束しているファルシオンとすれ違い様に一閃叩き込む。そのまま流れるように俺は地面へと降り立ち、その後ろでファルシオンが落下した音が聞こえた。

「ふう・・・これで、封印完了・・・あの未来は訪れないはず・・・」

「ユウマ、後ろ!!」

俺が一息吐いていると、背後からイレイナの叫び声が聞こえてきた。何事かと振り返ると、確かに聖剣を封印したはずのファルシオンは変身したまま、聖剣を俺に振り下ろそうとしていた。

「なっ・・・!?!」

「惜しかったな、闇の聖剣だけじゃなかったら、また封印される場所だったよ」

慌てて闇黒剣で無の聖剣を受け止める。おかしい・・・確かに封印したはず・・・なぜ変身したままでいられるんだ・・・?とにかく、もう一度・・・!再び闇でファルシオンの拘束にかかる。

「なんだ、また同じ手か」

「っ・・・な、何!?!」

ファルシオンを拘束しようとした闇は、ファルシオンに到達した先から消滅していく。もう一度闇を出すも、同じように消滅してしまっ

た。

「な、なんで・・・」

「勉強不足だったな、それとも俺の属性を忘れたか?」

俺が動揺している間にも、ファルシオンは剣に加える力を徐々に増

していき、俺は片膝をついてしまった。

「どうした?もっと聖剣の力を引き出してみる。もったも、何の意味もないがな」

.....

一体どういうことでしょう.....。

先ほどまで、2人の剣士の戦いは闇の剣士・・・ユウマの方が優勢に見えていました。いえ、実際に優勢だったのでしょうか。空中で相手の剣士を闇と五体の龍で拘束し、そこに自らの必殺技を叩き込んでいました。今までの剣士と同じように、聖剣を封印した・・・はずでした。

どういうわけか相手の聖剣は封印されることなく、さらには必殺技を受けたにも関わらず何事もなかったのように立ち上がり、そのままユウマへと迫っていった。おそらくもう一度封印を試みようとしたのでしよう、ユウマはまた闇の使つて拘束しようとしたが、先ほどと違い拘束は叶わず、闇は消滅してしまいました。

「勉強不足だったな、それとも俺の属性を忘れたか？」

あの剣士の属性・・・？確かに剣士はそれぞれの属性を持ち合わせています、今のユウマのカリバーなら闇、ユーリさんの最光なら光と・・・ですが、あの聖剣の属性は一体・・・？先ほど上空に姿を現したあの鳥の容姿や、先ほどの羽を見た分には炎のようにも見えませんが、炎の聖剣は別にある・・・駄目ですね、視覚だけで得られる情報ではまるで検討も.....。

「ようやく追いつきましたよ、イレイナさん!!」

「って、おいおい・・・なんだよこの状況・・・」

「あのカリバーはユウマですよね・・・では、ユウマと戦っているあの剣士は一体？」

私を追いかけてきたのか、後ろから先生やサヤさん達が追いついてきました。私やサヤさんよりも剣士に精通しているであろうフラン先生やシーラさんですら、ユウマと戦っている剣士のことは知らないようです。やっぱり誰も分からない・・・そう思った時、唯一知っているような人物が、姿を現しました。昨日骨董堂のアジトに向かう際に別れたユーリです。

「あの鳥の姿からまさかと思ったが・・・やはり復活していたのか」

「え．．．誰？」

「ユーリさん！」

「イレイナ、知り合いですか？」

「ええっと、それについてはまた後で．．．ユーリさんは、あの剣士のことを知っているのですか？あの剣士は一体？」

「．．．奴はバハト、またの名を無の剣士・ファルシオン。無の聖剣“無銘剣虚無”に選ばれた剣士だ」

「無の聖剣．．．？そんな聖剣、聞いたことないぞ」

「それは当然だ。奴は俺がまだ剣士だった頃に聖剣に選ばれて、そして俺が封印した存在なのだから」

「封印．．．した？あの人をですか？」

「ああ、だが、どういうわけか封印が解かれたらしい．．．」

「あの．．．それで、無銘剣虚無の能力は．．．？」

「．．．無銘剣の能力は聖なる力を無にする力．．．要は他の聖剣の能力の一切を無効化する力だ」

「えくと．．．それってどういうことですか？」

「他の聖剣の力を無効化．．．そうか、それで月闇の斬撃や闇も消滅したし、月闇の能力である封印も無効化された．．．！」

「それに加え、あいつはエターナルフェニックスのライドブックを使用している。本来であれば接触する全ての属性を無にしてしまう無銘剣でも、あのブックの力は無効化されることなく、ドライバーを通じて絶えず使用者にその力を送り続けている。それによりあいつは、永遠の寿命と無限の再生能力を獲得している」

「それはつまり．．．不死身、ということですか？」

「そういうことになる」

全くの計算外．．．あの剣士の属性、聖剣の能力が判明すれば、ユウマの手助けになる．．．そう思っていたのに、分かった結果がまるで打つ手無しとでも宣告するような内容だった。全ての属性を無にしてしまう能力．．．おそらく、私達の魔法も同じように無のされてしまうでしょう。

しかし、こうしている間にも戦いは続いていて、ユウマはどんどん

劣勢へと追い込まれてしまっています。一体どうすれば・・・そんな時でした。

「あのく・・・一ついいですか?」

「どうかしたのか、サヤ?」

「その、ユーリさん?がどういう人なのかは正直よく分かりませんが・・・あの剣士を一度封印したって、どうやったんですか?」

「!!」

なるほど、盲点でした・・・!500年前にあの無の剣士を封印したのがユーリさんなのであれば、その方法も分かっているはず・・・だったらその方法をもう一度やれば!!

「・・・バハトを封印するには、無銘剣の性質上、従来のやり方では不可能だ。だからこそ、聖剣の中でも特別な2本を同時に扱うことで、あいつを封印することができる」

「特別な2本の聖剣・・・?」

「・・・光の聖剣と、闇の聖剣!!」

「その通りだ。光と闇の聖剣は最初に誕生した特別な聖剣、その2本の力を同時に使うことで、初めてバハトは封印できる」

「闇の聖剣はユウマが持っています・・・なら、あとはその光の聖剣があれば!」

「つつてもよ、その光の聖剣がどこにあるかなんて、私たちは知らねえぞ」

「問題無い。光の聖剣は俺自身だ」

『金の武器 銀の武器』

「変身!」

『Who is the shining sword?』

その姿を剣士・・・いえ、剣へと変えたユーリさんは、そのままユウマのところまで飛翔していきます。後ろではすごい形相をしている人達がいいますが、まあ置いておきましょう。

「ふっ、はっ!」

「あ?」

「あ、あんたは・・・」

「よく聞けユウマ。奴を封印するには闇黒剣だけでは無理だ。光と闇、両方を同時に使う必要がある。さあ、俺を手に取りれ！」

「その声……はっはっは！そうか、お前かユーリ!!」

「……バハト」

彼らは旧知の仲だったのだろう、ユーリさんがバハトのことを知っていたように、バハトもまたユーリさんのことを知っている風でした。

「俺がお前を封印してから、500年の歳月が流れた……未だに力有る者を無に帰そうとしているのか？」

「当然だ！聖剣が、魔法が、力があるから!!人は争いを起こし、それを繰り返す!!その度に何十、何百、何千、何万もの人間が死に絶える!!この世から争いを無くすには、争いを起こす力を無くすしかない!!……そのために、貴様ら剣士も、魔女も、全てを無に帰す!」

「……やはり、お前を自由にさせられない……!さあユウマ、俺を使い!!」

「……」

……? 一体どうしたのでしょうか? ユウマは一向にユーリさんに手を伸ばさず、下を向いています。それは、十分な隙だったようです。

「させるか!!」

『永久の不死鳥!無限一突!』

無の聖剣……無銘剣虚無から放たれる、まるで不死鳥のような十字の斬撃がユウマとユーリさんの2人に向かって放たれました。その攻撃には2人とも気づき、それぞれ躲しましたが、それによって2人の間に距離が……。

「500年前、俺はユーリ、お前の扱う光と闇の聖剣によって封印された……だからこそ、お前たちの2本を揃えさせるつもりなど毛頭無い」

っ……! 流石にこちらの狙いにも気付いていましたか……!……! だったら、出来ることは!!

「イレイナ、何を!」

私が杖を出したことに気づいたフラン先生が声をかけてきます。

もしかしたら止められるのかもしれませんが、例えば止められたとしても……!」

「少しでもファルシオンの気を逸らします。その間にもユウマがユウリさんを掴むことができれば……!」

言うや否や、私は攻撃魔法で電撃を放ちながらファルシオンの後方へと走り出します。放った電撃はファルシオンに直撃し、異変を感じたファルシオンは振り返り、私の存在に気づきます。

ひとまず今はこれでいい……奴から逃げながら、少しでも時間を稼ぐ……!

「イレイナ!!」

「ユウマ!今のうちにユウリさんと!!」

「ちっ……剣士を始末してからと思っていたんだが……どうやら先に殺られたいようだな!!」

『虚無居合!黙読一閃!』

虚無より放たれた横一閃の斬撃が、私に向かってきます。咄嗟に防御魔法を展開したんですが、斬撃自体にも虚無の力が備わっていたのか防御魔法は跡形もなく消え去ってしまい、そのまま斬撃が私を襲います。

「きゃ!!」

「はっはっは!!」

幸いにも直撃こそは免れたものの、斬撃は私の足元に飛来、衝撃と共に私は吹き飛ばされてしまい、杖も手放してしまいました。なんとかすぐに体制を立て直そうとしましたが、そんな私の目前にはすでにファルシオンの姿が。

「へ……?」

「まずは、1人」

振り下ろされる虚無。フラン先生やサヤさんがこちらに手を伸ばそうとしたり、魔法を放とうとしますが、おそらく間に合いそうにもありません。杖が手元になく魔法も発動できず、どう言うわけか体も動きそうにありません。目を瞑り、来る衝撃に身を震わせます。

「ぐうっ!!?」

なかなかやって来ない衝撃に代わりに聞こえてきたのは苦しそうな声。それと同時に、私の顔に何かが付着します。

恐る恐る目を開けると、私の目の前には――

「うっ……ぐ……ああ……」

「ゆ、ユウマ……?」

変身が解除され、生身の状態の体を虚無が貫かれています、そこから血を吹き出しているユウマの姿が。やがて、ユウマは力尽きるかのよう
に、私の目の前で倒れました。

「い、いや……いやあああああ!!」

第二十二話

「ユウマ、ユウマ!!」

「落ち着いてください、イレイナ!!」

「回復魔法だ! サヤ、ミナ、手伝え!!」

「は、はい!!」

倒れ伏すユウマに、取り乱すイレイナ、そんなイレイナを落ち着かせようとするフランと、すぐさま回復魔法を使ってユウマの傷を治そうとするシーラ、サヤ、ミナの3人。しかし、無銘剣によって作られた傷だからか治りの進行度が遅い。

「う……ああ……」

「傷の治りは遅いが……治せないわけじゃなさそうだ」

「ですけど、このペースじゃかなりの時間が……」

「あまり時間もかけてられませんよ」

ちらりと、横を見るサヤ。彼女たちのすぐ近くでは、ファルシオンを止めている最光シャドーの姿が。

「全く持って計算外だ……まさかユウマの方が倒れることになるとは……」

「俺にとっては嬉しい誤算だ、剣士を1人排除できただけでなく、それが闇の剣士だったんだからな」

「何?」

「ユーリ、人の身を捨て聖剣と一体化した今のお前では、闇の聖剣の力を十全に扱うことは不可能だ。これで、500年前と同じようにはいかない!」

「くっ……!」

500年前と同じようにファルシオン……バハトを封印しようとした場合、光と闇の聖剣、そしてそれを十全に扱える剣士が必要だった。500年前はその役割をユーリが担っていたが、聖剣となってしまった今の状態では同じようにはいかない。だからこそ、闇の聖剣を扱えてかつ光の聖剣の力を引き出せるであろうユウマが必要だったのだ。しかし、先の一撃でユウマは倒れ、今この場に他の剣士はいな

い。要はバハトを封印するためことが不可能になったのだ。

否、一つだけ方法はある。再びユウマを戦える状態にすることだ。今の状況では不可能でも、傷を完璧に治し、彼自身に戦う意思があれば可能だ。そして光の聖剣なら、それを可能とすることが出来る。しかし、そのためには治癒するためだけの時間を稼ぐ必要がある。その時間だけでもバハトをユーリ以外の誰かが相手する必要があるのだ。(最光シャドーでは時間稼ぎもできない……だが、ここでユウマを失うわけにはいかない……どうするべきか……)

そんな折に、ユーリの背後からある人物が飛び出し、ファルシオンに一撃を加えた。先ほどまで叫び、取り乱していたイレイナである。その手には闇黒剣月闇が握られており、先ほどの一撃も闇黒剣を用いての攻撃だった。目は少し赤く腫れているようで、まだ涙が乾き切っていない状態だが、それでもイレイナは立ち上がった。

「ユーリさん……お願いです、私が時間を稼ぎますから、ユウマを……」
「待て、いくらお前でもバハトを止めるのは無茶が……」

「それでも……ユウマを今すぐ助けるには、光の聖剣である貴方に頼るしかないんです！」

イレイナはそう言いながら、闇黒剣の力を引き出し始める。空間を切断し、闇の世界を介することでファルシオンの背後を取る。攻撃すれば同じ方法ですぐ離脱。攻撃そのものに聖剣の能力は使わなため、無銘剣の力で無効果されることもない。しかし、それもいつまで持つか。

「……1分……いや、30秒でいい。それだけでも持ち堪えてくれ！」

ひとまず、バハトのことをイレイナに任せ、ユウマの治癒へと向かう最光。危険ではあるが、ここでユウマを失うわけにもいかない。光の聖剣の力により、ユウマの体から傷跡が消える。

「おいマジかよ……」

「あれほどの傷を一瞬で……!?!」

「ユウマが気づいたら伝える、あいつを……バハトを封印出来るのはお前だけだ」と

それだけ言い残し、最光はすぐさまイレイナのもとへと駆けつける。優勢とはやはり行かないが、幸いにもイレイナには怪我はないようだ。月闇で空間を切り裂き、攻撃したらすぐに離れることでファルシオンが簡単に手出しできないようにしている。

「上手い具合に戦えてはいるが……いくらイレイナでも聖剣の力を完璧には引き出せていないようだ……ふっ！」

ユウマと同様、イレイナもまた失つてはいけない存在。すぐさま自らも戦いへと再び赴く最光は、ファルシオンの周りを旋回しながら数度剣戟を加え、イレイナのもとへ飛翔する。

「ユウリさん、ユウマは！」

「ひとまず治療は完了した。目覚めるまでは放置するしかないが……少なくとも命に別状は無い」

「そ、そうですか……良かった……」

ホツと一息吐くイレイナ。しかし、今この場それは大きな隙でしかない。

『永遠の不死鳥！無限一突！』

ここぞとばかりに放たれる巨大な斬撃。広範囲に渡るその斬撃を回避することは難しく、イレイナは咄嗟に月闇で空間を引き裂いた。それと同時に闇の世界より落ちてきた一本の剣が、その斬撃を阻む。

「……え？」

「何？」

「……まさか……」

落ちてきたのは雷鳴剣黄雷。以前ユウマによつて封印された際に失われたエンブレムは再びその輝きを取り戻し、まるでイレイナを守るかのように雷撃の壁を作り出していた。

「馬鹿な……そんなことがありうるのか……？いや、しかし……」

「まさか魔女が……聖剣に選ばれるとはなあ」

「私が……聖剣に……？」

過去の時代、女性が聖剣に選ばれること自体は不思議ではないが、魔女が聖剣に選ばれたことはなかった。まるで前代未聞の出来事の前にフランはシーラはもちろん、ユウリやバハトでさえ驚愕し、困惑

する。

「う……く……イレ……イナ……」

困惑するのはまた、本人であるイレイナ自身も変わらない。突然聖剣に選ばれたと言われても、その実感も湧かず、ただただ目の前にある雷鳴剣黄雷を見るのみである。

「……イレイナ、雷鳴剣を握め!!」

「ユーリさん……」

「理由は分からないが、雷鳴剣は確かにお前を選んだ！剣士になるんだ、イレイナ!!」

「け、剣士になれて……そんなこと、突然言われても……」

「……くつくつく……あっはっはっはっは!!」

突然高笑いを上げるファルシオン。変身を解除し、バハトの不敵な笑みが見える。

「聖剣が魔女を選ぶとは……いいだろう、1日だけ待ってやる。その時は、お前もその剣ごと、無に帰す。……はっはっは!」

燃えるように姿を消したバハト。先ほどまでとは打って変わっての静けさが、ひとまずの脅威が去ったことを証明していた。

第二十三話

待て……待ってくれイレイナ……そいつは、お前じゃ……。

闇黒剣……でも、奴の聖剣は……封印できなかつた……。
なんで俺は、ここで寝ているんだ……なんでこの体は、動かないんだ……。

……あれは、なんだ？闇黒剣が切り裂いた空間から……。
雷が……まさか、あれは……。

「まさか!!」

大声を上げながら飛び起きる。周囲には父さんと母さん、そしてイレイナとその両親。突然の俺の声にみんな驚き、俺を見てくる。

「なんだ、急にどうしたユウマ?」

「いや……え?」

「もう、寝ぼけてるの?今日はイレイナちゃんのお祝いの日でしょ?」
父さんと母さんがそんなことを言ってくる。そうだ……今日は確かお祝いの日、イレイナが魔術試験に無事に合格した記念だ。何かが俺の中で引つかかっているような気がするが、次第にそれも薄れていく。先ほどまで見ていたはずの光景は、すぐん思い出せなくなっていた。

何か、イレイナが関わっていた気がするが……俺はちらりと、イレイナの方を見る。今まで見たことがない、それでいてしつくりとくるイレイナの魔女見習いとしての姿。まだ本格的に魔女としての修行を始めているわけではないが、それでもイレイナは夢への第一歩を踏み出したのだ。しつかりと祝わなければ。

しかし、当のイレイナ本人はあまり嬉しそうではない気がする。

「どうかしたのか、イレイナ?」

「ああ、いえ……周りがあまりにも弱かつたので、合格するのは当然です。これ絵は、魔女になるのも時間の問題ですね」

「わあくさすが……」

自信というか、なんというか……ともかく、何かあまり良い予感はしなかった。それが俺の率直な感想だ。おそらく父さん達も気付いているのだろう、何やら考えているように思う。

しかし、魔女になるのも時間の問題とはいうが、それまでにもやらなければならぬことがある。それが師匠となる魔女に認められること。それにはまず師匠となる魔女を見つけなければならぬのだが……まあ、ここロベツタにも魔女は沢山いる。誰かしらレイナを弟子にとつてくれる人はいるだろう。

しかし、なんだろう……そんな簡単な問題ではなかった気が……。

……

「どうしましょうユウマ……」

「……えくと、どうした？」

あれから三日後、俺もレイナに負けてられないと外で素振りを行っていた際、その場にやってきたレイナが開口一番にそう言ってきた。最初は話が見えなかったが、どうやらレイナはここ三日間でロベツタに住まう全ての魔女のもとへ訪れたらしい。しかし、誰も弟子にとつてくれる人はいなかったとのことだ。どうやら最年少で魔術試験を、それも一発で合格してしまったレイナは悪い意味で目立ってしまったらしい。魔女たちはレイナのことをあまりよく思わず、全員がレイナの弟子入りを断ったとのことだ。

「まさか全員から断られるとは……」

「このままでは魔女になることはできません……」

「ん……とは言ってもなあ、さすがに知り合いに魔女なんていねえし……ヴィクトリカさん達には？」

「もちろん話しましたが……そんなすぐに解決できるような問題でもありませんし……」

「だよなく……ん、どうかかして力になってやりたいんだが……」
「……すいません、急にこんなこと……邪魔になっちゃいまし

たよね」

「あ、おい、どこに行くんだ？」

「帰ります。あまり長居してユウマも時間を取るわけにもいきませんから」

そう言っつてさつきとイレイナは去って行ってしまった。俺はそんなこと気にしないのになあ……家に帰ったら、父さん達にも話してみるか。

.....

さらに数日、あの日以降イレイナのことを見ていない。イレイナのことは父さんにも相談したが、“心配しなくても大丈夫だ”としか言われなかった。とはいえ、やはり心配だ。

ということで、俺は普段は修行に使う時間を返上してイレイナの家に向かうことにした。のだが……。

「え？いない？」

「ええ、今イレイナは森の奥の廃小屋に住んでいるという、“星屑の魔女”の弟子になっているの。住み込みだから、今ここにはいないわ」
「星屑の魔女……それじゃあ、無事に弟子入りを受け入れてもらえたということですね」

「そうね、無事に……」

何か含みのある言い方な気がするが、しかし、無事に弟子入りできたというのは喜ばしいことだ。最近顔を見ていないのも、その星屑の魔女の元で魔女になるための修行をしているからだろう。それなら納得だ。

あいつは直実に、自身の夢に向かって歩み出している。俺も負けてはいられないな。

そう思い、俺も俺の夢に向かうための修行に向かう。父さんは普段家にいる機会は少ないが、どういうわけかあの祝いの日以降は家に居続けている。剣士である父さんから色々教わるにはまたとない機会

だ、逃すわけにはいかない。俺は急ぎ家に戻ることにした。

.....

「手合わせ頼む、父さん!!」

「熱心なことだな・・・そんな剣士になりたいか？」

家でゴロゴロしていた父さんを引つ張り出し、いつも俺が修行の場として使っている広場に来る。広場、とは言っても人工的に整えられているわけではなく、ただ開けた草原というだけだ。しかし、どうにもここがしつくりくる。

「なりたいき、剣士は俺の夢なんだから!!」

「・・・そうか、しょうがない、相手をしてやる」

使う得物はお互い木刀。万が一でも怪我がないようにだし、それは俺も納得しているが、父さんの聖剣を触ってみたいという願望もある。剣士を指す身として、やはり聖剣は憧れの物だし、一度見てみたいし、触ってみたい。前々からそう思っているのだが、結局一度だっけて見たことがない。

「ほっ」

「うわ!?ちよ、急に何すんのさ!」

「お前がいつまで経っても仕掛けてこないし、何やら雑念が入っていたようだったからな。それで?どうするんだ?」

「何を・・・おりゃ!!」

父さんの言う通り、今は修行に集中集中!!こんなんじやイレイナには置いてかれてしまう!

「よっ、ほっ。そんな太刀筋じゃ、動かなくても片手で余裕で往なせるぜ?もつと思考を凝らせ」

「まだまだ!!行つくぜ!!」

.....数十分後、俺は無様にも地面に大の字で横たわっていた。当然だ、父さんは立派な剣士・・・今の俺が到底敵う相手ではない。「まだまだだな、ユウマ。その程度の剣じゃ、剣士なんて夢のまた夢だ

ぞ?」

「うっ、手厳しい……父さんはどの位の時に剣士になったの?」
「ん? そうだなー……少なくとも、史上最年少で剣士になったって話題にはなったぞ?」

「へ……」

史上最年少……ついこの間も同じようなことを聞いたな。イレイナも史上最年少での魔女見習いになってるし……俺の周りにはそういう天才な奴が多いのかな?

「さて、まだ時間は早いが……どうする?」

「当然も一戦……したいんだけどさ、一回だけ父さんの聖剣見せてくれない?」

「ん? なんでだ?」

「気になるんだよ!! 聖剣が!! 一度ぐらいは見てみたいしさ!!」

「お前にはまだ早いさ」

「えく? じゃあいつになったら見せてくれるんだ?」

「そうだなく……お前がお前自身の剣を手にした時……かな?」

「なんじゃそりゃ……一体いつになるんだよ……」

「そう悲観的になるもんじゃない。案外すぐだろうさ……それで? もう一戦……するんじゃないのか?」

「当然!!」

俺は地面から飛び起き、横に置いていた木刀を握る。とにかく聖剣のことは置いておく、今は修行だ修行!!

第二十四話

さらに数十日という時間が経過した。俺は毎日毎日修行を繰り返して、時には父さんに手合わせを頼んでいた。おかげで俺の剣の腕はメキメキと成長……。してあればいいのだが、残念ながら相手が父さんだけだし、未だに一度も勝つどころか一太刀も入れられずにいる。あまり成長しているような実感は湧かない。

「どうしたもんかなあ……。そういえば、もう一ヶ月近くイレイナと会ってないな。まあ、あいつも魔女になるための修行で忙しいだろうけど……。」

しかし、こうして一度イレイナのことを考えると、どうにも会いたくなくなってくる。というかちよつと寂しい。今まで一緒にいることが方が圧倒的に多かつたし、こんなに長い時間会っていないのは今回が初めてだ。

「……。確か、森の奥って言ったよな……。」

俺は読んでいた本を閉じて机に置くと、そのまま家を飛び出す。ちよつとだけ……。ほんのちよつと見るだけなら大丈夫だよな……？

そう思いながらやって来ました家の裏手側にある森の奥……。そこに昔からある廃小屋に。前にヴィクトリカさんに聞いた話じゃここで住み込むの修行をしているってことだけど……。

幸いにもイレイナはすぐに見つけた。魔法の練習をしていたのだろう、彼女の前には切り倒された木が列になって横に並んでいる。イレイナの横には一人の魔女が。星屑の魔女だろう。

「さて、イレイナ。今から試験を行います」

星屑の魔女を確かにそう言った。まだ一ヶ月しか経ってないのに、もう試験か！さすがはイレイナ……。魔女になるのも時間の問題って言っていたのも、虚言じゃないってことだ。

しかし、一体どうしたのか……。とうのイレイナは驚愕し、まるで信じられない者を見ているかのような目で星屑の魔女を見ている。まあ、そりやそうか……。確か最初の一ヶ月は、何も教わって

いないはずだからな。………ん？

何言つてんだ、俺は……この一ヶ月がイレイナが何をしていたのかなんて、俺は一切知らない……。なんで何も教わってないなんて言えるんだ？

目の前では普段の俺の修行では全く見ない、魔法の戦いが……。否、一方的な蹂躪に近い何かが繰り広げられていた。魔力の塊、熱の線、風の刃、岩石の雨、雷の槍……。ありとあらゆる魔法がイレイナを襲っている。当然イレイナは太刀打ちなんてできない、魔法を発動なんてしなくとも、目の前の魔女との格の差を思い知っている。しかし、割り込んではいけない。あくまでのこれは試験……。あの星屑の魔女……。フランさんがイレイナを殺すことは絶対にないし、なおかつこれは今のイレイナに繋がる重要な出来事だ。割り込んで台無しにするわけには……。

「っ……。また……。俺の知らない記憶が……。？」

さつきから何かがおかしい。どういうわけか俺の知らない記憶が頭の中に流れ込んで……。本当に知らない記憶か？俺は本当は知っていた？

『はははは!!』

『待って！返してよお!!』

「!？」

突然、俺の周りの景色が大きく変わる。さつきまでの木々が生い茂った森の中とは違い、辺り一面人工物の街の中……。これは、少しだけ昔のロベッタだ。そこでは、複数人の子供が何かを持って走り回り、それを一人の少女が必死になって追いかけている。余程大事なもののなか、追いかけている少女の目元には涙が浮かんでいる。

「この……。光景……。っ！」

見間違うはずがない、あの少女はイレイナだ。まだ子供だった頃、同年代の子達が走り回ったりしているなかですつと絵本を持っていたイレイナは、ある意味浮いている存在だった。そのためか、何度かこのような光景を目の当たりにしてきたものだ。

「とにかく……。あの絵本を……。」

そう思つて踏み出そうとした瞬間、再び場所が————
否、場面が変わる。すでに日が傾き始めている時間帯、イレイナの家
に繋がる道の端っこに彼女は蹲っていた。時々聞こえる啾り泣き声
から、おそらく取り返せなかったのだろう。彼女の周りにも、本のよ
うな影は一切見当たらない。

『……はいこれ！取り戻してきたよ、ワンダーストーリー！』
『ふえ？』

そんな時、彼女の元に一人の少年がやってきた。少年の手中にあるのは、確かに先ほど彼女が追いかけていた子供たちが持っていた物
と同じ本だった。本が無事に戻ってきたこと、その少年が少女にとつ
ては大切な存在だったこと、それらが作用したのだろう、少年はそれ
をイレイナへと渡そうとしたところで、イレイナはその少年に抱きつ
き、思いつきり泣き出す。

『うわああああん!!ユウマ〜!!』

『ああ〜もう、ほらいレイナ、本は大丈夫だよ。だから泣き止んで』
『わああああ!』

『もく、仕方ないなあ……』

ユウマ。確かに彼女がそう呼んだ少年はポケットからハンカチを
取り出し、それを彼女の顔へと充てがう。ああ……この、光景
は……

『よいしょつと……うん、やっぱりイレイナは笑顔の方がいいよ
!』

『笑顔……?』

『うん!今度から、街に行く時は僕も一緒に行くよ!そっちの方が、安
心でしょ?』

『……うん!!』

笑顔でそういう少年ユウマに少女もまた、笑顔で返す。ごく当たり前の、
子供の日常が、今の俺たちには遠い日常が、そこにはあった。

再び場面が変わる。先ほどよりも時間が経過しているのだろう、少
女を待つ少年の元に駆けつけた彼女が持っていたものは、件の絵本で
はなかった。

『ユウマ、これ見て!!』

『ん?何それ?.....』二ヶの冒険譚?』

俺たちの運命を決定づけたといっても過言ではないそれを、イレイナは少年に渡す。父親の影響だろうか、年齢にそぐわない速さで読破した彼は、先ほど呼んだ内容に心震わせていた。

「だめだ.....」

『私ね、いつか旅をしてみたいの!この本に出てくる二ヶのように!!』

「その旅は...君たちが思ってるような生やさしいものじゃない...」
『気持ちは分かるけど...でも、大丈夫なの?ただ安全な旅ってわけじゃ、なさそうだったよ?』

「君たちの人生を...大きく歪めてしまう...」

『む...それでも私は、旅をしてみたいの!!お母さんは、』二ヶのように魔女になったら旅をしていい”って!!だから私は、魔女になるの!!』

「だから...!!」

『...決めた!!イレイナが魔女になるんだったら、僕は剣士になるよ!!それで、イレイナが安心して旅を出来るように、守るんだ!!そしてらほら、イレイナも笑顔でいられるでしょ!』

瞬間、頭に大きな衝撃が走った。イレイナが安心して旅を出来るように、イレイナが笑顔でいられるように...。そうだ思い出した、それは、俺が剣士を志すようになった、本当の理由...!!

『剣士?』

『うん!ほら、この本に出てくる二ヶにだって、一人の剣士がついてたじゃない?だから僕は、その剣士になる!!』

『でもそれじゃあ、ユウマだけ大変じゃない?私、ユウマにも笑顔でいて欲しいな』

『うん...それじゃあさ!いつか僕も、イレイナの旅に連れて行ってよ!イレイナと一緒にいられたら、僕も嬉しいし!!』

『私の旅に?...うん、いいよ!!』

『それじゃあ約束だね!』

『うん、約束!!』

『僕（私）達は、これからも一緒に!!』

小さな子供たちが結んだ、なんてことはないどこにでもありそうな約束、しかし、この時は確かに、彼らの中に存在していた。

「……そうだよ、なんで忘れてたんだ……。俺は、あいつの笑顔がどうしようもなく好きだったんだ……。だから彼女が笑顔でいられるように、剣士になろうとしたんだ……。彼女が旅を出来るように……。笑顔でいられるように……。何より、約束を守るために……俺は……。剣士になると誓ったんだ!!」

刹那、俺の周囲に炎が立ち込める。やがて収束していく炎は俺の目の前で、一本の剣を形作り始めた。それは他ならぬ、俺自身の剣。

「火炎剣烈火……」

気がつけば周りの景色は変わっていた。さっきまでの木々が生い茂った森の中ではなく、大きく開けた草原……。周囲に建物の影も人の姿も一切に無い。……。いや、一人だけ、少し離れた場所で座っている。

「どうやら、無事に思い出したらしいな」

「……。ああ、思い出せたよ。……父さん」

その人物……。父さんはそれを聞くと満足そうに微笑み、立ち上がる。その手の中には、もはや親しみすら感じる闇黒剣月闇が握られていた。

考えてみれば、この空間に置いて父さんは明らかにおかしかった。本来であれば剣士である父さんは一ヶ月もの長い期間家に居続ければいけない。

実際、俺の記憶ではこの期間において父さんは家にいなかった。

「俺をここに呼んだのは……。父さんなんだろう?」

「……。さ、どうだかな。いくら俺でも、こんな芸当が出来るとは思えないだろう?」

「それこそどうだか。そもそも、父さんはもう死んだはずだ。なのにこうして、話している。俺の目の前にいる」

「……。ある人に助けられてな。こうしてお前と話せるのも、その人

のおかげだ。……………さあ、ユウマ。最後の手合わせをしようか」

そういうと父さんは、ブックを取り出した。

『ジャアクドラゴン』

『かつて、世界を包み込んだ暗闇を生んだのは、たった一体の神獣だった……』

『ジャアクリード！』

『闇黒剣月闇！』

「……変身！」

『Get go under conquer than get keen. ジャアクドラゴン！』

『月闇翻訳！光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無常に暗黒竜を支配する！』
見慣れてはいるが、こうして対面するのは酷く久しい、闇の剣士カリバーへと父さんは変身した。俺はそれに応え、目の前に刺さっている火炎剣烈火を引き抜き、納刀されている状態となったそれを腰に充てがう。

『聖剣ソードライバー』

ドライバー自体はエスパーダが使用していたものと同様。違うのは、納刀されている聖剣ぐらいだ。俺は久しく使用していなかったブックを取り出す。

『ブレイブドラゴン』

『かつて、全てを滅ぼすほどの偉大な力を手にした神獣がいた……』

ドライバーの一番右のスロットに装填。火炎剣烈火を一気に引き抜くと、ブックが開かれる。

『烈火抜刀！』

「……………変身!!」

『ブレイブドラゴン！』

『烈火一冊！勇気の竜と火炎剣烈火が交わる時、真紅の剣が悪を貫く！』

身に纏われるは紫の竜ではなく、赤い竜。かつての相棒は嬉しそうに一声を上げ、俺の装甲を創り上げていく。

「……ようやくの復活だな、炎の剣士・セイバー！」

「ああ……火炎剣烈火……ブレイブドラゴン……また、よろしく頼む」

その言葉と同時に、火炎剣烈火の刀身が赤く光る。どうやら俺の声に、応えてくれていているらしい。さて……

「いくぞ……父さん！」

「ああ……来い、ユウマ！」

火と闇、2本の聖剣が、衝突する。

第二十五話

二人の剣士の衝突、その度に火花が飛び散る。

「なるほど、以前よりも格段に強くなっている。様々な剣士と戦ってきた成果か？」

「それもあるだろうけど……俺は自分の本当の思いに気づいたんだ、ここで父さんに負けてられないんだよ!!」

火炎剣を振るう。闇黒剣に受け止められる。その体勢のまま父さんの顔面に蹴りを入れる。それは左手で受け止められたが、そのまま回転して火炎剣で斬撃を入れることに成功する。

「うおつと!?!……つつつ……やるねえ」

「そう言う割のは、対してダメージも入っていないようだけど」

「そりやそうだ。そう簡単に、父親を超えられると思うなよ」

そう言った瞬間、父さんの姿が溶けるように消えた。そう認識した時には俺の背後から気配を感じ、慌てて火炎剣を振るう。しかし、火炎剣は空を斬り、気づいた時には俺の体は宙に浮いていた。

「ぐお!!」

思いつきり、背中を叩きつける。おかげで多少の痛みが体を走るが、気絶する暇など当然ない。すぐに立ち上がり、父さんに火炎剣を向ける。

「今のは……闇の世界を使った瞬間移動か……」

「わざわざ空間を切り裂かなくとも、自身を闇と同一化させることで移動することが可能だ。お前はやってなかったようだがな」

さすがは本当の意味で闇黒剣に選ばれた人だ……俺よりもずっと、闇黒剣を使いこなしている。それなら俺も……!!

「はあああああ!!」

俺の気持ちに応えるように、火炎剣の刀身が赤く光りだし、徐々に燃え上がらせていく。

「ほう……火炎剣を使うのは久し振りの筈だが、やはり選ばれただけはある」

「行くぞ、父さん!!」

「来い！ユウマー！」

再び聖剣がぶつかり合う。しかし、威力が上がってるのかその衝撃は、周りへと飛散していく。

それと同時に俺と父さん、二人のブックが共鳴し出し、赤と紫の竜が飛び出して来る。二体の竜はまるで俺と父さんのように、ぶつかり合う。

「ブレイブドラゴンとジャアクドラゴンが共鳴したか・・・」

「何も不思議なことじゃないだろ、前にもあったことだ」

「それもそうだ・・・ふん！」

父さんは突然剣を逸らすと、俺との距離を取る。そしてもう一冊のブックを取り出した。

「そろそろ第二ラウンドといこうか」

『ジャオウドラゴン』

『邪道を極めた暗闇を纏い、数多の竜が秘めた力を解放する・・・』

『ジャオウリード！』

「ふん！」

『闇黒剣月闇！』

『Jump out the book! Open it and burst! The fear of the darkness! You make right a just, no matter dark joke. Fury in the dark.』

ジャオウドラゴン！』

『誰も逃れられない・・・』

『ジャオウドラゴン・・・！』

俺も何度も使用したジャオウドラゴンのブック。だからこそ、あの本の力は嫌でも痛感出来る。そして、ブレイブドラゴンでは太刀打ち出来ないという事も。

例えばワンダーコンボを使用しても、増冊しても結果は同じだろう。だとすれば、残りは二冊。そして安全に使用出来るのは・・・！

「やるしかない!!」

『ドラゴニックナイト』

『ドでかい竜をド派手に乗りこなす、ド級の騎士のドラマチックバトル……!』

通常のブックとは違い、ジャオウドラゴンのように……それで形状は少し違う、大きめのブック。ブレイブドラゴンをドライバーから抜き取り、代わりにそれを装填する。

「……はっ!!」

『烈火抜刀! Don't miss it!』

『(The knight appears. When you side.) ドメタリックアーマー! (you have no grief and the flame is bright.) ドハデニックブースター! (Ride on the dragon, fight.) ドハクリヨックライダー! (Dragon knight.) ドラゴニックナイト!!』

『すなわち、ド強い!!』

先程までのセイバーの姿とは大きく違う、全身に纏う白銀の装甲。左手にはドラゴンの頭を模した専用装備”ドラゴニックブースター”が備わっており、展開されたブックはドライバーの三冊分全てを補っている。

「ああ……久しぶりだ、この感覚……!」

「懐かしんでる暇はないぞ!」

『必殺リード! ジャアクドラゴン!』

「はっ!」

闇黒剣から放たれる闇の斬撃。俺はそれを火炎剣で受け止めると、それを炎の斬撃として打ち返した。

「うお!?! ……おいおい、そんなのアリかよ……」

父さんはそう呟くが、普通のセイバーだったら不可能な芸当だ。あくまでもドラゴニックナイトを使ってるからこそ、可能な方法。

俺たちは互いに接近し合う。父さんは闇黒剣を振るうが、残念ながら今の俺の装甲には傷一つつくことはない。何も気にすることなく、接近できる。ある程度近づいたところで闇黒剣を左手で受け止め弾き、地面に手を向けるとそこから炎が湧き出る。

「決めたよ……俺はこれからも戦い続ける。組織と……世界の闇と……」

「……それはなんでだ？お前は、なんのために戦うんだ!？」

「決まってる……イレイナを守るため、イレイナがこれからも平穏な旅を続けられるようにするためだ！それが……俺が剣士を志した、最初の理由だから!!」

『ブレイブドラゴン！ワン・リーディング!』

ブレイブドラゴンのライドブックをドラゴニックブースターに読み込ませる。それにより、ドラゴニックブースターに炎が溜まり始める。

『フレイムスパイシー!』

「はああああ!!」

「ぬおお!!あちあつち!!」

強力な火炎放射によって吹き飛ばされる父さん。闇黒剣を支えに、立ち上がる。

「その信念……お前は貫き通せるか？何があるうと、もう見失わないと?」

「見失わないさ……俺にとって何が大事なのか、はつきりとわかったから……!」

「……ならば、その思い……俺にぶつけてみる!!」

父さんはその身に闇の纏うことで、飛行の可能とする。空中戦か……なら!」

俺は展開されたブックの表紙ページを三回、押し込む。すると、俺の元に神獣ブレイブドラゴンが出現する。先程現れた際は完璧な意思疎通は不可能だったが、ドラゴニックナイトを使用しての召喚なら話しは別だ。

「ブレイブドラゴン、頼む」

「ーギヤアアアア!!」

ブレイブドラゴンが一声あげると、俺のその背中へと乗せ、空を駆け始める。向かう先はただ一点、父さんの元だ。

「はああああ!!」

「むん!!」

特攻し、いなされ、旋回して、再び突撃する。地面での戦いとは違う、360度全ての使える空中というフィールドで、俺たちは何度も、何度もぶつかり合う。

「お前は……お前も、滅びの未来を見た！その未来に進むと分かっていても、お前は彼女が笑顔でいられると思うのか?」

「俺はもう知っている……未来は、変えることが出来るんだ！他でもない、今を生きる俺たち自身の手で!!」

「それならば分かっているはずだ!!決められた未来を覆すのが、どれだけ苦難の道なのか!!最悪、その身を犠牲にすることになるぞ!!」

「……最初はそのつもりだった。闇黒剣の力を使えば、俺という存在を代償に世界を、イレイナを救える。だったら俺は、この身を犠牲にしてもいいって!!……だけど、それじゃあ駄目だったんだ……それじゃあ、本当の意味でイレイナを救えない!!」

「……果てしないぞ、その道は……」

「分かっているさ、それでも俺は、俺たちはその道を行く！俺たち二人が一緒なら、どんな未来だろうと大丈夫だ……そう思っていた、あの頃のように!!俺もイレイナも両方救える未来を創ってみせる!!」

『ドラゴニック必殺読破!』

「はあああ……はあっ!」

「っ!」

『ジャオウ必殺読破!』

「はあ!!」

『ジャオウ必殺撃!!』

『ドラゴニック必殺撃!!』

二人の剣士が放つ、相手を屠る必殺技。放たれたキックは、空中のある一点で、ぶつかり合う。その衝撃はかつてなく、風を跳ね返し、地を抉り、それでもなお、止まる気配がない。

「はああああ……」

「はああああ……」

「はああああ!!」

そろそろ限界に近い。揃ってそれを感じ取った二人は、さらに威力を上げる。相手の技を受けたら負ける。互いに限界まで威力を上げて、上げて、上げて!!

「はあああああ!!!」

「っ!!」

セイバーが、一歩上回った。

カリバーは見事に打ち負け地面に落下、変身が解除された。

「っ!・・・はあ・・・はあ・・・」

「いつつつつ・・・なるほど、それがお前の覚悟か・・・」

「父さん・・・」

「今のお前なら、こいつも使える筈だ」

そう言つて父さんが投げ渡したのは、一冊のブックだった。形状はジャオウドラゴンと同じだが、それはブレイブドラゴンよりも赤い・・・真紅で彩られている。

「これは・・・」

「前にある一件で入手してな、解析の結果、そいつは人の持つ想いの強さが大切になってくる」

「でも、なんで・・・」

「無の剣士ファルシオン」

「!」

「奴の全てを無にする力は確かに強大だが、それでも無に出来ないものはある。それが人の想い・・・想いの強さが、奴を倒すための大きな力となる」

「なんで、父さんがそんなことを知っているんだ・・・?」

「ある人に教えてもらつてな・・・歴代の無の剣士は、いずれも人の持つ想いの強さによって消滅している。そのブックは、言うなれば対無の剣士特化のブックだ」

「対、無の剣士特化・・・」

「いいか、しっかりと心に刻んでおけ!これから歩む苦難の道にも立ち向かう”勇気”を!彼女を・・・イレイナを想う”愛”を!それらの想いを貫き通すという”誇り”を!・・・忘れるな、覚悟を

「超えた先に、希望はある!!」

「父さん……」

「……そろそろ時間だ。お前のやるべきこと、もうハッキリしてる
だろ?」

「……ああ……最後に一つ、聞いてもいい?」

「なんだ?」

「父さんにとって、ヴィクトリカさんとの旅は……楽しかった?」

「……ああ、もちろんだ!」

そう言うと、父さんは光となって消えてしまった。それと同時にこの空間を消滅を始める。この世界を存在させていたのが父さんだったからか、それとももうこの世界の存在自体が不要となったのか、どちらにせよ、俺の意識はもうまもなく現実へと戻ることだろう。

完全に消えてしまったのか、それともまだどこかで父さんの魂は存在しているのか、それは俺には分からない……けど、何となく予感
はしている。父さんとはまたいつか、会える。

「ありがとう……父さん」

第二十六話

「っ!!」

「ユウマ、起きましたか?」

「フラン、先生……ここは?」

目を開けて飛び込んだできたのは見覚えのない天井、すぐ近くに人の気配を感じ、見るとフラン先生とサヤの二人がいた。気絶する前に見た人数よりも少ない。

「自由の街クノーツ。その中にあるイレイナが借りていた宿の部屋ですよ」

「イレ……イナ……つく……」

「あまり無理はしないでください。その体についた傷は光の聖剣が治療しましたが、蓄積された疲れまでは取れていません。今はしっかりと休むべきです」

「いや……そんな暇はありません……!フラン先生……あいつは、イレイナは……」

「イレイナさんでしたら、今は外にいるはずですよ。一人で痛いとか何とか……あれ?ユウマさん何持ってるんですか?」

俺の手の中に握られていたのは父さんから渡されたあのブックだ。それに気づいたサヤは不思議そうに見てくる。

「さつきまではなかったのに……」

「これは……父さんからの贈り物だ」

「お父さん……ハヤマさんからの?……ちよつとユウマ、どこへ!?!」

重い体を無理やりにも立たせて部屋から出て行こうとする俺に、フラン先生が呼び止める。

「決まっています、イレイナのところです。頼みたいことが……話さなきゃいけないことが、たくさんあるんです」

「それは……今でなくてはいけないのですか?」

「はい」

「いやいやいや、無茶ですよ!傷は治ってるとはいえ、結構な重体だっ

たんですよ！下手に動かずに休んでおいた方が……」

「止めても無駄そうですね……分かりました、行きなさい」

「え、いいんですか!？」

「フラン先生……「ただし!」!」

「これは約束してください……イレイナを悲しませないこと、そして……二人で帰ってくることに。いいですね?」

「……はい」

俺は壁に立ってかけられていた闇黒剣と雷鳴剣を見やり、雷鳴剣だけを手にとって飛び出していく。

「いや、ユウマさん闇黒剣置いてっちゃいましたけど……!」

「大丈夫ですよ、きつと……ユウマ、イレイナのこと、頼みます……」

……

昨日のあの騒ぎが嘘のように、街中はとても静かです。そんな街の様子を高台からぼんやりと眺めている私は、先ほどの事を思い返していました。聖剣が……雷鳴剣が、私を選んだ……どうして、私なのでしよう……私が二つの世界を繋ぐ存在だから?正直色々ありすぎて、頭の問題も追いついていません……

先ほどやって来たシーラさんが言っていました、まだユウマは目覚めていないようです。体の怪我はユーリさんが治しましたが、シーラさん曰く精神の問題なのだろうと。しかし、無の剣士はあくまでも一時的に撤退しただけ……あの人はまたやって来る。聞いた話だとユーリさんは何とか自分でも光と闇の聖剣両方を扱えるようにしてくると言っていてどこかに行つたそうです。どこに行つたのかは分かりませんが、いつ帰つて来るかは分からないとのこと。最悪、間に合わない可能性も……。そうなってくると、唯一戦えるのが私だけになってしまう。私一人で、あの剣士に対抗出来るのでしょうか……いや、そもそも聖剣をちゃんと使えるのでしょうか……?

「分からない……分かりませんよ、ユウマ……」

さつきはユウマを助けなきゃいけないと思ってたから体を動かすことができた。けど、冷静になった今になって体が震え始める。この感覚・・・私は前にも味わったことがある。そう、あれはまだ魔女見習いだった頃・・・初めてフラン先生と戦った時の感覚です。自分一人では到底敵うはずがないほどの強大な敵が相手、しかも前とは違い、相手は確実に私を殺そうとするはず・・・。

かつてない明確な殺意を前に、体の震えは止まるどころかより一層増すばかり。死への恐怖なのでしょう、目からは涙が流れ始める。一体どうすれば・・・。

「ここにいたのか、イレイナ」

こんな時に私のところに来るのは・・・やっぱり、一人だけだった。

「ユウマ・・・」

.....

思い立ってすぐに飛び出したはいいものの、俺はイレイナがどこにいるのかさっぱり知らなかった。サヤは外としか言ってなかったし、未来を見る闇黒剣は部屋に置いてきちまったからな。まあ、幸いにも探している最中にシーラさんと遭遇、イレイナの場所を教えてください。おかげで俺は、こうしてイレイナの元へと辿り着くことができた。

「ここにいたのか、イレイナ」

「ユウマ・・・」

「・・・また、泣いてるのか・・・いや、俺のせいかな・・・」

「い、いえ・・・そういうわけじゃ・・・」

そうは言うが、絶対に原因には俺が含まれている。だが、それから目を背けるつもりはない。俺はハンカチを取り出すと、それをイレイナの顔に充てがう。

「分かっているさ。俺がやってきたこと・・・それに後悔するつも

りはないけど、それがどれだけ、イレイナを悲しませたのか……ごめん」

「……どうして、言ってくれなかったんですか？」

「え？」

「私は、ユーリさんから聞いて初めて知りました……私がどういう存在なのか、ユウマが頑なに聖剣を封印しようとしていたのか……全て、私の為なんでしょう？」

「……流石に、バレルよな」

「情報があれば、自ずと答えは導けます。私を誰だと思っっているのですか？」

「灰の魔女イレイナだ」

「ふふ、そうですね」

「……俺さ、大事なことを忘れてたんだ。俺にとって、俺の物語の原点……一番忘れちゃいけないことの筈だったのに……」

「ユウマの物語の原点……ですか。それは、約束のこと……ですか？」

「っ！……イレイナは、覚えてたんだな……」

「忘れるわけがありません。だって、まだ何一つ果たせていないのですから……ユウマと一緒に旅をするのだって、ユウマが最高の剣士になるのだって、まだ……何一つ……」

「……本当に、イレイナは凄いや……いつだって、前を見て突き進んでいる。どんなことがあるうとも、ただ自分の求める未来に向かって……」

「それはユウマも同じですよ」

「俺？」

「ユウマだって、自分の望む未来に向かっていたではないですか。剣士になると誓ったのだってそう、未来を変えようとしたのだってそう……私達は似たもの同士なんですよ、きつと」

「……似たもの同士……か」

「いやですか？」

「……そんなわけ、あるか……まだ、間に合うかな？約束……」

「期限なんてありませんよ、私は……待っていますから」

その一言は、どれだけありがたかったか。とにかく、俺のこれからの未来は決まった。

「……ありがとう、イレイナ。……ただ、その前にやらなくちゃいけないことがある」

「ファルシオン、ですね？」

「ああ、これから約束を果たすにせよ、まずはあいつを退ける必要がある。だが、俺一人じゃ無理だった……だから」

部屋から持つてきた雷鳴剣をイレイナの目前に突き出す。これだけでも、その意味を理解するはずだ。

「こんなこと言える立場じゃないかもしれないけど……俺に力を貸して欲しい。魔女として、剣士として」

「……」

すぐには受け取らないイレイナ。それもそうだ……まだイレイナは覚悟が決まっていなかったから。

「……私に、その役目は果たせるでしょうか？」

「……それは俺にも分からない。けど、俺は思うんだ。二人一緒なら、どんな未来が来ても大丈夫だって。俺たちが笑顔でいられる未来を、創造出来るって」

「……一体どこから湧いてくるんですか、その自信は……二人一緒なら、どんな未来が来ても大丈夫……か」

呟くとイレイナは顔をあげ、その手を伸ばした。しっかりと、雷鳴剣を掴んだ。

「イレイナ……」

「ですが……約束して下さい。もう、勝手にいなくならないで」
「……ああ、約束するよ」

もう絶対に、忘れない。この約束を……イレイナの笑顔を守る為に……

「……ああ、それと……忘れる前にこれを渡さなきゃな」

「これ?……きゃ……って、これ、私の帽子……?」

俺がイレイナに被せたのは彼女の帽子。前に時計郷で彼女が無く

してしまったそれだ。

「どうしてユウマがこれを・・・？」

「どうしてだろうな？お前がその帽子をなくすって知った時、どうしてかそれを回収しとかなきゃって、思ってたな」

「そうですか・・・ふふ、ユウマ！」

「ん？」

「ありがとうございます!!」

イレイナはとても綺麗な笑顔で、俺に言ってきた。ああ・・・やっぱり、守らなきゃな。彼女のこの「」笑顔。

第二十七話

一夜明け、時刻は昼頃。そいつは再び、クオーツへと降り立った。燃え盛る羽根を消し、地に足を着けたそいつーバハトは、自分を待っていたであろう二人を睨みつけた。

その二人、ユウマとイレイナの腰には既にそれぞれのドライバーが装着されており、準備は万端といった風だ。

「ーははっ！どうやら剣士として戦うようだな」

「ええ、決めましたから。．．私は魔女としても、剣士としても、生きていくと。ユウマと一緒に．．！」

「無の剣士・ファルシオン．．．お前は今ここで、俺達の手で倒す！」

「倒す、か．．．不死身の俺相手に大きく出たなあ!!」

『エターナルフェニックス』

「行くぞイレイナ！」

『ブレイブドラゴン』

「はい！」

『ランプドアランジーナ』

それぞれがそれぞれのブックを取り出し、ドライバーに装填。一斉に納刀されていた聖剣を引き抜く。

『烈火抜刀！』

『黄雷抜刀！』

『抜刀．．．！』

「変身！」

「変身！」

「シーーーーー．．．変身」

『ブレイブドラゴン！烈火一冊！』

『ランプドアランジーナ！黄雷一冊！』

『エターナルフェニックス！虚無！』

それぞれの本より飛び出たドラゴンが、魔人が、不死鳥が、剣士としての装甲を創り上げていく。

「これが・・・雷の剣士・・・」

「イレイナ・・・雷の剣士の能力は説明した通りだ。おそらく全てではないだろうが・・・」

「はい・・・大丈夫です」

「ふん・・・話している暇があるのか!?!」

話をしている二人の間に割って入るように、跳躍したファルシオンが無銘剣を振りかざす。それに合わせて二人はそれぞれ横に飛んで避け、ファルシオンを挟み込むようにして聖剣を構える。

「・・・はあ!」

「ふん!」

先に動いたのはセイバー。ファルシオンに迫り火炎剣を振り下ろし、ファルシオンはそれに反応して受け止める。聖剣を能力を發揮しない、純粋な力比べ。勝ったのは・・・・・・ファルシオンだった。

「グア!」

「ふん・・・まずは貴様からだ!」

「くっ!」

先ほどとは逆の立場となった。ファルシオンが無銘剣を振り下ろし、セイバーが受け止める。しかし、先ほどの展開からもこのままではセイバーが競り負けることは明白である。

「なんだ、これ終わりか?その程度でよく俺を倒すとか戯言をほざけたな」

「それは・・・どうかな?」

「何?・・・っ!」

異変に気づくファルシオン。周りには、彼ら3人の剣士を囲うようにして作られた電気の檻が貼られていた。それは頭上すらも覆っている。

「こいつは・・・そうか、貴様か!」

「ふう・・・なんとか出来ました」

この檻を作り出したのは、雷の剣士でありエスパード。ニードルヘッジホッグを使って自分たちの周囲に針を支柱のように並べた彼

女は、そこに雷を永続的に落とすことで雷の檻を作ったのだ。

「だが、それだけでこんな檻が出来るわけが……つ、そうか、魔法か……!」

もちろん、これを作り上げたのはエスパードだけではない。基盤となるものを作り上げはしたが、そこに頭上まで覆えるほどの檻を作り上げるのは雷鳴剣やブックだけでは不可能だった。そこで、彼女たちに協力してもらうことにした。

「よし……このまま電気を流し続けるぞ!」

「はい!」

「うくん……やっぱりちよつと電気魔法は苦手だな」

「あら、それだったら教えてあげましょうか?」

「いえ、教えてもらうならイレイナさんがいいです」

「いやそこは師匠の私にしろよ」

「あらあら、イレイナは人気ですねえ」

今現在、檻の外では四人の魔女による電気魔法が放たれていた。それぞれが層になるように電気を放つことで、支柱となった針に落ちた雷はやがて伝播していき、この電気の檻を作り上げることに成功したのだ。

「少なくとも、これで空中戦は封じた」

「はっ……それがどうした。この程度の檻、無にすることなんて容易い……!」

「そんなこと……させませんよ」

ファルシオンが電気の檻の意識を向けた一瞬、エスパードがファルシオンを斬りつけた。ファルシオンがその気配を感じた頃にはもう遅い、エスパードによる光速の剣戟が加えられていく。

とはいえ、相手が不死であることに変わりはない。加えた剣戟はその瞬間から修復していく。

「貴様……何がしたい?そんなことをした所で無駄なのは分かりきっている!!」

「ええ……どちらにせよ、剣士になったばかりの私一人では出来ることは限られます。でも……私は一人じゃない」

たのか・・・残念ながらファルシオンを倒すところまでは持つていけなかった。だから、その役目は彼が引き継ぐ。

『必殺読破！烈火抜刀！ドラゴン！イーグル！西遊ジャー！三冊斬り！ファ・ファ・ファ・ファ・ファイヤー!!』

一度納刀した火炎剣を一気に引き抜き、刀身に炎を纏わせた火炎剣を横一閃で切り裂いた。

「はあああああ!!」

間髪入れずにもう一閃入れる。それによってファルシオンは耐えきれずに、爆発を起こした。

「っ・・・はあ・・・はあ・・・」

「ユウマー!」

火炎剣を地面に突き、肩を大きく動かしているセイバーの元にエスパルダが駆けつける。

「どうやら、なんとか勝てたようですね」

「・・・いや・・・」

「え?」

すでに勝ったと思っているエスパルダとは裏腹に、セイバーはその警戒を一切解かない。そんな彼が見る先には、ファルシオンが装着していたドライバーが地面に転がっている姿だった。

「あれは・・・」

そのドライバーの元に、一つの羽が舞い落ちる。まるで炎のような色をしたそれはドライバーに付着し・・・大きく燃え上がった。

「な!?!」

「やつぱり・・・あの程度じゃ無理だっけことか」

やがて火が消えるとそこにはファルシオンの姿が。体を抑える様子も疲れている様子も一切なく、先ほどまでの戦いはまるでなかったかのような雰囲気を出している。

「油断してたよ・・・まさか俺を倒すなんてな。だが・・・あの程度じゃ俺を完全に倒すことは不可能だ」

『必殺黙読！抜刀！不死鳥無双斬り!』

「っ！イレイナ!!」

「きゃー!？」

ゆっくり考える間もなく放たれる斬撃から、セイバーはエスパーダを守ろうと突き飛ばす。しかし、自分が避けるような余裕はなかった。

急ぎ立ちあがろうとしたエスパーダが見たのは、斬撃に飲み込まれようとしているセイバーの姿だった。

「がああああああ!？」

「ユウマ!!」

一切抑えられることもなく、斬撃に飲み込まれるセイバー。やがて姿を表したのは、変身が解けたユウマだ。ユウマは膝から倒れ込む。まだ意識ははっきりとじていて起きあがろうとするが、どうも上手く起き上がれない。

そんなユウマの元に、ファルシオンが歩み寄る。

「これで終わりだ……まずはお前を、無に帰す」

動けず、避けることもままならない彼に、無銘剣が振り下ろされた。

「ユウマ———!!!」

第二十八話

「ユウマァー!!!」

振り下ろされた無銘剣は、一寸変わらず倒れているユウマを捉えていた。―――しかし、その刃がユウマを貫くことはなかった。

「……え？」

「……ユウリ……!」

代わりに無銘剣を受け止めたのは、何処からか飛来してきた最光だった。最光は無銘剣を受け止めながら戦っていた二人の無事を確認する。

「予定よりも大分遅くなってしまった……どうやら相当ギリギリだったようだ。とにかく、二人とも無事のように何よりだ」

「ユウリ……」

「ユウリさん……!」

「ここからは俺が引き受ける!はあ!!」

二人に変わりファルシオンとの戦いを開始する最光。一度無銘剣を弾き、そのまま最光シャドーを召喚してファルシオンを後ろに押し込んでいく。とにかくユウマから離れさせるために。

「ユウマ!!」

その隙にエスパードがユウマの元に駆けつける。火炎剣を地面に突き刺してなんとか立ち上がるユウマだが、すでに疲労困憊でこれ以上の戦いは無茶と言える状態だ。

「動かないでください、完璧には言えませんが、治癒魔法で回復させますから」

杖を取り出し、ユウマに魔法をかけるイレイナ。体に溜まった疲れはともかく、目に見える傷はみるみる塞がっていく。

「はあ……はあ……すまない、イレイナ」

「礼には及びません、それより……」

彼女が言わんとしていることは分かる。確かに一度倒したはずのファルシオンは対照的に全く疲れている様子を見せず、最光が加わり

3対1になったところで奴を倒す決定打には至らない。このまま戦い続けたところで、勝つどころかその可能性がどんどん減っていくばかり……。

「ユウマ！イレイナー！闇黒剣を渡せ!!」

ファルシオンと戦いながら、最光は二人に叫ぶ。その言葉が表す意味は、間違いなく一つだろう。

「闇黒剣を……ですが、ユウマはこんな状態ですし、貴方一人では闇黒剣の力は!!」

「その術はちゃんと用意した！時間はかかってしまったがな！とにかく、早く闇黒剣を！バハトを再び封印する!!」

五百年前に一度バハトを封印した彼は知っていたのだろう。不死身であるファルシオンを倒すことは不可能、止めるには封印するしかない。しかし、その考えに非を唱える者がいた。

「いや……封印じゃ駄目だ」

「ユウマ……?」

「五百年前に封印されたあいつが今ここにいるのは、誰かが奴の封印を解いたからだ。そして、それはおそらく……」

「……まさか、組織……!?!」

「多分だけどな。……どちらにせよ、ここで奴を封印したところでまた封印が解かれるだけだ。そうなったら無意味だ……!」

「でも……それじゃあどうすれば……」

「方法はただ一つ……ここであいつを倒すしかない」

「それこそどうするんですか？先ほどのように、幾度となく復活しておしまいですよー!」

「……」 「つだけだが……可能性はある」

その言葉と共に、ユウマは一冊のブックを取り出す。

「……それは?」

「父さんからの……贈り物だ……ユーリ!!」

「っ!」

ファルシオンと組み合っていた最光シャドウを消し、ユウマの元へ駆けつける最光。

「倒す……本当に、そんなことが可能なのか……？」

「多分……いや、倒す！」

倒す、ユウマのその想いに呼応するかのようになり、火炎剣はその刀身を熱く燃え上がらせる。

「火炎剣が……!!」

「ユウマの想いに、聖剣が応えた……!!……!!……!!五百年前、俺はあいつを封印した。それしか方法がないと思っていたからだ。だが、それはある意味あいつをこの世に縛りつける事となった……!!」

ユーリとて、親友を封印したことに何も思わなかった訳ではない。しかし、彼は剣士として、世界を守護するものとして、全てを無に帰そうとする彼を止めないわけにはいかなかった。不死身となったバハトを倒すことは叶わず、親友をこの世に縛り続ける封印しか、方法がなかった。それから五百年……あの頃果たせなかった想いを、成せる人物が現れた。

「ユウマ、本当にバハトを倒せるというのなら……頼む、あいつを救ってやってくれ！」

ならば、託すしかない。自分が果たせなかった、想いを。

「……ああ!!」

『エモーシヨナルドラゴン』

『勇気!愛!誇り!3つの力を持つ神獣が、今ここに……!』
「ふっ！」

『烈火抜刀!』

「ふううう……変身!!」

『愛情のドラゴン!勇気のドラゴン!誇り高きドラゴン!エモーシヨナルドラゴン~!』

『神獣合併!感情が溢れ出す!』

火炎剣が振るわれることで放たれた炎の斬撃が交わるとともに、三体の龍が出現する。勇気を宿す赤き龍“ブレイブドラゴン”、愛情を宿す白き龍“ルーンブライトドラゴン”、そして誇りを宿す黒き龍“ルーンデイルドラゴン”。

三体の龍は斬撃と合わせてユウマの周りを飛び交い、その姿を変え

ていく。見慣れたセイバーの姿から、赤と白、そして黒、三体の龍の力を宿したセイバーの姿へと。

「あれは……」

「なんだ……あの本は……!?!」

ユーリは自分が把握していない本を用いて変身したセイバーに驚愕する。そして、それはユーリだけではなかった。

「見ない姿だな……その姿はなんだ？」

無銘剣の切っ先を向けられながらも、ユウマは臆することなく答える。

「お前を不死身から解放する……希望の力だ」

応えると同時に火炎剣の切っ先を向ける。それが示すことは、ただ一つ。

「はあ!」

「ふん!」

2本の聖剣が激突する。片や炎を溢れさせ、片やそれを飲み込もうと黒が混じった炎を溢れさせる。どちらも決して収まることはなく、その炎をより強く燃え上がらせていく。

「ふっ!」

やがてその状況を破ったのはセイバー。ぶつかり合っていた無銘剣を弾き、ファルシオンごと後ろに下がらせる。

「はあああ!!」

そのまま流れるように炎を纏った火炎剣を振るう。ファルシオンはそれを寸前で避け、下から斬り裂くように無銘剣を振り上げる。それをセイバーは火炎剣で迎え撃つ。

火炎剣を突き出す。無銘剣で叩き伏せる。回転させてセイバー本体へと振り下ろす。左手に備わった黒い盾で弾き返す。続け様に下から火炎剣を振り上げ、ファルシオンを斬り飛ばす。

互いに引く様子も手加減する様子も全く見せず、己の出せる全力を持って相手を倒そうと聖剣を振るう。

セイバーは感じる。まだ足りない。目の前の不死の剣士を倒す

ためには、もつとエモーショナルドラゴンの力を、聖剣の力を引き出さなければならぬ。

ファルシオンは驚愕する。先ほどまでとは格段に違うセイバーの強さに。新たに見せたブツクのカ、否、それ以外の何かがある。不死のはずの自分を凌駕するであろう何かがある。

「バカな……なんだ、その力は……!!」

「はああああ!!」

「ぬおおお!!」

セイバーの勢いは止まらない。何度も何度も火炎剣を振るい、その度に威力を増していく。そしてそれは、一つの軌跡を引き起こす。

「はっ!!」

「ぬううううう!!?ー!ー!ーあり得ん、五百年傷つかなかった、この体が……!!」

ファルシオン……バハトは感じ取った。剣士としての装甲による目には見えないが、今のセイバーの一撃により、自分の体に傷がついたと。

続け様にもう一撃、二撃と振るわれる火炎剣が、その度に体に傷をつけていく。五百年間、ただの一度も傷つけられなかったこの体に。

「何なんだ……何なんだその力は!!?」

「決まってるだろ……聖剣でも本でも無い、人なら誰でも持っている力……想いの力だ!!」

『必殺読破!』

火炎剣を納刀、本から溢れ出る赤、白、黒の三つのエネルギーがセイバーへと集まる。

『伝説の神獣!一冊撃!ファイヤー!』

『情龍神撃破!!』

飛び上がるセイバー、自身に集結したエネルギーを右足に集中させ、ファルシオンに向ける。

「っ……無駄だあ!!」

『必殺黙読!抜刀!不死鳥無双斬り!』

「はあああああ!!」

ファルシオンに集まる漆黒のエネルギーが、不死鳥の翼を形成し、セイバーを迎え撃つ。

一体の不死鳥と三体の龍、それぞれの力を模したエネルギーが衝突し合い、そして打ち消し合う。そこにファルシオンが横に一閃の剣戟を放つ。しかし、それはセイバーに当たると同時にそのエネルギーを失い、消滅してしまった。

「はあああああ!!」

「ぬう……!?!」

そのまもの勢いで、ファルシオンに到達するセイバー。しかし、威力が足りないのか、ファルシオンはそれに抗うほどの力を見せる。

「やられるかあ……こんな所で……!俺は、全てを……無に……!!」

「っ!!」

圧されるどころか、むしろ徐々に圧していくファルシオン。だが、ここで引くわけには行かない。例え相打ちとなろうとも、ここで倒す。そんな意志を示すように、セイバーはさらに力を込める。

拮抗するところまで跳ね上がる二人の剣士の激突。その衝撃は魔女達が創り上げた結界の外に出ようとしているかのように、地面を抉りながら広がっていく。

このままでは……そう思われた時、それは突然終わりを迎えた。

『バハト……もう終わりにしよう』

『最光発光!』

『必殺読破!黄雷抜刀!』

「はあああ!!」

『アランジーナ!一冊斬り!サンダー!』

『Good luck!』

唐突に下から加えられた二撃。完全に予想の範囲外からのそれらは、拮抗を崩すには充分過ぎるものだった。

「はあああああああ!!!」

「ぬおおあああ!!!」

セイバーがファルシオンを貫く。それは確かに、無の剣士との
oooooooooooo、バハトとの決着を意味していた。

第二十九話

決して長くはない、しかし本人達からしたらまるで永遠かのように感じられた戦いが、ようやく終わった。その立役者であるユウマは、決着後すぐに変身が解け、火炎剣を支えになんとか立っている状態だ。

その火炎剣は、ひとまずの役割を終えたのか、先程の輝きが消え失せている。

「ユウマ！」

「イレイナ……助かった、ありがとう」

駆けつけるイレイナ。既に変身は解いていて、所々に擦り傷やら切り傷やらが垣間見える。彼女もまた、剣士になって早々の大役を見事に果たしたのだ。

「大丈夫ですか？すぐに治癒魔法を……」

「いや、今は大丈夫だ。それよりも……」

ユウマが視線を向けるのは彼の後方。先程二人の剣士が激突した、その丁度真下の位置だ。そこには、変身が解けながらも無銘剣を手にしているバハトの姿があった。

「そんな……あれでもまだ……!?!」

「いや……」

まだ戦いは終わっていないのか、そう思われたが、しかし先程までとは明らかに違う箇所があった。胴体……先程セイバーによって貫かれたその場所は、修復されずにその穴を開け続けている。

「ユウマの想いが、エターナルフェニックスライドブックと覇剣ブレードライバーによって齎されていた不死身の力を阻害しているんだ」

「ユーリさん……」

「バハトはもう、不死身ではない」

ユーリの言葉は正しく的確を得ていた。ユウマのバハトを倒すという想い、そしてその想いを持って使われたエモーショナルドラゴンによって、バハトは不死身の力を失った。理屈ではない、奇跡とも必然

ともいえる人の想いの力で。そして、それが意味することはただ一つ。

「まさかこの俺が……死ぬとはな……」

「バハト……」

「俺の不死身の凌駕する、想いの力か……いいだろう、貴様のその想いに免じて、俺はこの運命を受け入れるとしよう」

そう言うと、バハトは膝をつき、持っていた無銘剣の自身の目の前に突き刺す。

「お前達のこれからの物語を！……見届けてやる」

その言葉を最後に、バハトはその肉体を消滅させていく。まるで光になったかのように、バハトは跡形もなく消え去った。その場に残ったのは、主人を失った無銘剣とエターナルフェニックスのライドブックだけ。

ユーリはそこに歩み寄ると、その二つを手取る。

「500年……長い時間、お前を苦しませてすまなかった……さらばだ、友よ」

……

無の剣士との戦いから、1週間の月日が経った。避難していた街の住民も戻って来て、街の修復作業をしているが、ようやく本来の日常が戻ってきた感じだ。

そんな街の様子をユウマは高台から見守っていた。そこに、箒に乗ったイレイナが飛んでくる。

「探しましたよ、ユウマ」

「イレイナ」

「まだ体の傷も完全に治ってないのに……本当にジツとしませんね」
「ははは……」

ユウマの体の所々には包帯が巻かれている。先の戦いによってついた傷だ。実を言うと、今この街に残っているのはユウマとイレイナの二人だけだ。シーラやサヤ達魔法統括協会の面々は今回の件を報

告に本部へと帰った。サヤは最後の最後まで残ると駄々を捏ねていたが……。フランは王立セレステリアへ。過去に一年間丸々空けていた以上、あまり長い間不在に出来ないらしい。ユーリは無銘剣とエターナルフェニックスのライドブックを持って何処かへ消えた。行き先は分からないが、しかし大丈夫だろう。不思議とそう思える二人は、特に気にはしてなかった。

「この街はもう大丈夫そうだな」

「はい、手伝えることはしました。後はこの街の人々に任せましょう。……ところでユウマ、この後のことですが……」

「分かってる、旅のことだろ」

イレイナが気にしているのは、無論今後の行動……。特に旅に関してだろう。色々あつて後回しになっていたが、ユウマが今後どうするのかは、聞いておかなければならない。

「覚悟を超えた先に、希望はある」

「はい？」

「一度バハトに敗れた後、夢を見たんだ。まあ、あれを夢と表しているのかはちよつと分からないけど……。そこでさ、父さんと戦ったんだ」

「お父さん……。ハヤマさんと？」

「色々あつたけどさ、そう言われたんだ。今回の一件で、イレイナは剣士として戦う覚悟を決めた。だったら、その先に希望があつていいはずなんだ」

「……。それって……!」

「それに、ちゃんと約束は果たさなくちゃだしな!……。出発はいつだ?」

「……それでしたら、明日の早朝には出発することにしましょう。思った以上に長居してしまいましたし」

「了解!」

もはやとやかに言う必要は無い。二人は横に並ぶと、徐々に修復されていく街並みを静かに見守るのだった。

第三十話

薄い霧に包まれる中、しつかりと前に進みながらも決して見失うことのない、俺の横を飛んでいる灰色の髪を靡かせた少女は誰でしょう？

そう、イレイナだ。

なくんて、俺は一体何を言ってるんだか。自由の街クノーツを出て再び旅に出た俺たちは、今現在霧の中を進んでいた。イレイナは箒に乗り、俺はランプドアラランジーナを使って召喚した絨毯に乗ってだ。目指している場所は“願いが叶う街”。組織にいた頃にも聞いたことがない街名だが、ここ最近新しく出来た街なのだろうか？とにかく最近噂で街のことを耳にした俺たちは、早速その街を目指そうということになったのだ。

しかし、まさかここまで霧が出てくるとはな。今はまだ大したことはないが、このまま行けば霧も濃くなっていくだろう。このまま進むのは少々危険かもしれないな。

「イレイナ、どうする?」

「どうするとは?」

「この霧だよ。このまま時間が経てばこの霧も濃くなっていくだろう。このまま進むのか、一旦霧が晴れるまで待つか」

「決まっていますよ、このまま進みます」

そう言いながらイレイナは、先のある一点を示す。あれは……看板か？

「なになに……この先願いが叶う街……ってことは、もうそろそろ着くのか?」

「少しスピードを上げましょう。明確には分かりませんが、おそらくそう遠くはないでしょうから」

「ここで待つよりも、さっさと行ったほうがいい……か。そうだな、そうしよう」

イレイナに合わせて、俺もスピードを上げる。まあ、霧が出ていると言っても道を見失うほどではない。最悪方向感覚だけ失わなけれ

ば……………。

「……………ん？」

何かおかしい。そう感じて横を見てみると、すでにイレイナの姿は無かった。

「イレイナ？」

声をかけてみるが、返事がない。いくら見えなくなったとはいえ、声が届かないほどの距離はないはず。俺が急いで引き返そうと動きを止めたところで、不自然なほど急に霧が晴れた。

「……………何だ、ここは？」

眼下に広がるのは一つの街だ。しかし、その街はどこかおかしく、全てに見覚えがある。それが一つの街の景色なら問題ないのだが、明らかに複数の街がまるで融合しているかのような景色なのだ。今までの旅で立ち寄った王立セレステリア、花の国、人形の国、自由の街などなど……………。その中央には、この場所にはあるはずのないものが建っていた。

「あれは……………ノーザンベース」

組織の拠点の一つ、俺がまだ組織にいた時は幾度となく足を運んだその建物は、周りとは不釣り合いなその景色の中にそれはポツンと建っている。

明らかにおかしい風景、その中で俺は、まるで引きつけられるかのようにノーザンベースへと降り立った。

……………

絨毯をブックに戻し、中に足を踏み入れる。見た感じは俺が知るノーザンベースと何も変わらないようで、かなり懐かしい。

「なんなんだここは……………」

ノーザンベースは本来このような街の中心にあるようなものではない。そもそも俺たちが向かっていたのは願いが叶う街のはず……………。この街は一体……………？

そう思っていると、廊下の先から敵意を感じ、それと同時に勢いの

ある水流が俺に向かって放たれた。俺は火炎剣を取り出し、火炎剣の放つ高温でその水流を一気に蒸発させる。

「誰だ？」

火炎剣を水流が放たれたその場所へと向ける。するとその場所からどこか聞き覚えのある声が発せられる。

「……なるほど、どうやらお前は“闇の俺”ではなく、“炎の俺”のようだな」

「は？」

間のなく姿を見せたそいつの見て、俺は思わず固まってしまった。そいつが持つているのは水の聖剣である。水勢剣流水。だが、その顔はどこからどう見ても俺自身だったからだ。

「……」

「おい、なに固まつてるんだ炎の俺」

「……ああ分かった。これは夢だな、うん」

「いや、残念ながら現実だ」

「一回寝て起きたら夢から覚めてるだろ、んじやおやすみ」

「待って待って現実だって言ってるんだろ起きろ炎の俺、現実逃避してんじゃない」

「うるせえ目の前の自分がいるんだぞ、これを夢と言わずになんと言うんだ!!」

「現実だよ!!」

「大体何でお前はそんな冷静なんだよ!」

「お前が7人目だからだよ!!」

「……ちよつと待って今なんて言った？」

「お前が7人目」

「聞き間違いじゃ無かった……」

何?どゆこと?俺とこいつ以外にもあと5人は俺がいるの?ダメだ意味分からん。こんなの現実逃避せずにどうしろと?

「まあお前の気持ちも分かるさ。何せ俺も同じ気持ちだったからな」

「……んで、残りの5人はどこにいるんだ?えくと……水の俺、でいいのかな?」

「なんだ、飲み込みはいいな。ついてこい」

なんとなくだったのが、どうやら目の前の俺が水の俺なのは合っていたらしい。まあ、こいつ曰く俺が炎の俺らしいし……だとしたら、残りの5人の俺も、大体予想がつく。

「一つ言っておこう。これから案内する場所にいるのは4人の俺だ」

「4人? ……残り一人は?」

「それについては、着いてから話す」

後で……か。なんか嫌な予感がするんだよなあ……。

とにかく着いていくこと数分、水の俺は大体予想通りの場所に俺を案内した。ノーザンベースの中枢、そこに残りの俺はいた。

「おい、もう一人俺を連れてきたぞ」

「やっぱりまだいたのか」

「それで、こいつは何の俺だ?」

「これは……火炎剣の声が聞こえる」

「火炎剣? んじゃ炎の俺ってことか」

「……どれがどの俺だよ」

ヤベエ頭痛くなってきた。何だこの状況は……。

「とりあえず、現状を確認しよう。知つての通り、俺は水の俺、水勢剣流水の使い手だ」

「俺は雷の俺、雷鳴剣黄雷の使い手だよ」

「俺は見ての通り、土の俺だ! こいつが俺の聖剣、土豪剣激土!!」

「次は俺だな! 俺は風の俺! 風双剣翠風を振るう者だ!」

「音の俺……こいつが俺の音銃剣鈴音……」

「……じゃあ一応俺も。俺は炎の俺で、こいつが火炎剣烈火だ」

それぞれの俺が自分の聖剣を出しながら自己紹介をする。……

これ聖剣がないとどれがどの俺かさっぱり分からねえな。

「とりあえず全員、自分の聖剣は見えるようにしようぜ。じゃないとどの俺なのか分からなくなる」

「同感だ」

「確かにそれもそうだな」

その言葉と同時に、俺と水の俺、雷の俺の3人は聖剣ソードライ

バーを腰につけ、そこに聖剣を納刀する。これならずと持っている必要がないからな。残りの土の俺と風の俺、あと音の俺か、その3人は各々好きなように聖剣を持っている。

「区別できるようにしたのはいいが、問題はそこじゃないだろ。『闇の俺』をどうするかだ」

「闇の俺？」

「残り一人の俺だ。奴はどう言うわけだか、俺たちの聖剣を狙っている」

「最初に会った時には容赦無く襲ってきたもんなあ。ま、余裕で追い返したけど」

「嘘つけ、俺が駆けつけたからだろ!!」

「どっちでもいい・・・そんなことよりも奴の目的は何なのかだ」

「確かに、何で俺たちの聖剣を狙うんだろうな」

「闇の俺ってことは・・・そいつの持っている聖剣は闇の聖剣、闇黒剣月闇ってことではないんだよな？」

「ああ、あいつの持っていた聖剣は、間違いない闇黒剣だった」

なるほど・・・そいつが闇黒剣を持っていて、そして俺たちの聖剣を狙っているってことは・・・多分そう言うことだろうな。

「多分だけど、そいつの目的も何となく想像できるぞ」

「何？」

「本当か！」

「それで、奴の目的は・・・」

「ああ、それは・・・」

俺の推測ではあるが、闇の俺の目的を話そうとした時、壁の一部が吹き飛ぶ。その衝撃から何とか身を守り、中には自分の聖剣で飛んできた瓦礫を叩き潰したりしているのが見える。

「おい、いきなりなんだ!!」

「これは・・・闇黒剣の声だ！」

「っーことは・・・」

「やはりここに隠れてたか・・・」

やがて土煙の中から姿を見せたのは、闇黒剣を携えた俺、話に聞く

闇の俺なのだろう。外見等は俺や他の俺と一切変わらないが、唯一違うのはその目だ。まるで生気を感じられない。

「貴様らが何なのか知らないが……さつさと目的は果たさせてもらう」

『ジャアアクドラゴン』

「変身」

『ジャアアクドラゴン〜!』

『月闇翻訳!光を奪いし漆黒の剣が、冷酷無情に暗黒竜を支配する!』

早速と言わんばかりにその身を装甲に包み込む闇の俺。まさかまた闇の剣士を相手にすることになるとは……。

「闇の剣士、カリバー……」

「俺たちも行くぞ!!」

「何でお前が命令すんだよ!」

「そんなことはどうでもいい!」

『ライオン戦記』

『ランプドアランジーナ』

『玄武神話』

『猿飛忍者伝』

『ヘンゼルナッツとグレーテル』

『ブレイブドラゴン』

それぞれのドライバーや聖剣にブックを装填し、俺と水の俺、あと雷の俺は納刀した聖剣を引き抜く。

『烈火抜刀!』

『流水抜刀!』

『黄雷抜刀!』

『一刀両断!』

『双刀分断!』

『銃剣撃弾!』

「「「変身!!」」」

それぞれの剣士の姿へと変身した俺たちは、聖剣を構え一斉に動き出した。今ここに、計7人の剣士がぶつかり合う。

第三十一話

それぞれの剣士の姿へとその身を変えた俺たちは、一斉に闇の俺……カリバーに向かって駆け出す。

「最初は俺だ!!」

先に駆け出したのは風の俺が変身した剣斬。我先にと前に出たそいつは二刀に分断した風双剣でカリバーに斬りかかる。

「おらおらおら!!」

上から、横から、斜めに。うむを言わさぬ勢いを全く殺すことなく続ける剣斬だが、肝心のカリバーはまるで意に返さぬように闇黒剣で受け止めつつ剣斬を蹴り飛ばす。

「おい、大丈夫か!」

「いって……あ、俺の風双剣!!」

蹴り飛ばされた際に手を離してしまったのだろう。カリバーのすぐ近くに二つに分けた風双剣の片方が転がっている。

「まずは一本……」

「まずい!」

『銃奏!』

背後から放たれる一撃が、カリバーが掴もうとしていた風双剣の片割れを弾き飛ばす。予想外の事態なのか咄嗟に動きを止めるカリバーに、俺は斬りかかる。

「おい! 何俺の風双剣を撃ってんだよ!!」

「いや、危ないところだった!! こいつの目的は、俺たちの聖剣の封印だ!!」

「は!?!」

「っ!!」

「うおっ!」

斬りかかったはいいが大した攻撃もできず、振り回される闇黒剣を受け止めつつ風双剣をなんとか回収、そこで放たれたカリバーの一撃をモロに受けてしまう。

「いっつ……ほら、風の俺」

「おお、サンキュー炎の俺!!」

「おい、あいつの目的が俺たちの聖剣の封印ってどういうことだ!？」

「そもそも、そんなことが可能なのか？」

「闇黒剣であれば、可能だ」

おそらく、他の俺は俺自身とは違い、闇黒剣に触れることすらなかったのだろう。闇黒剣の聖剣を封印する能力は、基本的に闇の剣士になった人物しか気づくこともないだろうし。

「とにかく、奴の目的が分かったんなら後は単純だ。聖剣を奪われずにぶっ潰す!!それだけだ!!」

「単純すぎだろ……」

「了解!」

「納得した!？」

土の俺ことバスターと水の俺ことブレイズが向かっていく。先にバスターが突っ込み、振り翳した土豪剣を受け止められたところをバスターの背中を足場に宙に舞い上がったブレイズが斬り刻んでいく。扱う剣技がお互いの知るそれと同じだからなのか、はたまた聖剣は違えど自分自身だからなのか、初めての共闘のはずだが互いを知り尽くしてるかの如く連携を凶っているブレイズとバスター。しかし、こちらの動きが分かるのは何も俺たちだけではない。

「その程度……!」

『必殺リード!ジャアク西遊ジャー!』

「んな!？」

「あ、ちよつと!!」

伸びた闇黒剣の刀身がバスターを無視してブレイズを貫く。いや、今注目するべきはそれよりも……。

「おい、あのブックはセイバー、お前のじゃないのか？」

「ああ……西遊ジャーニー、俺も同じブックを持っている」

おそらく奴が使ったブックは、奴の世界の炎の剣士が使っていたものだろう。同じブックは一つの世界に二つもないからな。

「奴が他にどれほどのブックを持っているかは分からない。これは一筋縄ではいかないぞ」

「らしいな……おい、お前はワンダーコンボは使えるか？」

「ワンダーコンボ？ああ、使えるが」

「よし……なら三人でいくぞ」

「……ああ、なるほど。分かった」

雷の俺ことエスパードはカリバーの攻撃を受けたブレイズの元へ駆けつけると、俺に伝えたのと同様のことを伝える。その作戦にブレイズも乗っかるらしい、俺たちはすぐさま横に並び、それぞれのブツクを取り出す。

『ストームイーグル！西遊ジャーニー！』

『天空のペガサス！ピーターファンタジスタ！』

『トライケルベロス！ニードルヘッジホッグ！』

「いくぞ、二人とも！」

「ええ!!」

「ああ」

『くゝリムゾンドラゴゝン！』

『ファンタステイックライオンゝ！』

『ゴールデンアランジゝナゝ！』

雷、水、そして炎。三人のワンダーコンボが並び立つ。まさかこんな日が来るなんて、思いもなかったな。

「はあ！」

「はっ！」

「ふっ！」

俺が放つ炎の斬撃、ブレイズの水の斬撃、エスパードの雷の斬撃がそれぞれカリバーに向かっていく。それ自体は意図も容易く弾かれるが、それを目眩しにそれぞれの聖剣の力を引き出し、向かっていく。

三人の剣士による同時斬撃。一人を受け止めてもその間に他の二人が攻撃し、のけぞったところに飛び蹴りを加える。

「ぐう!？」

そのまま続くようにブレイズ、エスパードも水と雷を纏った飛び蹴りをしてカリバーを吹き飛ばした。

「なあ……あんたはどうして、聖剣を封印しようとするんだ？」

「っ……何？」

「お前は俺だ。何も理由なく、聖剣を封印しようとしてるんじゃない……誰かを、大切な人を、守りたいんじゃないのか？」

「これはただの憶測にすぎない……だが、かなりの高確率で当たっているはずだ。」

「何が、言いたい……!？」

『必殺リード！ジャアクペガサス！習得一閃!!』

「危ない!!」

『天空のペガサス！習得一閃!』

カリバーの放つ一撃を、同じブックを用いたブレイズが相殺する。

「ぬうう!!」

『必殺リード！必殺リード！ジャアクヘッジホッグ！習得二閃!』

「はあ！」

『ニードルヘッジホッグ！習得二閃!』

放たれた棘状のエネルギーが、衝突し合う。

「俺も以前まで、お前と同じことをしていた。あいつを……イレイナを救うために、聖剣を封印していた。そうすることでイレイナを救えると思っていたから」

「っ……!」

「けど、それだけじゃ駄目だったんだ……。俺のやり方や、イレイナを悲しませるだけだった……。だから俺は決めた！俺一人じゃない、仲間と共に、イレイナと共に戦う！あいつが笑う未来に向かって!!」

「……ぬうあああああ!!」

雄叫びを上げながら走り出すカリバー。俺は火炎剣を納刀し、それを迎え撃つ。

『必殺読破！烈火抜刀!』

「爆炎……紅蓮斬!!」

『ドラゴン！イーグル！西遊ジャー！三冊斬り！ファ・ファ・ファ・ファイヤー!』

刀身に纏う炎。俺も駆け出し、カリバーの振り下ろした斬撃を受け

止め、押し返す。そして火炎剣をカリバーに向け――。

.....

「なあ.....お前は どうして、その選択が取れたんだ？」

「え？」

カリバーこと闇の俺は地面に寝そべったまま、隣に座り込む俺に語りかけてきた。他の俺はまだ警戒しているが、その必要はもうないだろう。

「あの未来を見て.....俺は組織の本性を知った。誰も信じることは出来ない。ならば俺一人でも、イレイナを救う。救うためには、全ての聖剣を封印する必要がある。俺が犠牲になっても、イレイナを守る事ができる唯一の未来」

「ああ.....そうだな」

「だがお前は、その未来の可能性を捨てた。何故だ？何故その選択を取る事が出来た？」

こいつが見た未来、それは俺も見た未来だ。どんな可能性を取ったとしても、イレイナと共に世界が滅びる未来。そんな中で見た唯一の希望を求めて、俺は聖剣封印に動いた。だけど.....

「闇黒剣が見せる未来が、全てでは無い。まだ俺たちが知らない可能性の未来が存在している、そう分かったら、お前は どうする？」

「何？」

「イレイナは俺に知らない未来を見せてくれた。闇黒剣が見せなかった可能性を。俺はそれに賭けることにした。例えそれが修羅の道になろうとも、俺は俺も、イレイナも両方笑える未来を掴む.....ただ、それだけだ」

闇の俺の表情が変わる。先ほどまで何処か陰のかかった顔だったが、どこか晴々しい。俺は立ち上がると、手を差し伸ばす。

「お前は どうするんだ？」

「俺は……」

闇の俺は差し出された手を掴み、勢いのまま立ち上がる。あまりにも小さい声で何を言っているのか聞き取れなかったが、その口は確かに動いていた。

「全く、途中から置いてけぼりだよ。イレイナがどーたら組織がどーたら、詳しく教える!!」

「あいつが関わってくるのなら、俺も他人事ではないからな」

「ああ、あいつの笑顔を守ることは、ここにいる全員が同じことを思っているはずだ!」

「イレイナが危険な目に遭うとか、マジでないからな!!」

「俺たち自身、その話は聞かないわけにはいかない」

「お前ら……」

やっぱり、こいつらは俺だ。例え別の世界の人間でも、同じ思いを秘めている。

「……分かった、しっかりと聞いてくれ。俺たちが見た未来を——————」

……

何も無い草原で目を覚ます。目の前には青空が広がっている。

「あれは……夢、だったのか……?」

体を起こしながら、先の光景を思い返す。妙に現実染みた夢だった。いや、まあ他の世界の俺とか、夢以外ありえねえよな。

「つたく、変な夢だったなあ……ん?」

ふと目を落とすと、俺の横ではイレイナが横たわっていた。一瞬焦ったが、寝息が聞こえて安心する。

「気持ちよさそうに寝てやがる……つたく」

ここまで気持ちよさそうだと、起こすのも申し訳なくなってくる。俺は再び体を倒し、寝ている彼女を見る。

「……………絶対に守ってみせるさ。なあ、みんな」

……………

一人の少女が草原の上を飛んでいる。まるで彼の少女を思わせるような髪を持つ少女だが、彼女との違いはその髪の短さ。眠れていないのか、その目元には隈が出来てしまっている。誰も寄せ付けないような雰囲気を纏う彼女だが、そこに声を賭ける者が一人。

その者の手には闇黒剣が。声をかけてきた人物の顔を見た少女は、とても懐かしい人物を見たような表情を浮かべ、その声に応えるように、彼の名前を呼んだ。

彼らとは違う、ありえた可能性の世界。二人の物語の終結は、誰も知らない。

第三十二話

「————懐かしい匂いだ。

いつ、どこで知ったのかは分からない。だがこの風を中心に様々な魔力が入り混じった親しみを感じる懐かしい匂いを、俺は知っている。

「……面白い、そいつと居たらいつか分かるかもな。

「——————俺という存在の意味を。」

「……………」

「ふ〜ふつふふ〜ふつふふ〜♪」

任務のために街を出て、森の上空を箒で飛ぶ可愛い少女は誰でしょう？そう、僕です!!

「……な〜んて、ちよつとイレイナさんの真似をしてみましたけど、僕が誰なのか分かってますよね？炭の魔女のサヤですよ〜!」

さつきも言いましたが、今僕は師匠から頼まれた依頼を解決するために、一人で森を飛んでいる最中です。

それにしても……ここ最近イレイナさんに会えないな。僕も教会の仕事で忙しいし、イレイナさんもユウマさんと一緒に何処かで旅をしているとは思いますが……今は何処にいるんだろうな〜。

そんなことを考えながら飛び続けましたが、この森随分と大きいですね。入って大分経ったと思うんですが、一向に出れる気配はありません。

「あつれ〜……道間違えたりしてないよね〜……………」

「ええ、間違えてないわよ」

「あ、そうですか!それはご親切にどうも!……誰?」

なんか自然と話しかけられたから何も気にせず返事をしちゃいま

したけど、この人誰ですか？なんでこんな所にいるのでしょうか？

「あなたは炭の魔女サヤ……で、間違いないわよね？」

「ええそうですね……あなたは誰ですか？なんでこんな所にいるんですか？」

「どうせすぐに分かるわよ、すぐに……ね」

『猿飛忍者伝』

「変身」

『風双剣翠風！』

その人は目の前で緑色の聖剣とブツクを使い、剣士としての姿になりました。この人……組織側の剣士……!!

「っ!!」

「逃がさないわよ」

とてもじゃないけど叶うような相手じゃない。ここは逃げるが勝ちとばかりに旋回しましたが、急な強風によってバランスを崩してしまい、私は箒から落ちてしまいました。

「わっ!?!」

「あなたを餌に、炎の剣士と灰の魔女を呼び寄せる……それがマスターからの指示だね。大して面白くもない任務だし、さっさと捕まってもらおうわよ」

「いや僕を使ってもあの二人が来るとは限りませんよ!」

「来るわよ、必ず」

何の確信があるのか、はつきりとその剣士はそう言った。いや、確かに来てくれたら嬉しいですけど、どこにいるのかも分からないのに来てくれるとは限らないんじゃない……って、そんなこと考えてる場合じゃなかった!!

「すいませんけど、大人しく捕まるつもりはありませんよ!」

僕が放つのは、僕が最も得意とする風の魔法。イレイナさんが初めて教えてくれた魔法で、今となっては僕自身もとても使いやすい。

「っ!……まさか、この私に対して風魔法を使ってくるなんてね……」

あつれ、もしかして悪手だった?……あ、もしかしてこの人って風の剣士ですかね?僕剣士ってイレイナさんとユウマさん、あとは

んよ!!

.....

け、結局、まるまる一夜使つての追いかけてっこになつてしまつた.....!おかげで僕は疲労が溜まり、今すぐに休みたいぐらいですよ。できればフカフカのベットにダイブしたい.....!

でも一応任務の最中ですし.....それに.....

「見つけた」

「わぎやく!」

デザストはしつこいですし!!逃げてでも隠れても全く意味がないんですけど、一体どうすればいいんですか!?

「心配しなくても、もうお前とは戦わねえよ」

「え?」

「お前との追いかけてっこは思った以上に楽しめたからな!いい退屈凌ぎになったのさ!!」

「え、退屈凌ぎ?えなんですか僕はあなたの退屈凌ぎのためだけに追いかけて回されていたんですか!」

「ははは!.....楽しかったぜ、ありがとよ」

「あ」

ちよつとした風が吹き、少しだけ目を閉じたその一瞬の内にデザストはどこかに消えてしまいました.....本当に一体、何だったのですか?

「.....つて、やばいやばい!!早く依頼をこなさないと!!」

なんか妙な1日だったなと思ひ返しながら、僕は任務のために急ぎ森から出たのでした。

「.....またいつか、遊ぼうぜ」

第三十三話

ある街へとつながる道。そこに、人間大サイズの穴が空いた。その中から出てきたのは二人、片方は手に闇黒剣を携えた青年で、もう片方は灰色の髪を靡かせた一人の少女。無論、ユウマとイレイナの二人である。

「ふう……」

「着きましたね」

彼らは今回、ある目的のためにここへとやって来た。この道を進んだ先にある街、それが今回の目的地である。

「ここに来たのは久しぶりですが、あまり変わったはいないようです」「そうだな」

「……ああ、そういえばユウマも、一度行ったことがあるんですけどね」「だから、ここに来たんだ」

二人の先にあるのは、外と街とを隔てる巨大な壁。この道を真っ直ぐ行けば、あの街に入るための門がある。

「……」

「心配ですか？」

「……ああ」

「きつと大丈夫ですよ、フラン先生も、私もいます。いざとなったら、一緒に謝ってあげますよ」

「……そうならないことを祈るよ」

そして、二人は歩き出す。そのすぐ脇に置いてある看板には、この先にある街名が書かれていた。

“ 王立セレステリア ”。かつてイレイナが恩師と再会し、そしてユウマが襲った街だ。

……

「待ちくたびれましたよ、二人とも」

「フラン先生！」

何も問題が起こることなく無事にセレステリアへと入国を果たした二人を、この街の魔法学校で教師をしているフランが出迎える。今日訪ねること自体は事前にフランに伝えてはいたが、まさか出迎えるとは思っていなかった二人は驚く。

「どうして？」

「せっかく二人が来るんです。出迎えるべきでしょう」

「いや、そうはならないんじゃない？」

「それに、魔法学校に入るのにも、私と一緒にの方が色々都合がいいでしょうし」

「ああ……」

その言葉に、イレイナは前にここを訪れた時のことを思い返す。最初は無断で学校の敷地内に入ろうとしていたが、残念ながら門番に停められた記憶がある。それを考えれば、確かに、教師をしているフランと一緒に行動した方が色々早そうだ。

「では、早速行きましょう」

「ほら、行きますよユウマ」

「分かってるから……だから引つ張らないでくれ」

イレイナによって無理矢理にでも連れていかれる……いや、この場合は連行と言った方が正しいかもしれない。ユウマは重く感じるその足をなんとか動かすのだった。

……

周知の事実だろうが、ユウマはそう遠くない過去に一度この街を……より正確に言うならば、フランと彼女の教え子を襲っている。あの時は事情が事情だったとはいえ、その行いはそう簡単に許されるものではないだろう。それを頭ではちゃんと理解しているユウマは、こうして再びこの街を訪れることにしたのだ。

とはいえ、どうなるのかは分からない。イレイナは生徒たちに好まれているとは聞いてはいるが、自分は決してそうではないだろう。確かに許されることではないし、決して許されなくてもいい。しかし、それによって自分に対する思いがイレイナにまで及んでしまったら・・・と考えると、ユウマはどうしてもその足を重くしてしまう。「すでに生徒たちにも、今日お二人が来ることは伝えてあります」フランと一緒に居てくれたおかげで簡単に敷地内に入ることが出来た。そのまま生徒たちが集まっているという教室に向かう最中、フランがそんなことを言い出した。

「あの時の生徒は、全員・・・？」

「ええ、今では全員普通の生活に戻っていますよ。あくまでも一時的なものだったので」

「そうですか・・・」

あの時魔力を奪った結果、交戦していた相手全員が一時的な意識障害に陥った。もちろん命に関わるようなものではないし、魔力が回復すれば今まで通りの生活に戻る。とはいえ、やはりそれをやった張本人として思うところがあるわけで。

「ああ・・・やばい、どんどん行きたくなくなる・・・」

「往生際が悪いですよ、いい加減諦めてください」

「ふふふ、心配しなくても、貴方が想像しているようなことにはならないと思いますよ」

「え？」

「さあ、着きました」

そんなことを話している間にどうやら着いたらしい。フランは目の前の扉を開けようと手をかけている。というかもうちよつとだけ開いている。

「ああちよつとまだ心が・・・」

「皆さん、静かにしてください。待ち人を連れて来ましたよ」

「動きが速い・・・!!」

止める間も無く開かれる扉。フランは中に入り、中に居るであろう生徒達に声をかける。

「ほらユウマ、さっさと入ってください」

「・・・はああ」

ここまで来たら、もう覚悟を決めるしかないだろう。ユウマを意を決して室内へと足を踏み入れる。

それと同時に感じる視線。部屋中の視線が自分に集中しているのが、見渡さなくても分かる。後からイレイナもついて来てる筈だが、自分を見ているであろう視線の数は減る様子がない。

教室中を見渡す。あの時の生徒全員を覚えているわけではないが、所々見覚えのある人物がいる。人数的にも、あの時あの場にいた生徒全員がいるのは確かなことだろう。

「事前に話しはしましたが、改めて紹介しましょう。私の弟子である灰の魔女・イレイナと、その幼馴染である炎の剣士ことユウマです」
「皆さん、お久しぶりです」

フランの紹介の後、イレイナは一礼するが、その後肘でユウマを突く。

「ほら、ユウマ！」

「分かってる・・・あく、今フランさんから紹介された通り、今代の炎の剣士のユウマだ。皆と会うのはこれで二度目なんだが・・・」
最初に言わなければならぬことがある。――「ああ、あの時、君達を襲ったこと、本当にすまなかった。許してほしいわけではない。ただ、どうしても謝りたかった」

ユウマのその言葉と共に、頭を深く下げる。罵声がいつ飛んできて、何もおかしくない。それも甘んじて受けるつもりだ。しかし、そんなユウマの考えとは裏腹に、罵声は一向に飛んでこない。かけられた声は、むしろその逆であった。

「顔を上げてください、ユウマさん。事情はもうフラン先生から聞きましたから」

「別に俺たちは、ユウマさんのことを責めるつもりなんて一切無いですよ。というか、むしろカッケエと思いました!!」

「・・・えっ？」

思わず下げていた顔を上げてしまう。それほどまでに、かけられた

言葉はユウマの思っていた内容とはかけ離れていたのだ。

「だって大切な人を守るためにたった一人で戦ってたんでしよう？それを知ったら、もうスゲエとしか思えないっすよ!!」

「こいつ、フラン先生の話を聞いてからもうそればっか言ってるんですよ?」

「うるせえ、お前もだろ!」

「あつ馬鹿それは言うな!」

教室中から込み上げてくる笑い声。それは決してその場凌ぎの笑いではなく、心の底から込み上げてきたような笑いだった。

「だから言ったでしょう?心配ないって」

「良かったですね、ユウマ」

「—————ああ」

こうして、ユウマは無事に生徒達との和解を果たしたのだった。

「さて、折角ですしユウマには剣士のことを色々と教えてもらいましょうか!何か質問がある人はいますか?」

「え?」

「ちよつ、フランさん?そんな話は全く聞いてないのですが……」

「あら?まさか断るなんてこと、ないですよね?」

「……はい」

フランさんが一番許してくれてない。心の中で密かにそう思うユウマであった。

第三十四話

王立セレステリア内に存在する、魔法学校。その中庭にて、二人の剣士が相對していた。

片や火炎劍烈火を携えたセイバー。片や雷鳴劍黄雷を携えたエスパード。お互い聖劍を構えると、それぞれの聖劍を交差させる。

さて、何故このようなことになったのか。話は数十分前に遡る。

.....

フランの突然の提案により、急遽始まったユウマへの剣士に関する質問時間。皆、それぞれが気になったことを口にしていく。剣士にはどうやってなれるのか、剣士が使っている本は何なのか、どんな聖劍があるのか、.....などなど。魔法学校に通ってる以上、普段剣士に関することは少ないため、この機会に色々聞いておこうと思ってるらしい。

「さて、どんな聖劍があるかだったな.....これに関しては直接聖劍を見せたほうが早いだろう」

そういうと、ユウマは火炎劍と闇黒劍を取り出し、それぞれを教卓の上に置いた。それに合わせ、自分の席に座っていた生徒達は間近で見ようと席を立つ。

「え〜と、こっちが炎の聖劍・火炎劍烈火だ。その名の通り、メインの能力としては火だな。聖劍そのものに火を纏わせることも可能だ。それでこっちが、闇の聖劍・闇黒劍暗闇だ。聖劍の中でも特別な2本の内の1本だな。能力としては空間を切り裂いたり、災いの未来を見たり.....といったところか」

「その能力によって未来を見たユウマは、他の剣士と戦ったんですね?」

「.....ああ、まあ、他の剣士とは言っても結局三人だけだな」

雷の剣士・エスパードに土の剣士・バスター.....そして無の剣士・ファルシオン。なんだかんだ言いつつ直接戦ったのはこの三人だ

けであり、聖剣を封印できたのも前者二人分だけである。あまり目的を達することは出来なかったも同然だ。

「そもそも、聖剣に宿っている意思が封印を跳ね除けることもある。雷鳴剣のようにな」

その言葉と共に雷鳴剣を取り出したのは、ユウマではなくイレイナ。生徒達はどうしてイレイナさんが？といった表情を浮かべる。

「封印できたとしても、雷鳴剣が自らイレイナを選んだことで封印が解けたことを考慮すれば、結局無駄な行動だったのかもな」

「いえ、決して無駄ではありませんよ。ユウマが雷鳴剣を一度封印していたから、今は私の元にあるんです。おかげで、ユウマ一人に戦わせなくていいんです」

「イレイナ……」

思わぬところで聞けたイレイナの想い。その想いに、どうにも嬉しくなってしまうユウマは、口元を緩ませてしまう。

「……あゝ、すいませんが生徒達の前でイチャつかないでもらっていないですか？」

「べ、別にイチャついてなんていません!!」

「はいはいそうですか、そういえばイレイナはどのくらい雷鳴剣を使えるようになったんですか？」

「本当に分かってます？……あまりあの時から変わってませんよ。せいぜい本が二冊使えるようになったぐらいで……」

「ワンダーコンボは最初の頃はかなり体力を持っていかれるからな。まだ使用は控えた方がいい」

と、完全に生徒置いてけぼりの話を展開していたところ、生徒の一人が恐る恐るといった様子で手を挙げた。

「ん？何が聞きたいんだ？」

「あ、あの……イレイナさんが剣士になった、んですよね……？魔法でも、剣士になれるんですか……？」

「ああ、今までは前例が無かったが、今回イレイナが雷の剣士になったことから、不可能ではないだろう」

「それじゃあ俺たちも剣士になれたり？」

「その未来も全くあり得ないとは言えないな。とはいえ、そう簡単なことではないからな・・・あまり重要視しない方がいい。あくまでも“なれる可能性”がある程度に捉えておいてくれ」

ほうほうと、それぞれメモをしたり頷いたりしている生徒達。さらにもう一つ、質問が飛んでくる。

「剣士として、普段はどんな特訓をしているんですか？」

この質問が始まりだった。剣士としての特訓、それはユウマとしても言葉で説明するよりも実際に見せた方が早い。ユウマはイレイナと視線を合わせる。すぐさまユウマを意図を読み取ったイレイナ、あからさまに嫌な顔をする。しかし、その二人のやり取りの意味を瞬時に理解した人物がもう一人・・・フランだ。

「それじゃあ皆さん、外に出ましようか！折角ですし、二人に実演してもらいましよう！」

「フラン先生!？」

普段ならすぐに断っていただろう。しかし、フランの言葉を聞いて生徒達のテンションは爆上がり、どうにも断れる雰囲気ではなくなってしまった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

と、言うわけで場面は冒頭に戻る。中庭へと場所を移した生徒達は剣士としての姿に変身した二人を囲むように見守っている。

「いいですか？これはあくまでも特訓を見せるのが目的です。あまり大きな怪我はないようお願いしますよ」

「そう思うなら最初に止めてください・・・なんであんな乗り気だったんですか・・・」

「まあまあイレイナ、どちらにせよ近いうちにやるつもりだったんだ。それが少し早まっただけのこと・・・何をそんなに嫌がってるんだ？」

「・・・剣士としては格段に劣るからです・・・」

「え？」

「ユウマに剣士として負けるのは仕方ありません、しかし、それを誰かに見られたくはないんです」

「あ……うん……そっか」

「何か？」

「いや、何でも……とりあえず、始めるぞ？」

「ええ、ええ！いつでもどうぞ!!」

何が何やら、だいぶグダグダで始まってしまった特訓だったが、それでも決して手を抜こうとしない二人。イレイナ変身するエスパードは自身の身を雷に乗せ光速を再現しているが、ユウマ変身するセイバーはすれ違う瞬間には火炎剣で去なす。すぐに後ろに振り返り、背後にいるエスパードに向けて駆け出そうとするセイバーだが、その足が動かないことに気づく。

「なっ……魔法!？」

「ええ、私は魔女ですので」

いつの間にかエスパードの手に握られているのはイレイナの魔法の杖。それをセイバーの足元に向けている。

『へっジホッグ!習得一閃!』

動けなくしたのをいいことに、一点集中の針状エネルギーを幾度も放つ。足を動かすことが出来ないセイバーはそれを火炎剣で叩き斬っていくしかない。

「二応これ剣士の特訓なんだけど……しようがない!」

『ジャツ君と土豆の木』

『烈火抜刀!二冊の本を重ねし時、聖なる剣に力が宿る!ワンダーライダー!』

『ドラゴン!ジャツ君と土豆の木!二つの属性を備えし刃が、研ぎ澄まされる!』

同系色ではなく、異なる色のブック二冊を使用したセイバー。左腕から伸びる蔦から、豆状エネルギーの弾丸を放出する。

「俺が遠距離攻撃が出来ないと思ったら、それは間違いだぞ!」

「どうやらそのようです、ね!」

セイバーに雷を叩き落とすエスパード。しかし、直撃したはずのセ

イバーは何事も無かったのように立っている。

「危なかった……土に根を張るのがもう少し遅かったら、やばかったな」

ジャツ君と土豆の木には、その能力で地面に根を張ることが出来る。本来は自身の体を固定するために使用する能力だが、今回はそれで落とされた雷を地面に逃すことに成功する。

「ふっ！はっ！」

「あ、ちよっ……!!」

イレイナは聖剣の能力は把握していても、全てのブックの能力までは把握していない。完全にその能力に勘付かれる前に、蔦でエスパードを手繰り寄せる。自分から近づけないなら、向こうから近づいてもらうまで。空中で蔦を離し、火炎剣を納刀する。

対するエスパードだが、こちらも負けない。何とか空中で体勢を整え、雷鳴剣を納刀する。

『必殺読破！』

『必殺読破！』

二本の聖剣に、それぞれのエネルギーが宿っていく。一気に引き抜かれたそれらは流れのままに交差する――

「そこまで!!」

直前で止められる。唐突の出来事にセイバーはともかくエスパードはバランスが取れず、そのまま地面に落ちてしまう。

「大丈夫か、イレイナ？」

「え、ええ……」

「二人とも、少しやり過ぎです。雷落としたり、弾丸放つたり……おかげで中庭の印象が大分変わってしまいました」

そう言われてようやく気づく二人。セイバーの足元は黒焦げになっていたり、校舎の壁には所々穴が空いていたりする。慌ててイレイナはそれらを修復していく。

「ちよっと……やりすぎたか……？」

「かもしれませぬね」

変身を解除しながら呟く二人だが、フランに諫められる。

「かもではありません。あなた達はもう少し周りを気にして下さい」

「はくい……」

兎にも角にも、気づけば時刻は夕方。一日の授業が終了する時間だ。フランは生徒達にレポートを言い渡し、解散させるが、生徒達は先ほどの剣士の戦闘の衝撃が抜けないのか、どこか興奮が抜けていない。中には魔法で剣を作っている人物まで出て来る。

「あなた達、やめなさい」

それはすぐさまフランによって破壊される。魔女であるイレイナならともかく、まだ魔法をそこまで扱えない生徒達ではフランの魔法には敵わない。見るからにテンションが下がっていく生徒達を見送りながら、フランは箒を取り出す。

「さて二人とも、まだ時間はありますよね？」

「どこか行くんですか？」

「イレイナは知っているあの場所ですよ」

……

言われるがまま、フランに着いてきたユウマとイレイナは、街の一角に降り立つ。そこは、以前イレイナがこの街を訪れた際にも連れて来られた場所。この街を一望することが可能な、美しい景色を見ることが出来るあの場所だ。

「以前イレイナには見せましたが、ユウマには見せられなかったですからね。今度はと思っていたのですよ」

「ユウマも、こういうった景色は好きでしょう？」

「……ああ」

「おや、あまり喜びませぬね」

「ああいや、喜んでないわけじゃないんです。実際、この場所から見るこの景色はとても綺麗だ。……だからこそ、闇黒剣の滅びの未来を思い出してしまおう」

闇黒剣が見せた滅びの未来は、世界の崩壊。今日触れ合った生徒達も、この美しい景色も、そして今隣にいる人達も、その全てが例外なく滅んでしまう未来。

「こんな景色を見るたび、思ってしまった……絶対に滅ぼさせやしないって……」

「ユウマ……」

「……でも、きっと大丈夫だ。もう俺は一人じゃない、共に戦う仲間が……レイナがいるんだから」

「ふふ……ええ、私も一緒です。だから大丈夫ですよ、きっと」

景色を見ながら、言葉を交わす二人。そんな二人を見ながら、フランは安心したように胸を撫で下ろす。

「どうやら、もう大丈夫みたいです」

「え？」

「少し心配してたんですよ。先日和解はしていましたが、以前のような関係には戻れないのではないかと……ですが、今日一日見て、安心しました。まるであの頃のような光景を見れましたし」

「フラン先生……」

「本当に、懐かしい……まるであの二人のようで……」

フランの脳裏に浮かぶのは、今は過ぎ去ってしまった時間。彼女が仲間と共に築いた、旅の物語。

「……さて！二人とも、この後はどうするんですか？」

「そうですねえ……今から街を出ても野宿が必須になってしまいますし、一晩泊まっていきます」

「出発は……明日の朝かな？」

「そうですね……それではまた、送迎しなければいけませんね」

「無理にしなくてもいいんですよ？」

「無理なんてしていません！……送迎ぐらいさせて下さい、師匠からの、ちょっとした贈り物です」

一晩の後、ユウマとレイナはこの街を後にした。赤と黄、二種類の花びらと声援をその身に受けて。

第三十五話

なぜ、こうなってしまったのか。

今俺の頭の中にあるのはただこの一つに尽きる。全くもって想定していなかった、俺の知らない未来。それが今、目の前で広がっている。

「……………」

チラリと横を見る。今は静かに眠っているが、そこにいるのは一人の女の子。世間的に見れば兄妹と思われるかもしれないが、あいにくそのような関係ではない。

「ううう……………わんだー……………すとー……………り……………」

「まさか……………あいつが魔法を失敗するとか……………珍しいこともあるんだな」

すうすうと寝息を立てている彼女の……………イレイナの頭を撫で、ひとまず現状の整理をしよう。そうしよう。

……………

この街に滞在を始めて早一週間。今回は珍しく長い時間滞在しているが、それには理由があった。

「調子はどうだ、イレイナ？」

「うくん……………もうちよつと、もうちよつとだと思っんですけど……………」

現在イレイナは魔法の研究をしている。剣士である以前に魔女である彼女は、今までの旅の中でも時々魔法の研究をしていたらしい。

「思ったよりも難航しているようだな。そんなに難しい魔法なのか……………」

「そういうわけではないんですけど……………」

俺は魔法に関してはそのまでの知識を持ち合わせてはいないから、イレイナがどんな魔法を研究しているのかは分からない。だからまあ、手伝えることは何もないんだよなあ。下手に手を出した方が危

険だし。

「まあ……何かあつたらいつでも言ってくれ」

「ええ、そうさせてもらいます。それでは早速、こちらを」

「ん？メモ？」

早速と言わんばかりに手渡されたメモ用紙。中には全く用途不明の様々な怪しい物が書かれていた。

「……これは？」

「そこに書いてあるものを持ってきて下さい」

「何も使うんだよこんなの……」

「なるべく急ぎでお願いしますね」

そう言われて俺は外に出る……というよりも追い出された。解せぬ。

「急ぎとは言われたって……こんな何処で手に入るんだよ」

こんなことならもうちよつと魔法の勉強でもしておけばよかった。

この時はまだ軽く思う程度だったのだが……

……

急ぎ、とは言われたものの、かなりの時間を要してメモに書かれた材料(?)を全て入手することができた俺は、駆け足でイレイナの元に向かっていた。時間はかかったが幸いにもまだ夕日は覗いている。暗くなる前に戻ることは出来そうだ。

「これ以上遅れると色々ドヤされそうだ……」

とにかく急ぎ足で戻ろうとしたところで、ふと視界の端にパン屋が映る。パン……そういや時間も時間だし、折角だし夕食代わりに幾つか買っていくか。イレイナもパン好きだし、ちようどいいだろう。

「すいませくん、これと……これと……あ、あとこれもください」

幾つかのパンを選んで購入する。その際持っているものからかな

り怪訝な表情をされてしまったが……しばらくあのパン屋は行けないな……。

しかし、ありがたいことにパンは焼きたてでいい匂いが漂ってくる。これはなおさら、すぐに戻らなければ。

元々急ぎ足だったそれをさらにスピードを上げた。そのおかげですぐに使わせてもらっている部屋に戻る事が出来たのだが……どうにも様子がおかしい。

「あゝ……煙？」

微かではあるが、部屋の隙間から煙が漏れ出ているように思える。魔法の研究をしているのだから煙が出ていてもおかしくはないが……何かあったのか？

「おい、イレイナ？大丈夫か？」

扉を開け、なるべく煙を吸わないように中に声をかける……返事がない。

「……入るぞ……？」

恐る恐る中に足を踏み入れる。中には煙が充満……というほどではないが、うっかり吸いかねないぐらいには煙が舞っている。先に換気、窓を開けて部屋の中の煙を全て外に追い出す。そうして視界をはっきりとさせ、部屋の中を見渡す……イレイナの姿が見当たらない。

「……あいつも外に出たのか？いや、研究の途中で離れるような奴ではないはずだ……おい、イレイナ？」

もう一度呼びかけるが、相変わらず返事は聞こえない。一体どこにいったのか、少し部屋の中を歩いてみたところ、床にあるものが落ちていることに気づいた。

「これ……イレイナの……ん？」

床に落ちていたのはイレイナの帽子。先ほど見た際は被っていたそれが床に落ちていることに気づき、それを拾い上げる。そうしてしゃがみ込んで気づいた。帽子の近くで何やら黒い布が小さく膨らんでいることに。

「なんだ……？」

今までこんなものはなかった、はずだ。少なくとも俺は認識していない。俺の知らないイレイナの私物である可能性は大いにあるが、それがなぜこんなところにあるのか見当もつかない。

「……………」

恐る恐る、手を触れようとしたところ、それは微かに動いた。

「ん……………ん……………ん……………ん……………」

「……………え？」

起き上がり、黒い布の中から姿を現したそれを見て、俺は自分の目を疑った。それもそうだろう、そこにいたのは、まるで幼少期のイレイナだったのだから……………

……………

こうして今の時間に至る。

……………駄目だ、整理したところでまるで意味が分からない。これならばイレイナ本人に聞いたほうが早いだろうが、そのイレイナは記憶を失っている。いや、より正確にいえば、記憶がない時間まで巻き戻っている、といった方が正しいかもしれない。

少なくともこの少女がイレイナであることは間違いない。そもそも俺がイレイナを見間違うはずがない。それに先ほど呟いていた言葉。

『わんだー……………すとー……………り……………』

“ワンダーストーリー”。これは幼少期、イレイナがいつも抱えていた本の名前だ。あれはいつの間にかイレイナが持っていた、この世に一冊しか存在していない本だ。当然その存在を知っている人物の数は相当限られてくる。

「ワンダーストーリーか・・・懐かしいな、イレイナが魔女を夢見てからは、全く見なくなっただけだから」

あの本の内容は今でも覚えている。それほど何度も何度も見た。白紙のページも多かったが、どうにも熱中していた記憶がある。なぜあそこまで熱中していたのかはもう覚えていないが、どうにも心を震わせていた。

内容としては、不思議な世界に“黒い悪魔”が襲来して、それを様々な剣士が迎え撃ち、龍が目覚めさせた炎の剣が自らの剣士を選ぶ・・・ん？

「龍が目覚めさせた炎の剣が選ぶ剣士・・・まるで炎の剣士そのものだな・・・」

それだけじゃない、黒い悪魔を迎え撃つ様々な剣士・・・そこそ水や雷、光に闇などの他の剣士のようだ。明確にどんな剣士がいるのかは描かれていなかったが、あれは剣士の物語なのか？いや、基本剣士の話を組織外で知っている人間はかなり数が限られてくる。

「そもそもあの本、作者も不明なんだよなあ・・・ワンダーストーリー・・・ワンダー・・・ワンダーワールド・・・？いや、まさかな」

「んん・・・んゆ？」

「あ、悪い、起こしちゃったか」

「んー・・・お兄さん・・・誰？」

「・・・え？」

目を覚ましたイレイナは、見るからに警戒心を全開にして距離を取る。こ、これは・・・記憶まで無くなっている？

ただ背が小さくなってしまっただけかと思っていたが、この様子じゃ体も心も子供の頃に戻ってしまった、といった認識の方が正しい。本当、一体どんな魔法の研究に失敗したんだよ、イレイナ・・・。

まあそこは置いてこう。まずはどう説明するべきか・・・。それを考えようとして顔を上げたところで、イレイナが俺の顔を覗き込んでいることに気づいた。さっきのような警戒しているような目で

はなく、まるで観察しているような目だ。じーっと、俺の顔を見てくる。

「どうかしたか？」

「……ユウマ……？」

「！」

まさか、魔法が解け始めた？いや、それなら体の大きさも元に戻っていないとおかしい。しかし、今のイレイナが知っているのは昔の俺だけのはずだが……。

「お兄さん、ユウマに似てる……どうして？」

「似てる……ふふ……そっか、似てるか」

あの頃の自分の顔なんて、あまり気にしたことはなかったけど……そっか、イレイナはそう思うんだな。

「お察しの通り、俺はユウマだ。いいかイレイナ、俺の話をよく聞いてくれ」

……

ちゃんと俺のことを「ユウマ」と認識してくれたためか、最初の警戒がまるで嘘のように大人しくなった。とにかく現状を伝え終え、イレイナは自身の状態を理解したらしい。

「私の未来か……未来の私って、何してるの？」

「未来のイレイナはな、魔女になってるんだ。それで、世界中を旅して回っている」

「魔女？」

「……そっか、まだ魔女を志す前なのか……イレイナ、ぜひ『ニケの冒険譚』という本を読んでみな。そしたら、魔女になった理由もわかるだろうから」

「ニケの冒険譚……？」

ニケの冒険譚は、イレイナが魔女を志したきっかけの本だ。最も、このイレイナに勧めたところでそれは意味を成さないだろうけど。

「ユウマは……ユウマは何をしてるの？」

「今後は俺か？俺は、剣士になった。ワンダーストーリーに登場する
ような、炎の剣士に」

「ワンダーストーリー……ねえねえ、ワンダーストーリーはどこ
にあるの？私、読みたい」

「ああ……悪いな、イレイナ。俺も今ワンダーストーリーがど
こにあるのかは把握してないんだ。そもそもあれは、イレイナの所有
物だし」

「そっか……」

見るからに残念そうに、しょんぼりとしてしまっている。どうにか
してやりたいが、残念ながらどうすることもできない。ワンダース
トーリーの所在も、おそらくイレイナの実家だろうが、そこに行くとな
ると間違いなくヴィクトリカさんと鉢合わせすることになる。魔
法に失敗して小さくなったなんて、イレイナもヴィクトリカさんには
知られたくないだろうし、俺自身も少し気まずい。つまり、どうする
こともできないというわけだ。

「とはいえ、イレイナも元通りにしなきゃ行けないんだよなあ……」
イレイナがかかってしまった魔法が時間で解けるのかどうか、はた
また特殊な方法でしか解けないのか、俺にはさっぱり検討がつかな
い。こんなことならもつと魔法の勉強をしておくべきだった……、
俺は今度こそ、心の中で強くそう思った。

「……仕方がない、一度ロベッタに戻るか」

こうして俺とイレイナは、一週間滞在したこの街に別れを告げ、生
まれ故郷である“平和国ロベッタ”に向かうのだった。